

北辰會雑誌

第八十二號

次 目

- | | | |
|-----------------|-----------------------------|-------|
| ■詩五ツ | 水毛生伊作 | (一) |
| ■宿命の幻想曲 | 石川純一郎 | (115) |
| ■宇宙と勇氣 | 安島 健 | (四八) |
| ■囚徒と豫審判事 | 根本 松男 | (五九) |
| ■富樫介最後 | 本多 秀彦 | (七八) |
| ■三つ葉 | 小山田 滋 | (一一〇) |
| ■付添人の默想 | 山崎 一雄 | (一一一) |
| ■北辰會各部々報、雜感 | | (一一二) |
| ■Frontispiece. | Mariano Benlliure y Grl. | |
| ■Illustrations. | Francisco Goya y Lucientes. | |

北辰會雜誌

大正七年六月

Portrait Bust of Goya

Mariano Benlliure



トスバのヤゴ

詩 五 ツ

ミモズ・イサク

胎 生

運命の絲は神へつづく。

神は無數の運命の絲を抱へて玉座に出た。

(運命の絲は彼等(子供達)の意志によつて選ばれた
神よりの最後の賜物である。)

神が出づるや樂しき父母の祈禱いのりが地から聞けた。

日光は神の中心にあつて眩しく照つた。

遙か真下の白き雲の縁に月光は輝いた。

神は何時も苦しかつた。神は考へた。

「寧ろ凭なんものはやらぬがいゝ」と思つた。

けれども次いで思つた。

「然し現在のところわしにはかなはない」と思つた。

又、彼は考へた。「わしの力が

世界を幸福にするためには」と強く考へた。

運命の絲には貧しいのがあつた。

ひどいのがあつた。ものすごいのがあつた。幸福なのがあつた。

むろん富めるのもあつた。もつと幸福なのもあつた。

高きに立つ又慈愛に満てる神はこれを見て戰慄した。

涙が溢れた。

(彼の涙は曉の草葉に宿つた。)

天使は立ち上つて左の扉を開いた。

そこには眞白な光が溢れ

青き數千の星を箱め、嚴かに地への門扉が見へた。

人はおなかつた。

天使は右の扉を開いた。

そこにある(王國の民なる)子供達は喜に漲つた

無限の鯨波を上げ神を見んと躁暴いだ。

騒には秩序があつた。おのづから調和があつた。

天使は佳き祥を湛へ、微笑をもつて言葉に代へ

彼によつては彼等は神の玉座に呼ばれ、正しく挨拶し
そして彼等の誰もが云つた。

「どうも神様、種々のものを下さるのは感謝です。」と云つた。
それから又彼等は次のことを告げた。

これを戴けば、愈々

此の美しき王國とは長き別離であること、そのことは悲しきこと。
新しき地への出發は如何に愉快であること。

そこへ行けば彼等の父母を如何に喜ばすこと。又

彼等の兄弟姉妹や彼等の友達と仲善くすることや

地を豊かにしたいことを。

彼等の種々の良心と智慧とで

忠實に神に告げた。

(良心と智慧とはすつと前に神の意志によつて選ばれた
神よりの聖き賜物である。)

聖き神は總てに點頭いた。

又、聖き神は、この運命の絲を受くることによつて、
各自の將來がどう變るか。それを想つて嘆息した。

(彼の嘆息は朝時蝶が羽を擴げるところの野の微風に見られる)
優しく輝ける天使が云つた。

(今こそお前達は世界へ行く。

この絲を辿る。

この糸こそ神へつづく。」

天使は云ひ續けた。

「およそ、この中にはこれこそとおもふのがある。

それがお前の地での將來である。」

誰もが神の有難さに溺れて幾度となくお辭儀をした。
慈悲深き然し高きに立つ神は實に氣の毒がつた。
そのとき神は決して神の心意を秘さなかつた。

「わしがお前に授けるもの、それが盡くお前にいゝものとは云はれない。
わしは此所でお前を知つてゐる。地でもお前を知つてゐる。
たまらない。たゞわしはお前を待つてゐる。」

神は決して偽つたのではない。

それが幸なる吉き絲であるや。

神は彼のためにとめ度なく欣んだ。

(この神の欣びは父母の睦みに宿る。兄姉の微笑にも宿る。
夕方、清き山川や庭の花や、木々の葉が
美しい色彩を起すのも、又、同一の欣びによつてある。)

彼等は皆彼等の意志によつて運命の絲を戴き

神の前を辭し、かの光が満ち星が靜まつた左の室へゆく。

そこで彼等は生るゝ時を待つた。

幾十人の後に彼は玉座へ歩んだ。

彼は神を仰ぎ暫らく言葉をのんだ。

それは最後に神を見、地へ生るゝことのとめごなき感激のためであつた。

彼は神の足元に跪まづいた。

やつと云つた。

「神様、私に智慧を下さつたことを有難ふ。」

彼はやつと云つた。「ものを見る眼を下さつたことを有難ふ。」

それから続けて云つた。思ひ出しし思ひ出しして云つた。

「ものを考へたり創つたりする力を下さつたことを有難ふ。」

「種々の慾を下すつたことを有難ふ。」

「世界へ行つたら恩を感じたり愛を享け入れたりする、

泣いたり笑つたりする怒つたりする種々な力を下すつたことを有難ふ。」

「私といふ正體を下さつたことを有難ふ。」

神は一々これを嘉みし納れた。

彼は自から糸を引いた。

あまり派手でないこと、苦しき仕事を含んでゐること、
もてあまされた仕事を含んでゐること。

そのことを心に思ひつゝ引いた。

彼はそれを選ぶより外仕方のなき人間であつた。

彼が運命の糸を身に着くるや勇ましく立ち上り

彼は王國の衣物を脱ぎ捨てた。

(神の王國にゐる子供達は淡れ色の衣物を纏つてゐる。

この色は地ではかの新月の色にのみ見られる。)

そして彼は神に願つた。

「神様、私を眞裸で行かして下さい。」

そしてまた云ひ續けた。次の言葉は皆彼の云つた言葉である。

「神様、私は生れると泣く、涙の裡にあなたを見る。」

「神様、私は生れると叫喚ぐ、叫びの裡にあなたを見る。」

「神様私は笑ふ。私は働く、私は考へる、

水にも、山にも、草にも、一つのものに皆あなたを見る。」

神は點頭いた。それによつて約した。

天使は微笑んだ。それによつて彼は愛された。

「やあ、あなたも見て下さる。」

彼は踊り上つた。

左の室では運命の絲を引いた子供達が
生るゝ時を待ちあぐんでゐる。

今や鋭い歌がそこにはある。涙や微笑や驚駭がある。
戀がある。憎惡がある。味方がある。敵意がある。

凡庸がある。賢明がある。總ゆるもののが今やそこにはある。
これらは皆彼等の未來の相であつた。

地の風は愛の風となつて父母の聲々を地から齎した。
この子供達の大會へ彼は眞裸で現はれた。

現はれるや未來の敵によつて取圍まれた。

嘲笑は先づ第一に彼が眞裸であることに向けられた。

あるものは云つた。

「やあ、眞裸だな。嫌やなカライバリだ。」

傍のものが云つた。「地へ下りてみろ。」

光にうたれてみろ、光は地へ下りる迄、
あるところでは瀧のやうだ。」と云つた。

初めのものが云ひ足した。「あるところでは炎のやうだ。」「自分達はこの衣物を纏つてゐてこそ、その冷さに耐へる。
その炎を避けろ。」

彼は強く信じなかつた。笑つてゐた。

他の或者は離し立て、それから云つた。

「だつてちつとも偉さうぢやない。」

彼は腕を組んで黙つてゐた。

唯、幾度となく心が心を充した。

その心の涯に父母を見、遠いかすかな地の音律を聞いた。

それはなにもかもを横ぎつて來た。

一瞬、一瞬、なにもかもを横ぎつて來た。

仲善き三人の兄弟が片隅にゐた。三人とも歌つてゐた。

一人は立つてゐる。他の二人は蹲くまつてゐた。

立つてゐるのは兄で座つてゐたのは弟達であつた。

兄は彼の唱歌をやめ、彼によびかける。

「やあ、私は生れるとお前のナカヨシだ。」

弟達も云つた。「私達も。」

兄弟は口を揃へて云つた。「これをお前にあげる。」

「これはお前への私の崇敬だ」「これはお前への私の賞讃だ」

「これはお前への私の期待だ。」彼はどうしても答へねばならなくなつたので、
彼は熱情で答へる。「有難ふ。然しこれは返上する。

(さう云つて彼は眼を閉つたが)彼は云つた。

「私は總ての事に對してよき事は心懸けてゐる。
よきものも燃えてゐる。けれどもこれが地でどう咲くか、どう實るか、
燃え上るか、消えるか、まるで解らない。」

「私が地へ行つたら働く、働きぬく、そのことは解つてゐる。
それだけではこれはもらへない。」

私は眞裸で行く。私には眞裸な人間であるのが一番いゝ。」

此時これに答へた兄弟の言葉は敵によつて彈ねのけられ
後から後からも敵は後に名乗つた。

敵の言葉はかうだつた。

「私はお前の敵だ。有力な敵だ 私は初めお前を恐れる。それからお前を憎む。」

「私も、私はお前を愛する。後で敵になる。」

「私も、私はお前と一緒に仕事をする。」

お前が油斷すると其隙を見て手酷く裏切つてやる。」

「私はお前を大いして憎まない。一寸輕蔑する 一寸嫉む。
敵と云へばまあ敵だ。」

「私は總ての中最も残酷な敵だ。誰よりも最後に踏みこゝまり
お前の先に生れお前を憎めるものに加擔する。嫌つてやる。邪魔してやる。」

「私はお前を見出さぬかも知れぬ。見出せば矢張りだ。」

最後に彼は云つた。

「もうそれだけか。」と云つた。

「まだまだある。」と彼等は答へた。

彼は彼等の群を見渡して彼等全體に告げた。

「よし、お前達はお前達のやれるだけやれ。

しつかりやれ。私は仕事をする。私の仕事は絶対だ。

私はお前達によつては衰へぬ。」と云ひ放つた。

敵の潮は引いた（すべての敵は決して悪き人民ではない。）

最早や物静かな時が來た。彼は念じた。

愈々といふ時に見穿らしい支度をせぬやうに然し争鬭なしにとは祈らなかつた。

この静けさを、かの星を鏤めた世界への門扉こそ嚴かに開けた。

王國の光は地へ洩れ神によつて輝かされ力づけられ

サツと地を射た。

子供達は各自の群へ別離を取り交はし、淡水色の衣物を翻へし

運命の絲を曳き、一人、一人、樂しき母の世界へと走つた。
神は最高に昇つて見守つた。

天使は總ての家、——貧しさ家、富める家、——世界の角々の家の扉をたゝいた。

彼は幾十人かの後世界への門扉に倚つて

此の光の路を瞻望めた。

澄み切つた光は光の上へ流れ

地をめざして長き空間をつらぬき

その流路は何者にも汚されず何者にも奪はれず實に絶対であるのを見た。

その清きことに驚ろき彼は涙を流した。

空をうち仰ぎ神に喜んだ。

地は水々しく青々として光つた。たゞ青々として輝いた。

そこには多くの人々が子を待つてゐる。

彼は人々の中に彼の父母を見出した。

彼は神を仰ぎ手を高く差し伸べた。

彼は光へ踏み出さんとした。

彼は引き止められた。

彼は美しい聲を聞いた。「私の心はあなたの爲に封じてある。」

彼はそれに感謝した。

又聞いた。「私はお前を理解する。

私はお前にシツカリ約束する。

私はお前に他意なく味方する。そして直ぐ後から行く。」

そしてその背後には三人の兄弟が

まことに深き顔をして彼を見詰めてゐた。

彼はそれを見た。

彼は踊り上つた。

今こそ父母は彼等の両手を捧げ彼を待つてゐる。

彼は踊り上つた。

光の路に游ぎ出た。

真裸で游ぎ出た。

運命の絲を曳きつゝ今こそ天の老父に別れ、

黒マキラチンを被を被る

アバルバ 公夫人



The Duchess of Alba

Francisco Goya

夕方の風景 その一

この堤にゐれば限りなく落着くことが出来る。

こゝでは三本の木が互ひにくひちがひ

青葉を空にひろげ、どつしりした色彩をつくる。

その秘かな蔭を灌木の群が青き着物を着て踞んでゐる。
水をのぞく。

両手を擴げ、まつしぐらに地へ降りた。

光のうちをまつしぐらに母の懷に降りた。

此時天使は神の厚き意志によつて彼の家に行き母を見守り家を明るくした。

神は最高に玉座しこれを望めてゐる。

(運命の絲は神へ續いてゐる。)

水は淀みなく流れる。小さな魚がひつたり寄り添つて游いで行く。

水田がドンドン四方へついく。まるで宛然湖水のやうだ。

向ふに一つ鋤かれぬ田がある。

そこでは鳥が働いてゐる。馬は鋤を曳いてゐる。

年寄りの百姓がそれをおさへてゐる。馬があるく。ザクザク土へくひに入る。

土が跳ねかへる。

そのあとをシユツシユツと水を滲んで行く。

そこいら中へ土の香が漲つて来る。

草木の匂もまざつてゐる。いゝ氣持だ。

立木の蔭を小さな汽車がゴトゴト走つて行く。

ところどころで素敵に甲高い汽笛をあげる。

遠い並木路を電車が行く。自働車が走つた

人が行く。種々な心が働いてゐる。

南の方を見渡す。ズット山が疊はつてゐる。

山々は地から空へかけてすこしくボツとしてゐる。一つの峯には煙が立つてゐる。

あの峯にはきっと人が住んでゐる。

こゝから見ればどの線もどの線も素直に走つてゐる。が。あそこには險しき崖もあらふ。苦しき谷もあらふ。

石ころにみてる路も、鳴りつゝ淀む谿川もあらふ。

また定かな分業とてはしづに、其處には

長閑かな住民があるであらふ、石切も、杣夫も、農夫も皆ゐるにちがひ無い。

そこでは峯に閉ぢられ森に圍まれすべてに遮ぎられて日は早く暮れる。

すべての者は一日の仕事を終り、峯を渡り、谷を越え

鎌川で足を洗ひ煤けた家へ着く。

女達は機を織る。お食事を整へる。

夫を待ち兄弟を待つてゐる。そして彼等の美しき媚を贈る。

美はこゝらよりももつと純一であらふ。

生活はこゝらよりももつとシツカリしてゐるであらふ。

然し彼等はそのことをあまり知らずにある。

自分はダンダンあたり四邊の風景に疲れる。

自分の肌は汗ばんで來る。

そしてうつとりとしてそこの草根に寝轉ぶ。

日は西へ西へと移る。それを眺めつゝ。

夕方の風景 その二

西から東の空へ落日が大きい曲線を描いた。

私はその光のうちにめざめる。

三本の木の葉がさらさらと頭の上で音をたてゝゐる。

まだ何處かに眠がある。私はぼんやりしてゐる。

いつの間にか、ぼんやりが沈思へ沈思へと續いた。

眼をつぶる。

このぼんやりを、どうかして早く、現のうちへ
絶ち切らう絶ち切らうと努力する。

フイにこのぼんやりのずっと底で私は親しき聲をきいた。
それに誘きよせられて私は全くめざめる。

私は見すばらしい一人の女乞食によつて

徒勞わだだに施物を願はれてゐた。その私を見た。

私は彼女に告げる。

「今は何一つ上げるものを持つてゐない」ことを熱心に告げる。

彼女は立ち上つた。

彼女は瞳をおさへた。

私は知らない。

女人は涙脆弱いのか。彼女は泣いたのかを。
やがて鳥は聲をおさめ、風は落ちるであらふ。

彼女は私に禮儀正しく挨拶した。

彼女は失望して、静かな堤提を水がかきならす音樂を廻りに
よちよち歩いて行く。

日は注きいだ。四方から湧いた。

彼女の襟襷着にまとひついた。それを縁取つた。

私は見送り見送りする。なんといふ彼女の聖聖さだ。

なんといふ美しさだ。

夕方の風景 その三

時間はちつとも止止まらぬ。

人間の力も止止まらぬ。

向ふの田は見事に鋤きかへされ
馬は畔へ出て草を喰つてゐる。

百姓は青々とした畔の角で最後の鍔をふり上げた。

水は水玉を跳ね上げ、鳴りを上げ

田へ押し込んだ。

その有様をニコニコ、百姓が見てゐる。
漣波が一つ一つ光つた。

ごこちもかも赤くなつた。

ふるへる草の葉も、私も、百姓も、

同様にむかうの松が並べる小路も赤くなつた。

私がある三本の木も、

それは殊更葉から葉へと綿密に火を焚いた。

山々も筋筋を返すやうに赤くなつた。

今、百姓は掌を合はし、恭々しく赤き日にお辭儀をした。

あゝ一日が畢り親切な夜が初まる。

空を鳥が黒い列をつくつて質素な歌をうたつて壇へ行く。
月が出相だ。このぬぐはれた空に、空に唯一の寶石が。

將來

月をうかゞへ。

謙讓な月の色を。

よろこびが絶たれ、おまへは仕方なく外へ出る。
深き木立に隠れる。

土の香氣を聞く。それから青葉を。

夜をとほのぐ杜鵑を。

泉は土を破つて進る。

おまへは跪まづく。その泉にフカブカ唇をあてる。

チヨロチヨロ月光を碎く冷やかな水を、一滴、一滴あちはふ。
そして考へるためにがつくり木の根による。

おまへの身體には聖いものは幾つもない。

貴いものも幾つもない。實に當り前だ。

神々、いつたい、あなたは、何が入用で、此の當り前の身體をつくつた。
あなたは私を司配することが出来る。

何故、私を今迄生かした。

「おまへには如何しても仕事がある。

なかつたら、わしはおまへを殺してゐた。

殺す機會は幾らでもあつた。今もある。

然しわしがおまへを殺さぬのは、おまへには仕事がある。」

神々、そのことを心に明らかにしてもよろしいか。

高きを行くものには苦しみがある。

世にあるよりも、もつと酷^{ひど}き型^{がた}で在る。

無數のうちにおまへはぼつちり生れた。

苦しんだ。

得んがために苦しんだ。

求められないがために苦しんだ。

つとめるために苦しんだ。

けれども世間はおまへが生きてゐる間にはおまへを生かさなかつた。

「これだぞ」と云つて、おまへは一つも示さなかつた。

けれども書きつけた。

おまへの忠實はおまへの書き物に血を沸らした。

おまへの熱心はおまへの書き物に魂をつくつた。

おまへは死んだ。おまへの書き物は如何^{どう}しても顯はれた。

此の行き方こそ神より繼げる威儀ある仕事に榮える。

月は梢をこぼれおまへの前に擴がる。

この月蔭に今日一日は潜んでゐる。

この月蔭に限りなき明日は築かれる。

おまへは明日以後にキツとその仕事を手に入れる。

手に入れずにはをかぬ。

酷^{ひど}き苦しみはある。

高き喜びは引力に根ざしてもつとある。

しづめる木蔭、鳴れる泉、あゝ。

そこに宿つてゐる神々。高きをゆくものに力をそゝぎたまへ。

宿命の幻想曲

石川純一郎

その時分、私はY市にゐた。そここのS停車場からY停車場への高架電車の工事は、かなりに進捗してゐた。七月へ入つて間もない日、——それは多分獨立祭から二三日位しか経つてゐないと覺えてゐる——朝から丁度燃え立つ犠牲の腹の中に煩えてゐる様な日であつた。私は此處から十哩程距つてゐるE村へ出掛けるために市街電車に乗つてY停車場へ急いでゐた。そのE村といふのは二つの小草の茂つた丘陵の間に挟まれた、小さくはあるがズルトレヒトの百姓達の朝の合唱が流れる様な極く閑寂な土地で、そこには又、N氏のアトリエが緩やかな傾斜の中腹に建てられてゐた。

私は照りつける日光の下で、勤勉に混凝土を造つてゐる高架橋梁の上の幾つかの小さい姿を眺めながら扇の風を袖口へ入れてゐた。

ふと、私は此の間、ベルグソンあたりに疲れた安價な自由意志論者である一人の友達との間に起

された論争を思ひ出して急に腹立たしい氣持を呼び起した。それは矢張あの眩惑しそうな日光の直射の中に、ショベルを動かしてゐる労働者から發端したものであつたが、その友達が私に別れて電車を下りる前に遺した「自分の行爲に自分自身責任を持つない人間には、データーミニズムは隨分忠實な奴隸だねえ」といふ言葉を思ひ出して甚しい不快を感じた。

しかしやがて電車が停車場前の廣場へ來た時には、私は舊の心持になつて車を下りた。そして私はそれが動かすべからざる公理でもあるかの様に、そこにはあの花賣の娘が立つてゐるに相違ないといふことを豫想しながら石段を上つた。粗く編んだ紺の麥藁帽子の下には、潤んだ茶色の目が落着いてゐて、静かに波打つた白い短いスカートの腰の邊には、腕から懸けられた楊の花籠が休んでゐる、そうした姿を思ひ浮べ乍ら入つて行つたのであつたが、事實は、娘は何處にも見付からなかつた。私は物足りなさを感じた。或ひは人は私には未だそんな事を云ふ資格が與へられてゐない筈だと云ふかも知れない。私は此の娘と話をした事もなかつた。花を買ひ取つたのはただ二三度に過ぎなかつた。私は娘に關して何等確實な智識を持つてゐなかつた。けれども何かにつけてその姿が目の前の幻像となつて映じて來たほどに忘れ難い印象を與へられてはゐた。私は娘が虐げられ、踏みつけられ、素直な心の失はれたものであるといふことは、誰でも娘のちよつとした表情や言葉の断片からも窺ひ得るだらうと思ふ。私が初めて娘を見たのは、矢張この幅の廣い緩やかに上つてゐ

る階段の下のホールであつた。それは三週間ほど以前であつた様に記憶してゐる。私が薔薇の一輪を買ひ取つた時に「有難ふ。旦那様」といふ如何ほししい英語の調子が驚いた私をして、娘の顔を改めて凝視せしめた。その皮膚は一般的の日本人の様に粗雑なものではなかつた。けれどもその髪の毛は赤黒い何れからしても誇り得るものではなかつた。そしてその言葉を口にした時でさへそれに相當した感情は全く凡ての表情の上に反映しては來なかつた。物を買つた時に與へられる感謝の言葉は、全然形式的のものであるといふ條件を考へてもなほ満足せしめられなかつた。

それが最初で、それ以來私は此處に来る度毎に必ず娘に出會つた。大抵はこのホールに、たまには二階の食堂のあたり、それでなければ停車場前に辻待してゐるタクシーの近くに居た。しかし後には私は偶然に逢遇するといふよりも寧ろ努力して會つた。私はいつでもちらとその姿を見さへすれば自分の義務に不足がある様な氣がして仕方がなかつた。その娘が今日は、何處にも見當らなかつた。私はあらゆる隅々へまで猫の眼を向けながら、無益に二三度歩き廻つた。私は人間の病氣や、事情といふ事に就て、全く無智であるかの様に、たゞ娘の居ないのを不審に思つた。しかし九時三十分の發車の時間が近づいて來た時に、私は仕方なしに歩廊に曳かれて行つた。

E 村へ着いてあの小高い丘の中腹に建てられたN の家を訪れた時に、何時も月曜の午前には決して外出したことのなかつたN が今日は不在だと聞いて變な氣持になつた。

「ほんとうに變な日だなあ」

私が三度目に繰返した時に、夫人は豫言者の様に云つた。

「だつて今日は十三日ですもの。」

「アツ！ そうそう。」夫人の言葉が私の鼓膜に達した瞬間に叫んだ。そして、暫らくしてから、

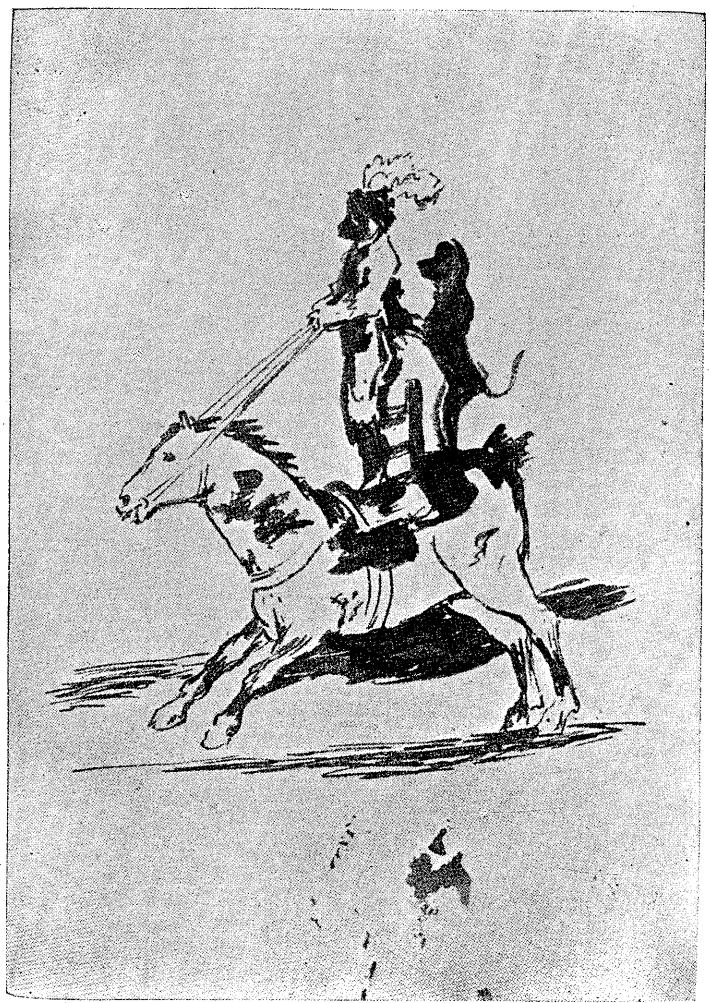
「そうでしたねえ」と、絶望的に附け加へた。

夫人はいきなりサーカスの道化者の様に笑ひ轉げた。私は氣が付いて、餘りのこと自ら苦笑した。今日は十三日にはまだ六七日も早いといふことは、夫人のその言葉を聞く前にはよく知つてゐたのだつた。

私は、八十號ほどの未成の風景畫が額縁に入れられたまゝ、スペインの王様の様に、畫架にはさまれて立つてゐる室で、私の携へて來た用事を夫人に言傳けた後に、N に似て氣作な夫人が傀儡師となつて繰る話に、殆んど我を忘れてゐた。夫人が女中に呼ばれて家事の小さい用のために室を去つた後で、私はニュートンの香の高いカビネットの上に載せられてゐた一冊の本を取り上げて、快

い手觸りに、挿繪を繰つてゐた。私は、その中のある一枚を見てゐる間に、その中の一寸した姿が、私をすつかり恐ろしがらせた。それは漏斗状になつた九環の地獄が示されてゐて、その中に無惨な花賣の娘を認めた。私は急に息を吸ひ乍ら、身體を起した。同時に両手は、無意識に頬に當てられた。私が手をかけてゐたアートの純白な頁には、汗の爲めに五つの指の跡が、犯罪人の指紋表の様に残つた。私は急に本を閉ぢて了つた。そして、舊在つた所に、一分一厘も違はない様にそつと置いた。その時丁度室に入つて來た夫人は、又前の調子で快潤に話し出した。私の恐怖は、じきに無邪氣な歡喜となつて寛いだ。夫人は色々な面白い話をし続けた。此間の集りにやつたツァウベルフレーテは非常な好評を博したとか、Nが戸迷ひして畫室へ入り、手から袂から繪具だらけにした事などを話した。それから夢が少し非現實でなかつたらいいとか、男女の互の愛は自然に對する人類の勝利だとか、そうかと思ふと日本や外國の畫家に對する大膽な獨斷の批評やら二時間程續けた。私は歸りの汽車で、今朝娘が如何して居なかつたのかといふ事を様々に考へた。それからあの恐ろしい挿繪に就ても。

同じ日であつた。私は、常の習慣に従つて、樂しい食後の談笑から明るい街に逍遙ひ出た。それ



Drawing in Sepia

Francisco Goya

は、やゝ辛酸な林檎に似た夕であつた。私は煙草の煙を淡く唇の間から遁れしめながら、電車路に沿ふてY橋の方へ歩んで行つた。

明るい光輝の街をめまぐるしも流動してゐる人々の間に、私は香の高い若い白鳥の群に逢ひ逢ひした。警鈴を響かせながら、幾台となく走り抜ける電車は、郊外の海岸の納涼に志す人々で溢れてゐた。ピアノに似た急調を遺して、自働車は牧場を驅ける獸の様に横切つた。

玩具屋の店には、サイホンの玩具が水を噴いてカラーンカラーン聲をはり上げてゐたし、噴水はセルロイドの小さい赤球を彈き上げ彈き上げしてはゐた。私は華やかな飾窓のかげから

Pelleas et Mélisande の美しい夢の様な調子が響いて來る樂器店の前でも立停つた。寶石商の陳列棚は若い人達の目を金剛石よりも輝かしめてゐた。Y橋から河畔に沿つて續いた花屋や虫屋は、眩い電燈に照らされて、その反射は濃艶な色彩の光輝となつて河水の面に絢爛を極めた織物を作つてゐた。紺と白との市松の圍繞の中からは、街の騒音に伴奏せられて優しい小さい虫の歌曲の Tremolo が漂つてゐた。私は常に夏の訪れと共に感ずる様に、蜻蛉羽の匂やかな衣によつて包まれた、若い人々の偽られぬ肉體の線の快いあらはれを讃美しながらその潮流に入つて右に折れた。その時、私は茫然として立停つて、カンナのストロンチウムに似て燃える色を凝視してゐる娘を認めた。それはあの花賣の娘であつた。私はそれが幻覺でないといふことが、確かに實證された時には、全く恐怖に近い驚

きで充たされて丁つてゐた。私は今朝から懸案となつてゐた問題が、ここで解決された事から當然享くべき満足も、拒絕しなければならなかつた程、餘裕がなかつた。私はあの恐ろしい洞谷の中で、死の封印への呪文を唱へてゐる魔術師の女を見た。

私は或るものに導かれて、直ぐ其處を逃れて、電車の交叉点に近いカフエーの扉を押しした。私はそこで初めて、救助せられた呼吸を静かに貪つた。そして生姜を入れた曹達と煙草とは考へた通りに恢復に効果があつた。時計の針が九時に廻つた時に、私は其處を出て、雜踏の街とは直角になつた薄暗い道を、舞踏會の歸りの馬車の様に、公園の方へ歩いて行つた。其處でもよく繁茂した樹木の間や、噴水の傍らの腰掛や、築山の上の亭などに夏の人々を見た。野球やクリケットや、フットボールなどをよくやつてゐる、一面に芝生の揃つた廣いグラウンドの垣に沿つて前とは反対の入口から、外國の商館やら倉庫やらが太古の城砦となつて立並んだ暗い電車道へ出た。この街道は夜の間だけは全く寂寥に支配せられてゐた。私がこゝへ來た時に、今あの娘に逢つたのだといふ考が急に閃き上つた。そして今朝からの行爲の経過が明らかに速やかに展開されて來た。

暫くして、私はとある四辻を曲らふとしてゐた。そしてその辻に立つてゐる明るい街燈の光は一つの莊重な建築物の玄關を闇黒から照らし出してゐた。その花崗岩の壁には嵌入された一枚の眞鍮の看板——私は曲りしなに Der Deutsch=Asiatische Bank と小聲で讀んだ——が輝いてゐた。私が

燈火の光圏の外へ五六歩歩み出した時に、敷石の歩道の片隅に、飢え死んだ獸の様に蹲つてゐる真黒な陰影を發見した。その影は私が近付いた時に疲勞し切つた様な動作で起き上つた。しかしその瞬間にいきなり牛を待ち受けてゐた鰐の様な敏慧な筋肉が動いてその影は私に取り掛つた。そして両腕を私の肩を越して首の周圍に巻き付けて、私の頬にいやといふほど強く唇を押し當てた。それは接吻といふよりも寧ろ咬齧とも云つた方が本當であらふ。私は不意の衝撃と驚愕とで二三歩躊躇いでから地上に倒れた。暫らく時間が経過した。私は氣が付いて、歩道に横つてゐる自分を見た。私は靜かな蒼穹の下に漂着して横はつてゐる溺死人の様に、V字形の排水溝のところに倒れてゐた。そして急に肘に痛みを覺えた。その時偶然にも私の網膜に、向ふの十字路を右へ折れるものゝ姿がちらと映つた。しかし四辻の街燈は左角にあつて、右角へは極くわづかの光さへも與へることを客んでゐたし、又私との間には可成りの距離が挿入されてもゐたので、實際私はそれが人であつたか、犬であつたか、乃至は街燈の瞬まか、私の幻覺か全く不明であつた。けれども私は無意識にその影を追ふ爲めに立上つた。その時私の心内には侮辱憤怒詰責復讐、そんな考は痕跡さへもなかつた。反つて一種の恐怖をさへ感じてゐた。しかも今は私は追求した。其後それ位の時間が経つたか私は分らない。三分位か或ひは二時間位だつたと思ふ。しかしそれは全くダーラクチエンデであつた。その間の経過は全く漠然とした記憶の端にもあらはれなかつた。兎に角私はある暗い一面に葛の這ひ下

つた倉庫の前に立停つてゐた。その重々しい二枚の鐵の扉には、神祕的に青ざめたB.Bといふ字が恐ろしい暗示に浮んでゐた。多分人はその内部から物凄いElectraの臺辭を聞き取つたでもあらぶ。實際私はその倉庫とそれに隣り合つた同様に暗い家との間へ消えて行つた小さい人の形を見た。それは入つて了つた前に、後を振返つて四圍を見た。其瞬間に私は冰刃の様な恐怖が、凄其を伴つて私の身内をスッと通り貫けるのを感じた。それは確かに花賣の娘であつた。

如何に鋭敏に私の視覺は娘の痙攣的に動いてゐる口輪の筋肉と、不思議に据つた鈍い目とを捕へたであろう。

こゝは甚しくデコボコに煉瓦の敷かれた支那人街のある裏小路であつた。そして脂肪の匂ひと香煙とが迷つてゐた。時折は料理店の二階から勘定を叫び下ろす奇異な音調が異國的な情調を漂はせた。

風雨にその表面を崩壊された凝灰岩の古々しい建築——私はわづかに「廣和號」と記された燻つた金字の看牌を見た。それと倉庫との間の全く狭い小路、それは寧ろ縫隙と云つた方が適當である様なところ、娘の消えて行つたのは其處であつた。私は唯一的好奇心からその洞穴の底に地獄からの一様な弱い光を洩らしてゐる閉された鎧扉の下に忍んだ。

此處の様に海岸に臨んだ土地の夏は、遙か遠くの冷やかな海上に釀される涼しい夜風が非常に快

い安息を與へて呉れるものである。けれども、此の洞穴を作つた四圍の壁は、頑にもこの天惠に反抗した。そのために蒸し蒸してゐて重い空氣の層で壓せられてゐる様に思はれた。

暫らくの間、尖らされた私の聽神經に何物も觸れなかつた。私は空を仰いだ。二つの家の黒い家根は薄明の空を細く限つてゐた。そして時折稻妻のために絶斷的に瞬いてゐた。

「ア！畜生——一體何處をうろついてゐたんだ——こんな遅くまでエ？」

突然鋭い言葉の拍車が私の脇腹を蹴りつけた。

「こつちへおいで——來なつてば！——何んて強情張りな阿魔なんだ。來いと云ふのに來る事ぢやない、エ、！木偶の坊見た様に突立つてゐる。錢は如何したんだい。何處に如何してゐたんだよ。何だ、聾者か啞者か黙り腐つてゐる。口一つ利きやしない。…………」

突然室を横切る荒々しい足音が戸口に近づいた。その瞬間に私は劈く様な、掌で頬を打つ明瞭な音を聞いた。同時に射倒された獸が倒れかかる様な響が扉の裏でして、そのバンネルはミシと呟いた。私は戸口に走り寄つて把手に手を掛けた。けれども娘の憤怒に燃え立つた反逆の言葉も聞かれなかつたし、又悲しげな歎歎の氣配もしなかつた。私の娘に對する憐憫の情は、この事件の勃發が私の久しい以前からの期待の實現であるかの如き、しかし極く内密な喜悅によつて裏切られた。

「この阿魔はもうぞれだけ私の血を啜つて私の脛を噛つてゐるんだ。この水蛭！毒蛇！……」

私は時々朝睡眠から將に覺め様とするある時間に自分の現在の位置を忘れて了つて、高山の頂で軟かな青草の莖を素足で踏んでゐる様な氣がしたり、大きな汽船のキヤビンで、肌觸りの快い天竺縫のベッドに寝てゐる様な氣がしたりすることがあるのだが、此の時もたゞ騒しい言葉が朦朧と残つてゐただけで、實際自分がゐる場所にあるといふ確實な意識は消えて了つて、私の耳の側で、もつと適切に云へば耳の中で、ブブノワが怒鳴り散らしてゐるのを感じた。

「打つたつて放り出したつて何したつて口一つ利きやしない。私の心が裂ける様になつたつて黙つてゐる。手前は何だと思つてゐるんだ。青猿め。私が居なけれど通でくたばつて了ふんだぞ。私の

足を洗つた水でも飲むのが當然だ。馬鹿女奴。……」

私の脈搏は可成早まつてゐた。把手を握つてゐた私の手が油汗で少し滑つたので驚いた。

「又始つたんだね。喧しくつて仕様がありやしない。…………」

上手の方から若い第二の女の聲が響いて來た。それは平靜ではあつたが非常に調子の高いもので、殆んど苦惱を持たずして虐待を受け得る種類の人間である様に思はれた。

「ちつとは静かにしてゐられないのかねえ——始終トンリー爺の犬みたいに、——」

「畜生、何だつて。」

「何だつてとお仰つたところで左様ぢやないか。頭がガンガンして、汗が出て、暑くつて堪りやし

ないよ。」

「貴様は親に楯突かふつて云ふのかい。——水蛭に——毒蛇に加勢して。年百年中狼の足跡を探り廻つてゐる阿魔は、野良犬の味方には適はしい。」

「何だつて。——有難いことには勿体ない程な雛形が澤山ある様だ。それからそんな甘口ばかりぢやない刺の様なのも可成りに——、」

「エ、忌忌しい。何て口の減らない女だ。貴様なんぞはもうわたしの子ぢやない。地獄へでも墮ちるがいゝ。」

「そうでせう。誰の子だかは神様だけが知つてゐらつしやるのさ。世の中の子供は親を本當には知つてゐない筈だ。」

私は急に強い衝撃を右の肺臓に感じた。その言葉は確かに子供は「歡樂の小鬼の惡戯」に過ぎないと云ふ餘韻を曳いた。突然母親のある激しい忌はしい呪咀の言葉と同時に、壁に抛げつけられて粉碎する陶器の様な響が四圍の空氣にアム・プリ・チューードの大きな波動を傳へた。私は、子供に、ある時期に達した時には親に對する反抗の感情や態度の見られる事は、正當な自然だとして認める。憎悪は愛の密接した隣にあると信じてゐる。けれども、その間の争鬭に呪咀の叫の聞かれる實例のいくつかを其後見聞きして忌はしい氣に度々なつた。初めてその一つに遭つた時には、唯その理由だけ

で健全であつた私の消化器が病的になつて了つたほどであつた。それだから今度も全く私は自分が殴り倒され蹴飛ばされ唾を吐きかけられて「ざまを見やがれ」と云はれた様に、屈辱と悲憤と復讐を感じた。私は水に撒かれた樟脳粉の様に小さな粒がクル／＼意識的に自轉しつゝ曲線を描いて動いてゐるのを目の前に見た。罵詈、呪咀、悲鳴、喚叫、指を握ること、筋肉の緊張、切歯、戰慄、呼吸の濾難、鋭い目、殴打、破壊。私は事件の進行を考へながら手を爪の様に曲げて唇を噛んだ。

一般に激情を示す様な態度は相當した感情によつて影響せらるものであるが、私のこうした表情も憤怒の上に大なる助言を與へた。私は叫んだ。

「悲鳴、愁訴、悲嘆、それ等のものゝ漲つたあの黒い空氣の渦巻く中に俺を置け。あのミノスに代へて俺を置け。俺はこの一家の奴原に、一體俺は何度尾に身を巻くべきであらう。そんな手温い事では甘んじられない。俺に三つの頭が生えろ。それから尾が欲しい。それは蛇になつてゐるのだ。朱の裂けた目、脂ぎつた眞黒な鬚、鋭く磨かれた爪、それ等も要る。それとも…………」

その時私は實際ブルトの忿怒の言葉を聞いた。

その日から暫らく前脳の邊に色々な像が繰り出されてチラ／＼するので惱まされた。マルコを抱

擁してゐるトウリスタンや、チプロ島の王妃のミルラや、そうかと思ふとあの母親の姿——私は決して見はしなかつた。けれども脊髄の緊張、骨部の疲勞、そう云つたものゝ反映してゐる不快さうな容貌は確かにあの事件の起る前、鎧扉の下に耳を寄せた時に脳裏に寫つた。——又あの娘の像も、より親しく往來した。

數日の後Zへ行つた歸途をE村に寄つた。それはもう夜で、空には月の船が叢雲の間を走つてゐた。Nは大變な機嫌であつた。私は龜屋の包紙にクシャ／＼と包まれた餼を見付けて点頭いた。談話の間に私は先日の出来事を話した。どうしてか私は前半を省いて、しかし思ひ切つて潤色を加へて話した「其處では十誠の總てが蹂躪されてゐて、罪惡は夜毎日毎に床の隅に堆くなつた。その家庭には淫爛な腐肉の香が漲つてゐたし、心も肉も断り訶む様な殘虐があつた。しかし私はその娘に同情の泡沫の一つでも與へはしない。私は一家を呪つてゐる。黒薔薇は他のものを作ることは不可能です。」

「マア待ち給へ。それから考へて見給へ。」Nは両手を大きく擧げて頤をちょっと突出して云つた。
「あの未來の王國！　蒼空色の宏大な宮殿！　そこに此現實の世を憧憬し乍ら、そしてあの卵白色の扉の開かるゝ毎に窺はれる瞬の埠頭！　黃金の帆を張つた船！　さては遙か地球の方から漂つて

来る優雅な音樂。それ等を未だ生れざる兒は如何に見聞くであらうかを。——「時」！——砂時計と

大鎌とを持つた「時」の目を掠めて、幾度かこの王國を逸し去らんと無効に試みた事であらう。

かくも熱望した世に一度送らるゝ時は又如何。壊滅せる家庭生活。愚劣なる學校制度。蒙昧なる父母。無智なる教師。嗚呼初めて青き衣を脱せるあらゆる小兒は、或ひは「Körperlich」に或ひは「Geistig」に、その福祉を毀傷せしめられ破壊せしめられて丁ふのではあるまいか。汝等愛すべき小さきものよ。汝等が遙かに聞きし音樂は實に「小兒の叫喚」であつた。それは認め得ざるランカシャアにも露しきものである。』

私は何度も言葉を遮らうとしたけれども無益であつた。

「嗚呼聖く又淨かりし身も心も、惡用せられたる親子關係の鬼のために、濫用せられたる子弟關係の惡魔のために、傷ましくも遂に瘦衰せしめられ、萎縮せしめられ、脹満せしめらるゝに非るか。君よ、花賣の娘に憫みを與へよ。又その姉に然かせよ。絶えざる頽敗の刺撃は阿片となりて良心を癪痺せしめた。しかもなほ君は不幸にも虐げられたるものに呪咀の叫を與へんとするか。今日の彼等は實に家庭そのものゝ、社界そのものゝ所産に外ならぬ。君は灼熱せる鐵柵によりて彼等の眼を貫き、しかして彼等が道を得ざるの故を以て炮烙の刑に處せんとする暴君に倣はんとするか。……」

私は堪らなくなつて叫んだ。

「こんな家庭に生れた子は、生れた時に、否もつと以前だ未だ生物的な發育の時代に、左様だ、或ひはもつと以前のケーニッヒの頃だ。既に神様は惡逆とか淫蕩とかあらゆる毒を塗つた矢に彼等を運命の闇の樹にしつかり射どめて了つてゐる。」

「成程、青い下等なバウロだ。」直に彼は戯奴の技巧の洪笑に反身になつた。

「實例を擧げませうか。デューケンス家は一人の狂妄な大酒家から始つて七十五年間に、二百人の盜賊と殺人者を出しました。九十人の醜業婦も、それから……」

「今度はダーウキンの廣告屋か。大分上手だ。」彼は眞面目になつて云ひ乍ら、煙草に火を点けた。

「左様です。遺傳も人間を支配する一つの勢力ですから。他の力の例は……」

「いけない／＼。一羽の燕ちや夏は知れない。」

彼は突然大聲で云つた。膝に抱かれてゐた、彼が今度初めて擧げた幼兒が驚いて目を見張つた。彼はその顔を窓と見入ながら云つた。

「葡萄の様に瞬いてゐる眼、和蘭石竹の様に微笑した唇、張り切つた薔薇の頬の下には、暖い血が漲つてゐるし、身内には酒瓶の酒よりも遙かに芳醇な生命も湧いてゐる。——あの優しく力強き藝術品を思ひ給へ。僕達はその眸から虚偽の光を認め得やうか。其唇から邪惡の響を聞き得やうか。——

この世の中の親達は、賢い正しい子とは糸を操らなくては動かない一個の操人形たと思つてゐる。そ

れは何物にも觸れない手と、何を見ても欲望で輝かない目と、決して床の上を晝立てゝ歩まぬ小足と、物云はぬ舌とを要求する。そして親の既定的權利は、笞により餓により誤想された最善に導く。そして哀れな被害者は、耻辱と恐怖とから道徳的な羞恥も同情も奪はれて了ふ。子供は成長する。悪魔が作つた臭の烈しい Myrrh に凡ての良心の優い香を失はせて了ふ。そして直に生命は臨終の床に移される。」

「左様ぢやありません。人の運命は明らかな太陽の中に生れない前に、左様です、生物としての存在の動機を與へられたインスタンントに既に含有せしめられてゐるんです。それが後になつて残酷にも發達して行くのです。子供はニイチエの Aus sich rollende Rad ではない。他から轉せしめられたジア イロスコードです。その與へられた軸の方向は生温い教育などでは容易に變せられはしません。」

「君は盲目になつてゐる。もしかの娘達が腐敗した家庭の雰圍氣からもつと早く救助せられて居たら如何だらう。そしてモンテッソリーにでも托されて居たとしたら如何だらう。」

「矢張り結果は同じです。よく云ふぢやありませんか。蘇格蘭の谿谷を馬車で旅する一群の旅客には、その谿は人々に同じ谿であつて旅行の間は同じ境遇に置かれる。しかも畫家は其處に寫生の題材を選び、魚を求むるものは釣を垂るゝに適き淵を見、地理學者は隆起せる海岸や氷海の細屑棲石に

着眼する。しかしそれは選擇ではない。自由ではない。與へられたものです。それにモンッテソーは所謂教育家ではありません。自分でも云つてゐる様に親切な注意深い傍観者です。小兒の内に所有するものを啓き出すので、決して有せざるもの附加するのではないでせう。矢張り與へられた運命の方向は變せられはしまますまい。勿論私は境遇や教育の力を尊重したい。けれどもそれは運命の上に絶対に君臨することは出来ません。行爲の上に無上命令となることは困難です。私は人の運命を決定する力を私は色々考へてゐますがその一つの力として又最も力強い力として生殖の神聖を考へてゐます。獅子の子の老人が青年に云ひました。「自分の生んだ兒供の生命を大切に保護するだけでは親の總ての正義が充たされた譯ではないぞ。如何なる人でも、一刻も速やかに何故又何時子供を生む権利を手に入れたかを繰り返へし考へる様にならなければならぬぞ」つて。それを考へて初めて教育が有効なものとなり、環境は力を獲るでせう。又遺傳を考へなければ生殖は無意味になりますが。その遺傳も可成り制限されるでせう。あの娘は幾度か打たれもしました。空腹でもありました。そんな森の獸だつてあんなに無惨に、あんなに寂しく世を送つてゐるものはない様に見えます。けれども私は同情の涙の一滴も與へられません。それが必ず惡の傳達者となり、禍の蕃殖者となるだらうといふことを思ふと、全く呪はしい氣持になるんです。」

私はミスBを訪問するため、佛蘭西領事館の角から坂を上つて山手の大通に折れた。やがて私はマウソンでも圖案しそうな門を入れて、家の左側へ廻つて大、きな窓をノックした。それはEへ行つた翌日であつた。

「誰れ——」といふいつもの調子を聞くとすぐ、カーテンが搖れて、窓が明けられて、Bが顔を出した。Bは帽子を軽く傾けて被る種類の快活な女で、あまりに巧妙すぎるほどに刹那刹那の感情を表現する事が出来た。そして小公子のセッドリクを無上に愛してゐた。

挨拶の済んだ後、私は「お庭でお話しませう」と云つたので、「そう。それぢやあ」といふ言葉を残

して室の左寄りの入口から消えて了つた。

私は明け放された儘の窓から室内がよく眺められた。爐の上の壁にはゴシック風のマドンナとその子とを織り出した織物が落付いてゐて、マントルピースの上には古さうな人形の五つ六つが、それから真直に通つた天井の蛇腹、日蔭臺の様に垂れた燭台と、白い長い五本の蠟燭などが駿かされる様な調和を保つてゐた。私がちつと伸び上つて見た時に、爐の傍の臂掛椅子が目に入り、中に投げられた市松模様のクションが續き、その上に載つてゐた第三のものがその瞬間に驚愕の係縛を投げ掛けた。私は塔の上の番人の様に、あらゆるものに視線を投げたけれども、他にはそんなに強く私を打ちつけるものはなかつた。それは白い楊の籠で花賣娘のものと全く同じものであつた。

私は激しくならうとする呼吸を制しながら、藤棚の下で、テーブルの上に置かれた花鉢の水の上に、今摘んだ薔薇の七八輪を浮べてゐたBの所へ走つて行つた。そして突然の「あの籠は何んです」といふ言葉で驚かした。暫くして、Bは云つた。「惡魔の籠ですよ」私はスウキンクスの様に立つた彼女を見た。私は冷たいお茶とドゥナツの皿とが銀の盆に載せられて運ばれる迄、落付かない不忍耐の氣持で謎を解かうと努めた。けれどもお茶の一口を飲んだ時には、リキューールの快い香りと、レモンの柔かな色とは、少なからず私を平靜に復せしめた。その後Bは語つた。花賣の娘は、その母親がBのある友達の家にコックをしてゐた男と一緒に前に、既に子であつたといふ事、今は其男とも分れて、ある異國人と同棲してゐるといふ事、娘を彼女が知つてゐるのは、母親がある早い労働に從事せしめ様とした時に、より以上の收入があるといふ事で、頑な母親を漸く説服して花を賣らせる様にした事からだといふ事を僅かに云つた。私は、あの夜の記憶からもつと深刻な混乱した内情を想像した。けれども、彼女の拙なく強られた拒絕を見抜いて、より以上の探研を棄てた。もう私は更に尋ねる必要はなかつた。私は誇大し過ぎたかも知れない空想で寂しい心持になり乍ら此處から見下される海の様子に眼を遣つた。それは緑の拗薬に似て、滑らかにはるばると擴がつてゐた。其中に、防波堤は纖い腕を圓く差し延べて夕暮の港を抱いてゐた。その端の赤と白との燈台の邊には、鷗の一群が密集したり、解散したりしてゐた。私は夕陽に燃えた帆を張つて軽く滑

つて行くヨツトを見てゐた。

Bは密かな溜息を吐いてから、淋しい曠野に獨居る様な調子で云つた。

「それが、とうへん大變な事になりました。——異母兄を殺したんです、一昨日。」

私は、私の今思ひ切り浸つてゐる空想の中にそれを聞いた様に左程驚きもしなかつた。私はなは茫然とヨツトの跡を追つてゐた。

「家庭の紊亂と母親の虐待が、精神に異状を來さしめたのだと申されて居ります。けれども可愛さうですねえ。肉體が存在し續けて來た事さへ奇蹟の様に思はれるのに、どうして教育なんかを申せらるものですか。兇惡な犯罪は幼時に萌芽するといふ事は、確しかロンブローンに云はれてゐます。不幸な兒ですねえ。」Bは黙つた。私はBの言葉から、昨日の夜のことを考へた。

その夜、人々は土耳其浴場の息苦しさと、止め度もなく滲み出る汗とに悩みながら、幾度も幾度も寝返りを打つた。

狹隘な闇の室には、五個の人が縛首の苦しみに煩えながら、淫な姿に亂れ横つてゐた。そして時折波の間の藻の様に靡いた。沈澁した大氣の中に、夜は漸々更けて行つた。古い甕に封せられた者の聲が一時續た後に、娘は突然起き上つた。そして亂れた長い髪と白い上身の膚とをもつて、祕かに間諜の足どりに姿見の前に忍んだ。闇の鏡には、娘の姿が臚に戰き乍ら浮び上つた。それは深い

森林の奥に祕められた沼澤の葦の間にあらはれた鈍く光つた水面の様に思はれた。

忽ち宿命の黒雲が飛んだ。そしてその核心を見詰めてゐた鏡の中の眼は、慧星の尾を曳いて走り去つた。娘はある發作から「亂業の果」の床に横はつた一つの男の姿を抱いた。その後のある瞬間に、逆手に握られた閃光が男の咽喉に射し入つた。或物がはじき出て四圍に沫いた。同時に高い銳い叫びが自分に飛び出した。なほ二三度ぐりぐりと墓穴を剗つて光つた。泉の音を立てゝ鮮血が湧き上り、噴き、迸り流れ出て、四圍に死の匂ひを散り擴げた。間もなく野獸の様に荒々しく跣くのが止んでからは、鈍く沈んだ絶望と苦痛の呻吟が續いた。男は身動きもしなかつた。たゞ筋肉の幽かな部分の痙攣が名残となつて殘つた。闇の鏡は青白く慄き、聲なき死の節奏を繰り返してゐた。其以前に、そこに互の肌は煙り合ひ乍ら「邪な禍」が燃えたのであつた。

急に忍び足に過ぐる小さき影を見て、私は眼を見開いた。その瞬間に變態性慾の狂者のやりさうな、あの夜の娘の衝動的な動作がチラッと走り過ぎた。

丁度その時、淫亂な西の空には、花賣の娘の肉体が突きさいなまれて、鑛質の燃ゆる血潮に塗れて、宿命の十字架に掛つてゐた。

宇宙と勇氣

安

島

健

青ぞらの 青ぞらの

いくら行つても青いそらの

この宇宙はどこまで廣いのだらう

そのことを考へてゆくと

心が自分の身体に歸れなくなるやうな心細さを感じする

たゞ眞白なものがざらざらと光るのを感じする

眩しさに氣が遠くなるばかりだ。

おお。この自然の豊かなことは！

何といふすばらしい豪放だ

しかも何といふ氣味のいゝ放膽だ

善いものも美しいものも

惜し氣なくつひやされ

氣がかりさへなく捻りつぶされ

瀑布のやうに恐ろしい勢で後から後から駄目にされる

然しながら おお。自然のこの豊かなことはどうだ！

見ろ 實にまあ見ろ

善いものや美しいものが

若苗の萌えでるやうに

夏雲の涌きでるやうに

續々として後から後から生れてくる。

悪いものや醜いものや

言ふまでもなくこれらもまた息の室るほど躍りだす。
しかしこのすばらしい大宇宙の中にあつては、

善いにしろ悪いにしろ美しいにしろ醜いにしろ

遠慮も躊躇も選擇もまるでなしに

一刻々々に費やされ

片づばしからぞしそし駄目にされ

その傍からまた際限もなく創りだされる

いつでも活々として新鮮な自然よ！

實に何といふすばらしい豪放だ

しかも何といふ氣味のいゝ放膽だ。

もちろん善いものは堂々としてゐる
美しいものははじめから端然としてゐる

悪いものや醜いものはむろん成り損ひにすぎないが
これらの間に争ひはやはり免れがたい

然し放膽な自然は平氣で私達に任しておく
善いものを榮えさへ

悪いものを撲滅する仕事は

最初に私達にさづけてより以來

まるで私達の手に任せられてある

掃除や整頓のさういふ小さな仕事は

私たち卑小な者にちやうど適してゐる

それが微力な私達に精いつぱいの仕事だ

大きな自然にとつては

かういふことは餘り氣にならない

善いにも悪いにも片づばしから駄目にし

美しいにも醜いにも關はずぞしそし創りだす

何といふ自然は氣味のいゝ豪放だ！

いと小さきものゝ人間どもは

無邪氣にも可愛い愛嬌者だ

めいめいに操つたいやうな顔を見合せながら

お互に真似しやうと見はからつてもぢもぢしてゐる

喉がびくびくしても尻がむづむづしても

自分一人だとどんな小さなことにも手が出せない

新規なことを自分からやり創す勇氣がないのだ

人々を善人だと信用する者はそつと善をやつてみる

人々が悪人だと信じた者は

きよろきよろしながらそつと惡をやつてみる

この信頼を持たないでは人間共は

善どころか惡どころか

何一つやる勇氣のない愛嬌者なのだ。

おお。宇宙の廣さ！

おお。自然の永さ！

考へて見やうとするほど愚だ

なさけないほど廣い宇宙だ

そこには實に無限の太陽達が居る

そしてまた無限の地球共がそれに伴ふ

一瞬間に無数の太陽が消えてなくなり

一瞬間に無数の太陽が新に生れて輝きだす

じつにそれほど昔からこのことが起り

しかもどれほど永くそれが續いてゆくのか

まつたく考へて見やうとするほど愚だ

ぎらぎらと白いものが光るだけだ

眩しさに気が遠くなるばかりだ。

おお。私はいまこそ想ふ

私達の太陽が未だ生れぬ先に

宇宙のやはりこの位置に於て

如何に無數のこの太陽が現れては消えたことか

私達の地球が未だ生れぬ先に

やはりこの軌道を通つてめぐる

如何に無數のこの地球が現れては消えたことか

ああ。私は更にいま想ふ

すでに如何に無數のこの地球が現れて

如何に無數にこの日本の國が存在し

そして更に如何に無數にこの私が既に生存したか

さうして如何に無數に私のこの手によつて

以前すでに何千億のこの同一の詩篇がつくられたか

ああ。既に如何に無數にこの私が生きてきたか

おお。白晝の日光がいま私の心を擊つ

眞闇から俄に白日にさらされたこの心の動悸

ああ。こればじつに何といふ歎だ！

信せざるを得ないこの正確な歎の前に

私の歎喜の涙が泉のやうに快く溢れる。

ああ。無數の私が居つたのだ！

そして私の後にもまた

永久に無數の私が現れ生れて

この歎喜の前にかくの如く泣き

永久に繰り返してこの詩篇が作られるのだ

ああ。無數の私がじつにゐるのだ！

宇宙の廣さと永さとはまつたくどうだ

おお。この怖ろしき事實の正確さは！

私以前の無數の私たち

私以後の無數の私たち

どれもどれも寂しい一人ぼつちの私たち

今ここに夜の星のやうに見かはし

野邊の花のやうに微笑し合ふ

おお。この壯嚴なる歡は何に例へることができやう

ただ私は涙を流す

この大歡喜の前に聲をあげて泣く。

私は今こそついは救はれた

私はもはや決して一人ではない

一生を一人で血まみどろになつて苦むところの

無數の私とともに

純粹な完全な理解と愛とによつて

つねに永久に手と手をつらぬ

楽しい微笑を送りかはし

破ることのできない相互の信頼によつて

私は勇躍して自分自身を進める

いばらの中にこの肉身をつき進める

ああ。今こそ私にそれができる。

ああ。なつかしい無數の過去に生きし私よ

ああ。なつかしい無數の未來に生くる私よ
宇宙よ 永遠よ そして歡よ

私は今こそ永久に救はれることができた

私たちの愛は絶対なるが故に

私たちの理解は純粹なるが故に

私はもはや何一つ恐れる必要はない

苦難と寂寥とは私にとつて最早や樂みだ

私は安んじて私自身のものを

烈しい勇氣と堅い自信とを以て

一つ一つやり抜くのだ。

この現在は今こそ歡喜だ

この苦しさこそは歡だ

私はついに歡ぶことができた

生きの現在こそは貴いきはみだ

じつに現在こそは歡の絶頂だ

ああ、永遠に亘る無数の私の姿

永性を獲た私の苦難のすがた

おお。かたじけない

永遠は私の現在だ！

歡よ 欽よ ついに私に爆發した歡よ！

見ろ 私には歡がある

こんなに勇氣に充ちてここに私は立つ

大宇宙こそ稱へられよ！

おお。然らば私の仕事 私の職務

私は渾身の力を奮つて今それにぶつかる！

（大正七年五月二十四日）

囚徒と豫審判事

根本松男

囚徒。（有罪と豫審決定せる日の夜。寝床に仰臥して）

××地方裁判所の公判に附す一か。愈々有罪と決つた。一今夜はよほど頭が落着いてきたやうだ。

こんな事なら白状してしまつた方がよかつたかも知れぬ。確かに自分の仕業だと。——でも裁判官てやつは恐しいやつだなあ。平氣な顔をして、俺の仕業に相違ないと言ふ。俺が故意に押したのだと、あたまから決めてゐる。何う推定するのもいゝさ。何と判断するのも勝手さ。けれど、どうしてあんな判り切つてるといふ顔つきが出来るんだらう。豪いのか、無鐵砲なのか。

何だつて？「貴様はあんな巧妙な手段を講じて、過つて墜落したやうに見せかけるつもりだつたのだ。さうだらう」だつて？馬鹿にしてらあ。何が巧妙なものか。本當に殺す氣でゐたら、俺があんなへまをするものか。あんなに人の多勢ゐる前で！——してみるとあの判事もあまりあたまはよかなさゝうだ。「巧妙」なんて言つてゐるのだから。何とか言ひ込めてやればよかつた。いまいましい。けれど、どうして俺はあの判事を恐がるのだらう。審問の後で、いつでも「今度こそ」と思つてゐても、あいつの前へ出ると、妙にかたくなつてしまつて、口がきけない。あいつの顔を見ると「何と言つたつて俺が悪いんだ」といふ考ばかりが強くなる。そりや俺が悪いに違ひないさ。確かに——確かに俺が突き落したのだもの。然し、私は知りません、そんな事はしませんて答へたら、さうか知らと位は考へ直して呉れてもいゝぢやないか。何と答へやうが「貴様がしたのだ」と言ふなら、初めから聞きも調べもせずに、監獄へ入れて首を斬るなりしたらいゝのに、何度も何度も聞くから、此方でも其度に、知らぬ、知らぬと答へるんだ。その揚句が「貴様に相違ない」ぢやまるで理窟に合はない。が、本當のところ、自分に相違ないんだから仕方がない。でも、「前から殺さうと心構へてゐた」とは何事だ。何處からそんな斷定が出て来る？これも商賣人の直感か？冗談ぢやない。——やつぱり本當には判つてはゐないんだ。無鐵砲な、いゝ加減な當推量に過ぎないんだ。恐がるだけ此方の引目だ。何處までも頑固に、無鐵砲に、總



Drawing in Sepia

Francisco Goya

て否定してやらう。背中を割つて、熔かした鉛を注ぎ込まれてもいい。かうなれば意地だ、どうせ人を殺したからだ。

公判は何日だらう。今度は多勢の前で、又同じことを訊かれるんだ。此方も同じ事を答へよう。
——そして、やはり又「貴様だ」と言はれたら? 「前からの計畫だ」と言はれたら? 判決が下つたら? ——さうしたら控訴だ。行けるところまで行く。どうせとんくんだ。どうせもう彼女のために棄てた命だ。

戀は命がけだ。自分は一個の人間である故に、他の一個の人間の總てに對して自分の總てを投げ出すことは、不可能でも、不合理でもない。——かう日記へ書いたこともある。彼女は死んだ。最後の瞬間まで俺を思つて死んだ。俺も死なう。俺だつて彼女を戀ふる心は變へやしない。

彼女を殺したのは俺だ。俺はそのために監獄にある。たゞひ死刑にはならなくとも、どうせ長生の出來ぬ弱いからだ。みじめな死に様をするであらう——彼女が意外にもあのやうな最期を遂げたと同じく。けれどそれはみな枝葉の問題だ。偶然によつて變化してゆく小さな外部の事情だ。大本に變りはない。彼女は死ぬまで俺を戀した。俺も死ぬまで彼女を戀する。それだけでいいん

だ。あんな判事は愚か、世間のやつ一人にだつてこの心がわかるものか。

F子！

今さらお前にあやまつたつて詮ないことだ。俺もいづれ死ぬよ。法律によつて、直接か間接かに殺されるんだ。死んだらすぐ前を尋ねて行く。

お前が今、俺をどんなに恨んでゐるかは、よく判る。呪ひに呪つてゐる事であらう。あの刹那、「だまされた！ やつぱり！」と思つて嚇となつた事であらう。無理もない。俺はやはり眞かひの悪人なのか知ら。昔は確かにさうだつた。そして、悪者は決して長く榮えるものでないことを覺悟してゐたものだが。やはりいつまでも悪人なのか知ら？

俺は何か起る度に「これで俺の生涯も終るのであらう」と考へては年を取つて來た。お前に出會ふ前の自分は、單に四人の女と三人の男とに對する戀及びそれに附隨した惡事だけでも、もう死んでもいいと思つてゐた。「どうせ君はいゝ往生はしない」と人にも言はれ、自分でもさう思つてゐた。人の怨み、人の呪ひに形があるものであつたなら、俺は、自分の圍りに群るそれ等を見てゐた。

て氣絶したことであらう。その中のただ一つのためにも俺は死ぬ價値がある。——これだけのことをしてゐ乍らも、やはり俺はそのまゝ生長した。一人の男は、眞にただ俺の存在が原因にて死んだ。その時は俺も隨分心苦しかつた。まだくと思つてゐる中に、意外に早く死んでしまつたのに狼狽した。けれど俺は、自分のために死んだ人間のあることを得意がりさへした。そして「進むためには死骸も踏み越えねばならぬ」とほざいた。

三人の女は、俺の爲に婚期を失つて、今だにみじめな境遇にある。殊に最後の女は、恐らくこのまゝ死んでしまふであらう。「君はどうしてそんな残酷な眞似をするのだ。あれだけのことをして得たあれほどの女を、君は見殺しにする氣か」と友達に責められたときに、俺は平氣で「でも仕方がない」と答へた。

其の俺に、何の因果か、お前は懲をした。そしてしまひに俺に殺された！

それだけだ。簡単である。今の俺はやはり昔の兇惡な俺だとすれば何でもない。だから人はみなさう思つてゐるのだらう。あの判事もさうだらう。そしてお前も多分さう思つてゐるに違ひない。然し俺自身は、昔と今とは大變な違ひだと自惚れてゐる。自分は確かに善人になつたと信じてゐる。どうかして俺の本當の心を言ひ表したい。

お前は實に俺にとつて、最初にして最後の女だつたのだ。俺はお前によつて初めて女性の深み

を知つた。容貌に於ても、智識に於ても、一番低いお前が、然も最後に來て俺の魂を喰ひ盡したのだ、友達の言を借りれば、實に「奇蹟」である。俺は最初自分の墮落を悲しんだ。次に経験者の大度によつてすべてをあきらめた。次に謙讓者の幸福を知つた。次に眞と善とを知つた。そして決心して、お前に結婚を誓つた。

弟にお前のことと言つてやつた。何もかも知つてゐる弟は、俺の決心に賛成して、一日も早く結婚なさいと言つて來た。そして、その未來の姉さんの寫真を送つて呉れと書いてよこした。その手紙をお前に見せたとき、お前は耻しさうに顔を赤らめた。可愛いゝやつめ！ どうしても耻しくつていやだと言つて、寫真を送るのを拒んだ。俺は又、お前をよりよく安心させる爲に弟と文通させようと思つてその旨を言つてやつた。直に弟からお前の許へ手紙が行つた。するとお前は、筆蹟が似てゐるところから俺が偽手紙を書いたものと猜疑した。お前はひとりして腹を立てゐた。わざ／＼俺と會ふ機會を逃したりしてゐた。俺はあとでそれを知つて、情けなさの限りを感じた。怒るにも怒れず、笑ふにも笑へず、震へてゐた。又お前は、俺のことを友達に何か悪く言はれたために、極端に俺を疑つて、危く俺に叛かうとさへした。俺の手紙を封も切らずに捨て、置きさへした。さうした痴行は日に日に募つた。それでも俺はちつと忍んだ。まだ俺の

愛の足りないことをのみ獨りで悲しんでゐた。——こんなことが昔の俺に出来たか！ お前は何時か俺に女王として臨んでゐたのだ。俺は甘んじてその前に平伏してただ恐懼してゐた。俺のただ一言が、二人のこの位置を轉倒せしめ得ることはよく知つてゐたが、やはり俺は黙つてお前のしもとを耐へ忍んだ。——人間もかうまで變るものであらうか。一人の女を救ふといふ善行が、荒んだ俺に快い刺戟を與へたのだ。又、誓言の嚴守が、俺にも、俺のやうな男にも、不可能ではないことを人に知らせたくもあつた。又殊勝氣な「罪亡ぼし」の希望も加はつた。要するに俺にとつて絶好の試しだと思つたのだ。俺はかう信じた——これまでにして、もしも又自分の心が變つたりしたら、俺はもう此男と女との世界に生きてゐるべき人間ではない、と。そしてその結婚の決心の傍に、それと並べて死の決心を置いた。「何うあつても約束通りにしてみせる」と俺は始終唇を噛んだ。「もし、又も君が彼女を棄てるやうなことをしたら、もう僕は君を人間とは思はぬ。けだものと思ふ」と友達は口を揃へて言つた。俺は微笑んで、「あゝいゝとも」と笑つた。死を覺悟した人間の強みを俺は持つてゐた――

平易な心持になるやうに、俺はどんなに努力したらう。けれども並外れて理智の充つた俺には、どうしてもそれが出來なかつた。單純にはなれなかつた。仕方がないので、俺は「死」といふ恐しい概念を始終胸に置いて、そしてすべてを直截に、直截にと努めたのだ。

俺はお前を、日記にも、手紙にも妻と書いた。妻といふ文字を見る度にお前を思つた。實際俺の腹の中には結婚はもう既成の如く思はれてゐたのだ。そして俺は何うかしてお前にもさう思はせたかつた。——其處に俺の心は塞がれたのだ。あせるのは善くないと知つてゐ乍ら、俺はやはりあせらずにはゐられなかつた。即ち、さうお前も思ひ込んだと自分が認めぬうちに、いつまでもいつまでもあのやうに疑ひを絶たず、俺を苦しめ悩ましてゐる内は、俺は安心して出立出来まいと心配した。甚だ不利ではあるが、思ひ切つて出立前に結婚してしまはうかとの早まつた考へさへ起つた位だ。一日汽車に乗れば會ひに来られる。勿論三月に二度位は會ひに來るつもりであつた。けれど、その離れてゐる間の不安が甚だ恐しくなり出した。不安の餘地のないまでに信じ合つてから別れたかつた。

思へば俺も馬鹿正直だつた。今更信じるも信じないものを、お前がくよく言ふ一つ一つを真に受けて、いちげた考ばかりに耽つた。

出立の日は來た。兼て覺悟してゐた一時の別れだ。そして喜びの日への接近である。

曇り日だつた。

「二年や三年なご直だよ」と俺が言つた。

「ほんとにちよい／＼来て下さいね」と彼女が言つた。

「來るとも。手紙は毎日書くよ。手紙を一つ見る毎に、一人が一緒になる日に一日近づいたのだと思つてお呉れ」と俺が言つた。

二人とも、大變に心地よく話をした。俺も別れる辛さよりも、目的に近づくのだといふ喜びの方が強くて、勇しい前途のやうな愉快を感じた。

二人で夕食をした。俺は何度も／＼彼女に見惚れた。彼女はあの夕飯の時ほど美しく見えたことはない。不意に、彼女と送つた晝や夜やが、花やかに胸に浮んで來た。二人が初めて出會つた夜のことまでが、はつきりと思ひ出された。運命がそつと、俺を彼女の側へ置いた夜だ。あの夜彼女は、「あなたは——さんでは?」と聞いた。彼女は俺に見ぬ戀をしてゐたのであつた。

あゝ苦しくなつて來た……………

F子。恐しい運命だつたねえ。

夕飯を済して立ち上つた。

「いよ／＼お別れだよ」と俺は言つてお前に接吻をした。

急にお前は泣き出した。俺ははつと思つて笑顔をしかめた。

「何だい、今になつて泣くなんて」と俺は言つた。お前は何にも答へずに泣きしやくつてゐた。
俺はさつさと二階を下りた。俾に乘つて煙草に火を點け、むやみに煙を吐いた。後にお前の啜り泣きが聞えるやうで辛かつた。

停車場へ來た。俺はお前の涙が拭はれたのを見て安心した。

黙つて人込みの中を、二人は抱き合ふやうに寄り添つて、ぶらつとふおーむへ出た。手を握つたまゝ橋を渡つた。

階段を二つ三つ降りかけた時、突然お前は片手を俺の肩にかけて、わつと泣き出した。そして

「今までのことは本當なのでせうね」と言つた。

「何が?」と俺は聞いた。俺のからだは震へた。

「何だかこのまゝ棄てられるやうで——」とお前は咽びながら言つた。

「馬鹿な!」かう言つて俺はお前を突き放した。

柱の傍に黙つて立つた。空は真暗だつた。俺は、襟に顎を埋めてうつむいたお前の横顔を見て、

眉をひそめてゐた。

覚えてる。覚えてる——

「あぶないですかからおあとへ」と驛夫がどなつて前を通つた。

覚えてる——

天地の窮みの様な大きな音をして汽車が來た。地搖きがし出した。俺は目も耳もぐらくとなつた。

もつと覚えてる——

汽罐車が蒸氣をぶうく吐いて來た。

人がごた／＼動き出した。俺も歩き出さうとした。前にゐる女が邪魔になる。歩き憎い。どうも
邪魔になる。

そこへ汽車は來た。俺は思ひ切つて、邪魔になつてる女を押し除けた。汽罐車の方へ突き落した。

ああ、それつきりだ。

F子は死んでしまつた。可哀想に！　どう／＼俺はF子を殺した。
何の爲に？——誤つた論理の爲に！

豫審判事。（同夜。書齋にて、數日前に認めた感想文を讀む——）

×

また戀の慘劇を一つ取扱つた。

學校を途中で止めて讀書ばかりしてゐた男は、二年ほど女と別れねばならなかつた。二人は結婚を約束してあつた。女は男の出立を送つて停車場へ行つた。男の乗るべき汽車が來たとき、男は突然後から女を押して線路の上へ轉り落した。女は無残に死んだ。男はその場で捕へられた。訊問しても頑固に否定した。けれども、彼が女を突き落したことは、數人の目撃者の證言によつて明かにされた。唯、豫め男に殺意があつたのか、或は、あの際何等かの動機で發作的にあんな行動をしたのか、問題であつた。男は見るからに神經質で、發作、衝動などに馳られることのあり得る体質だ。「あり得る」ことが、しかし、直に「あつた」の證明にはならぬ。又、發作によつて瞬間的に爲される忘我的行動なるものも、全然その人間の意志に無かつたといふような場合は皆無と言つてもよい。——この見解から、自分はあまり所謂發作、所謂精神錯亂には重きを置きたくない。殊に今度の事件は、僅かの取調べで、有力なる證據が續々と擧げられた。男は明かに何うかして女を殺さう／＼と考へてゐたのだ。

殺された女は或るしもたやの生な娘である。可哀想にふと男の美貌に迷つた。精熱そのものとなつて男を慕つた。あらゆる犠牲を男の爲に惜しまなかつた。どうかして男を喜ばせるやうに、どうかして男に棄てられぬやうに、彼女は出來得る限りを盡した。彼女の姉で、彼女が唯一の同情者として心を打ち明けたといふ待合の女将を喚んで調べた時に、其の女は、男からきつと一緒にならうと言はれた日の彼女の狂喜の様をつぶさに物語つて泣いた。其の女は又、男のことを、決てそんな薄情なことをする人ではないと言つた。旨く騙されてゐるのだ。

×

犯罪を取扱ふ職業に從つてから、隨分「人間」に就いて教へられた。

自分は若いとき、醫者が憎くてならなかつた。憎いといふよりは、憚つたのだ。羨しかつたのだ。醫者は、實際に、固い立場の上に「人生」の或る側面を睨んでゐる。全人類を、醫者と醫者以外の人間とに分つことが、餘り滑稽ではない程に、醫者は此の世に獨特の役割を持つてゐる。妻の病床へ診察に行く醫者を此の世の惡魔の如くに呪つた夫の心持を、外國の小説で幾つも讀んだが、その當時の自分は、その夫に同情したものだつた。たしかトルストイの小説だつたらう、夫婦關係の神聖を汚すものは醫者だといふ文句があつたやうに記憶する。

其の醫者を、憚りも羨みもしない今の自分の職業を痛快に思はずにはゐられぬ。「人生を知ること」それは自分の性格的要望であつた。醫者が羨しかつたのも、彼等がその點に於て他の職業よりも遙かに種々の便宜を持つからであつた。自分は法律を志望した。そして裁判官となつた。日に日に犯罪を取り扱ふ。犯罪は人間の弱點の具体化したものである。弱點は生地である。自分は毎日人間を裸にして見てゐる。もし本能の満足を卑しいものとなすならば、それと同じ意味で、自分は絶えず卑しい満足を享樂してゐる。生きた人間を忌憚なく解剖する。男子として、こんな氣持のよいことがあらうか。

(読み終つて「下らぬことを書いたものだ」と呴き乍ら、稍暫く電球を凝視してゐたが、ペンを取つ

て次の如く書く――)

×

あの夜自分は妻と二人でEを訪問した。Eの家庭には、彼等二人が戀に落ちたあの學生時代の氣分が、何時も香ばしく満ちてゐる。A子さんも仲々立派な奥様になつたが、それでもあの頃の面影が、ちらり表はれる。言葉はもうすっかり直つてしまつたが、垢抜けのしたものがしは、やはり争はれぬ。そして今は却つてそれが床しさを添へて見えるからいゝ。Eは幸福者である。A子さんも幸福者である。Eのところへ行くといつでもかう考へさせられる。そして自分までがその幸福に魅せられ、巻き込まれてしまふ。Eの家庭はほんとに自分にとつても歡樂郷である。妻もさう言ふ。唯、自分達はE家を訪問する時、決して子供を連れて行かぬやうに心がけてゐる。あの頃からあんなに子供を欲しがつてゐたEを苦しませたくないから。

あの夜も四人して快く笑つた他の三人よりは、五つも六つも年下の妻は、一口のびいるに頬を赤くしてゐた。突然A子さんが、指から一つの指輪を抜いて、「いゝことをしませう」と言つた。自分と、妻と、Eとの指から、それぐ指輪を抜いて一つのこつぶへ入れた。二組の比翼指輪である。Eのには日本字でA子と刻んである。妻のには羅馬字で自分の名が刻んである。

A子さんはそのこつぶへ赤い葡萄酒を注いだ。

「これ、四人の魂ですわねえ」

かう言つてこつぶを自分に渡した。自分はその血の色と黄金の色とを瓦斯に透して見て、一口飲んだ。そしてEに渡した。順々に飲み廻した……

思へば停車場にあの惨劇のあつたのは、丁度その時刻だつたのだ。——うちから逃が來た。又何かあつたなと好奇心を煽り乍ら歸つて役所へ行つた。それから停車場へ行つて検死をした。女は頭蓋骨を粉碎されたのだつた。薄暗い石疊の上に菰に被はれて、死体は横はつてゐた。綺麗な蜻蛉を捕へて頭をむしり取つたやうなものだ、美装した胴体に頭が無い。帶の間にきちんと挿んであつた鏡は粉々に割れてゐる。両手の指には、幾つもの指輪が光つてゐる。——自分はふと屈んで、無意識に冷たい片手を取つた。そして、死んだ肉体の一部であるかのやうにくつきりと嵌つた蒲鉾形の指輪を見出した。愕然と我に歸つた。何故に自分がそんな眞似をしたかを了解して、身震ひをした。

歸宅して、自分は妻に

「女が殺された。その女の指には、これと同じ指輪があつた」

と言つて寝た。

被告を取調べた時に、自分はその右の手に同じ指輪を發見した。

「私を知つてゐる誰にでも聞いて下さい。私は、男が女を愛し得る極度に於てあの女を愛しました。今だつてその心は變りません」

かう被告がむきになつて言つてゐる時に、自分はEの細君の「四人の魂ですわねえ」と言つた言葉を思ひ出した。

自分は恥しくなつて、被告に判らぬやうにそつと指輪を抜いて隠した。

×

もうこれで事件は自分の手を離れたのだから、近い内にEを訪ねて話をしてみよう。明日の新聞を見て向からやつて來るかも知れぬ。又、彼一流の意見を述べるであらう。殊に事件は戀の悲劇である。彼の得意の戀愛論に持つて來いの題目だ。

實を言へば、男の心理の中に、自分の解釋できぬ點が少くないんだ、蒐められた證據は、その中一つでも隠蔽してはならぬ。前提の中に事實の隠蔽があれば、出て來た斷案は、嚴密に言つて、

虚偽である、今度の事で、男の心理を知る手掛りとなりさうなものは澤山にある。女に就いて彼の書いた感想文、彼の日記、彼の手紙などは、實に豊富な内容である。けれど、そのことが却つて自分を苦しめた。内容があまりに豊富すぎる。あまりに複雑すぎる。それで自分は、その中の自分に不可解な部分をば、敢て隠蔽するつもりでなくとも、止むを得ず取除かねばならなかつた。自分に不可解なものは自分にとつては零である。計算の表へ出しても無益である。遺憾ではあるが、自分にはそれ等が證據として役立つて呉れなかつた。そして断案は引き出された。豫審は決定した。自分の務めは終つた——けれど内心不安である。

せめて自分にEだけの過去があつたら。あの血の出るやうな戀の経験があつたら。——あの時代だつて自分にはEの心がよく納得できなかつた。日夜A子さん（その頭は××といふ藝者であつた）に没頭してゐ乍ら、會ふ度に、苦しいとか、いやになると、女の脳髄つてものはまるで藁だ、とか言つてゐた。本當に苦しさうであつた。本當に女を重荷のやうに思つてゐるやうであつた。「殺して死んでしまひたい」とさへ言つた。

自分にも若い時一度、一人の女に戀をしたことはある。そして、自分ほどに戀人の爲に自己を棄て得るものはあるまいとさへ考へたが、その女は自分を極端に嫌つて、まるで相手にしなかつた。

その失戀の痛手は未だに胸に残つてゐる。が、それきりだ。自分は戀を知らぬ。失戀は永遠の戀

だなんて嘘だ。戀の正体はよほどの魔物に違ひない。

×

大學を出て六年になる。高等學校を出て九年になる。——何だつて今こんなことを考へたんだらう。今夜は少し氣持が變だ。

あの被告にもう一度會つてみたくなつた。あいつはどうも自分よりは豪さうだ。Eは豪い。高等學校を出て文科へ變つた時には馬鹿だとも思つた。××といふ藝者を妻にすると言つた時にも馬鹿だと思つた。けれど豪い。自分よりは確かに豪い。

富 横 介 最 後

本 多 秀 彦

第一場 鞍ヶ池々畔

淺黄幕。僧兵の一群。

僧兵甲 苦も無く高尾が落城ぢや。

僧乙 見ん事富樺介が最後。

僧丙 富樺介には數騎を引具し、鞍ヶ嶽の方へ落ちて行つたと聞いた。

僧丁 遠くは行くまい。どりや後追つけて搦取り。

僧戊 各々功名手柄を。

皆々 さうぢや。さうぢや。

僧兵の群去る。代りて百姓の一群。

百姓一 やれくお庄屋様。鬼神が死にましたでござりまするな。

庄屋 富樺介様と云へば、六尺豊の大男。然も雪白の面に丹花の唇。月も恥ふ美男とやら。

百二 夫れが又戦にかけては勇猛無類。昨年の夏の事。江州の佐々木六角様の軍勢を、僅かの手勢で、物の見事に蹴散したと云ふ。

庄 いかにも。鬼神よりも悪魔なのぢや。其悪魔が近頃非常な大望を抱きよつて、北陸道に我等本願寺派が斯様に榮えて居る間は、その大望が遂げられぬ爲め、愈々加賀一圓に渡つての信徒の虐殺を始めたのぢや。

百二 うむ。したが其大望とは一脉何でござりまするな。

庄 云はすと知れた。上洛さ。

百二 夫れでは加賀の國司では満足出來ず、此日本全國を取らうと云うのでござりまするな。

庄 さうとも。さうとも。

百一 したが罪も無いのに殺された信徒の慘めな有様はどうでござりましたのう。

百二 かうして生残つたのも、お互ひ様に何かの因縁づく。

老女 はてまあ。之で妾等も安堵して、御念佛申上げられると云ふもの。

若女 妾も嬉しうて嬉しうて。さあ皆様。

皆々 なんなんだ。なんなんだ。

皆々去る。

浅黄幕切つて落とす。

加賀國石川郡倉ヶ嶽山中鞍ヶ池畔。舞臺前半は渚。觀客席花道縁にて池の畔。波布を繕ふ。下手背面に絶壁、傍らに稻荷の祠。背後一面の老杉の森。

下手渚邊よりの道斜に森を貫く。其道に依り切斷されたる森林の縫隙より吹雪霧るれば、加賀の平野の一角、日本海など見ゆ。道は其處より急坂になるを覺しく、人其處より出入す。

長亨二年。極めて春淺き頃の夕。

積雪。折々吹雪く。

僧形の者、狐と前後して下手より現る。

僧形 無い五月蠅い野狐め。何時も拙者が呪文の邪魔を爲る。

皆々急坂に消去る。

六ツの花、木々の梢に咲きしきる。げに陽春の行樂に、夢現なる雙の、孤蝶に戯る花ならで、これは又、惱みに亂るゝ白妙の、深雪が方の心かな。

以前富樫介愛妾深雪の方、其腹なる子千代丸を伴ひ、下手より現る。

深雪 行き暮るゝ野末路、降り積む雪の悲しさに、血潮は愚か、心の底迄ひへ凍るわいな。

雪に憐める風情。

深 して此足跡は。人の足跡。おゝ夫れでは人里近いと見ゆるわいの。幸ひ此處に稻荷の御社がある程に、さゝ千代丸との、勿躊なけれど暫く此處で休ませて戴きませうわいな。

深雪の方被衣を脱ぎ、雪を拂いて稻荷祠の階段に打敷き、先づ千代丸を夫れへ座らせ、自分も夫れに倚り添いて座る。

深 のう千代丸との。吉崎を逃れ出でゝかゝのうれば早や七日七夜。野々市の御館は何處やら。飢えと疲れに此母は、心は矢竹に速つても、足が進みませぬ。悲しや足が一足も踏めませぬ。したがそなたは男ぢや。のう千代丸との。心を丈夫に持つてたも。のう千代丸との。返事して給もれ。

千代 丸瞑目合掌して云ふ。

千代 南無阿彌陀佛。

深 これはしたり千代丸との。のう千代丸とのへ。のう。

千 南無阿彌陀佛。

深 なさけなや千代丸との。

廻る小車いつゝ廻る。雪に凍らぬ因果の水。

深 そなたを設けて此方七年。

豪勇並びなき富樺介が血統を受けし千代丸が、加賀の國守と仰がるゝ。其暁を待つの葉の積る白雪深くとも、色も變らぬ操の縁。

深 そなたの口から一言たりとも此母は、人らしい言葉を聞いた驗しがござんせぬ。何を訊いても只答へるは、南無阿彌陀佛の六字の名號。何教へてもひたすらに……彌陀の御姿か、念珠の

合掌。

深雪の方泣入る。

深 えゝ、こんな事なら此母は、吉崎の參籠も五年に渡る水垢離の荒行も爲ぬわいな。

谷の早瀬か月日の流れ、富樺介が大望の堤は切れて、忽ち漲る血潮の海。

深 セめて勇しい御戦場で、太刀鳴り響く有様でも、或はご覽に入れたなら、心の體に喰入つた惡靈が消え去るかとも思はれ。……方に一つの頼みの綱、夫れが樂しみにかよわい母が此苦勞……察してたもれ……千代丸どの。

以前の僧形の者再び上手より現る。

僧 はていぶかしきは此深山に母子の姿。若し、あ若し御上膳。

深 はい。

僧 これは一笠一枚の雲水。して何處の方にておはするや。

深 之はちど、雪の旅路に惱めるもの。

深雪菅笠にて顔を被ふ。僧形の者その菅笠の裡を覗びて驚く。

僧 はてどうやら。

深 え。

僧 お見受け申せし事……うむ、下間筑後殿が御愛妾。

……

僧 いやさ、吉崎僧兵の御大將下間筑後蓮崇殿が御側室。

深 してあなた様には。

僧 吉崎にちど由縁あるもの。

僧形の者暫く考へ込む。

僧 さては。

深 え。

僧 袖のま蔭に匿ひ居る、して其小姓は……表面は兄なる法師了顯が遺兒として、吉崎寺が玄關

掃き、不具よ不憫よ、參詣の婆あざもに目をかけられる小坊主とは眞赤な僞り、まこと富樺介が。

深 あ、もし。

僧 おとしだねにて。

深 ふツ。

僧 ござらうの。

深 夫れ知られては。

深雪の方懷劍引き抜き立ち上る。

僧 はツはツはツはあ。命は取り申さぬ。したが現在筑後殿なる夫ある身でありながら、未だに富権介に心を寄することは。

僧 女の身のかよはさに、吉崎寺の蠹となる下間筑後が權勢に身は任せても、戀は任しませぬ。

僧 うむ良い覺悟ぢや。極樂へ行けるわ。はツはツはツはあ。したが地獄の内にも數々ある。孤獨地獄と云へるのを御存じあるまいの。

深 いえ、存じませぬ。

僧 御存じあらぬとなれば、事の次いでにお話し申さん。孤獨地獄とは深山幽谷の態を具え、生きながら人の世に忽然と現れる地獄をば云ふ。生れもつかぬ不具を抱いて、此恐ろしき吹雪の山中に踏み迷ひ飢えと疲れに苦しむのも。畢竟そが地獄の出現に外ならぬ。いで此池を血の海にな

すらへ、それがし鬼に代つて、切檻な致し呉れうぞ。

此時雪全く霽れ、落暉の光血の如く四圍の雪を染む。森の罅隙より加賀の平野の一角見え、其奥に森漫たる日本海へ沈まんとする落日の團々たる眺む。

僧形の者杖を大上段に振りかぶり、深雪の方懷劍にて之を防がんとす。

野の末に夥しき煙籠ひ、遠く陣太鼓法螺の歡聲よど漂ひ迫り来る。

僧形の者ふと物音に耳を澄ます、

僧 はて心得ぬ。あの物音は。

急ぎ振返り、麓の方を眺め見て驚く。

僧 おゝ之に見ゆるは正しく高尾の城、あなたに見ゆるは野々市の館、雪霽れてげに一望豁達の眺め。

深 雪の方も急ぎ行きて見下す。

深 あれ／＼合戦ぢや。おゝ合戦ぢや。ても恐ろしい合戦。手に取る如く見ゆるわいの。

深雪の方走り寄りたる千代丸を緊とかい抱いて恐怖の面色。

僧 おゝ野にも山にも満ち／＼たるは本願寺の僧兵ばら………
深 あれ／＼城門打開いて拾騎廿騎。

僧 澄々しい緋威鎧の大將が、馬を乗り入れ躍り入れ。

深 討死するのがよう見える……

僧 さては高尾が落城か……

深 富樺介様が御最後か……

僧 不覺を取つた。呼べば答うる目睫の、かゝる邊りにおめくと踏み迷つたか。うむ。急がずばなるまい。かッ。

僧形の者深雪の方を足蹴にし、唾液を吐きかかる。

僧 大奴、孤獨地獄に苦しんであれ。

僧去る。

深雪の方千代丸を抱き寄せて、涙に咽ぶ。

桃李物云はず春幾許の歳月ぞ、陣營に照る月影に、幕を捲りしよき人が、一夜の契りは淺くとも、幾千代かけし千代丸の、君が恵みの深縁り、早や七年の花の顔。

深 飽く迄も不運なる妾よな。いくら五隣の女の身ぢやとて……神も佛も無い御世か……富樺介様には一目なりとも御目に懸られず、又此子の行末は……詮方ない。千代丸よぢや。妻は覺悟を決めましたわいな。

深雪の方千代丸を伴ひ、再び社前へ行く。

深 此上は母子諸共死靈となつて、富樺介様にお會ひ申すのぢや。さ、千代丸。覺悟は良いか。

懷劍把り直し、千代丸を突かんとして突きかねる。此時狐三匹上手より現れる。

「やよ待て、やよ待て、暫し待たれよ。雪が生みしか、あら不思議やな白妙の、素絹纏へる飛鳥の神獸。

狐等急ぎ走り寄り、深雪の方より懷劍奪ひ取り驚きを零さざにて息絶えくの千代丸を介抱す。

深 ても不思議なそなたぢち……うむ。さては兼々聞及ぶ、富樺一家が守護神なる住吉明神が御使なるか。辱けなや、勿躰なや……を伏し拜み。さはされど、佛の御罰蒙りし此の身躰。所詮生きては……うむ。さうぢや。さうぢや。

深雪の方狐等の前に手を束ねる。

深 のう。明神様の御使達。偏に妾が願ひを聞いて下さりませ。かよはき妾が附いて居つては、反つて千代丸どのが足手纏。かくなる上は何卒此千代丸を御任せ致しますする程に、何處なりと御匪まい下さりませ。南無……

狐等頷ふ。深雪の方自身の紅き披きを解き、夫れの一端は千代丸の帶へ、他の一端は一匹の逞しき狐の首へ結へる。そして千代丸をかい抱く。

深 母は賤しき身の素性なれど、そなたの父は北陸道の總追補使、富樺加賀介政親殿なるぞ……

ゆめゆめ母が賤しとて心を落さず、身に降り懸る數々の艱難微塵に踏みしだいて、あつばれ未來は名玉の磨かれ出でた、天下の將軍となつてたも……母は深雪に非業の屍を埋むとも、魂魄此の世に止つてそなたが行く末、必ずく守つて見せますぞや。さゝ明神様の御使だちに守られて、早う／＼日の暮れぬ間に。

暫く袂別の思入れ。晩鶴頻り鳴き。薄暮迫る。深雪の方心を取り直し、

深　さゝ早う。さゝ……

狐等心得て先立ちて歩む。千代丸覺えず鬼擦られて雪に轉ぶ。

深　おゝ、危ないわいな……

深雪の方急ぎ走り寄らんとし、再び階段に踏み止り、懷劍逆手にそり直し、きつとなる。

深　えゝこゝな意氣地無し奴が。一人で立つて、さつさと行きやらぬか……えゝ未練のもの……

吹雪烈し。合掌のまゝ千代丸狐等と共に上手寄りの森の切れ目より谷間に去る。

「神明の加護忽ちに弱肉強食の世の救主、玄妙不可思議の奇いとゝ現れ、花飛び交ひ雪飛び散りて飛鳥の姿、雨を呼び雲を呼ぶとぞ見えにける。

深雪の方泪と共に皆々の行方を拜み、暫く癪の痛みを堪える。堪え兼ねし癪の痛み、孤獨の悲哀など深雪の方半

雪の上に泣き伏し、暫くして思返す。

狂亂に誘ふ。

深　千代丸どの……千代丸どのへのう……いま一言……是非とも別れの一言……せめて母御前となり……云つてたもれ……えゝ其一言、妾が一期の想出に……聞きたかつた。開きたかつた……えゝ聞きたかつたわいのう。

雪の上に泣き伏し、暫くして思返す。

深　あゝ今となつては、万事が過ぎた夢となつた……おゝさうぢや、五障三從の身、先づ最初には佛に裏切り、親に等しい兄にも背き、夫に別れて今又此處に、現在生きながら我生み子に別るゝとは、山より重き此身の罪障。きつぱり死んで此母が、地獄の業風晴るゝ日迄、劍の山に分け入り、三途の川に踏み迷ふとも、一念菩提、必ず宿業晴らすからには、千代丸どのには心安く召せ。

深雪の方懷劍逆に握つて咽喉を貫き、きざはりし倒れる。暫くして死切れず又起上り、祠の附近を夢の如く現の如くさ迷ふ。

深　あれく不思議な世界が見える……炎が血潮か……血潮が炎か……ても深紅な深紅な……世界が……おゝ……深紅な世界が見え……るわい……のう……おゝ兄上様兄上様……ても恐ろしい兄上様……どうぞ赦して下さいませ……

深雪の方空を握つて悶絶。階級に死屍を横たへる。忽ち霞亂飛して舞臺幽暗となる。

(ダークチエンデ)

第二場 吉崎の炎上

越前國細呂木郷吉崎道場山門前。

正面より稍上手に山門。夫れに從いて石階、土壠、老杉、積雪等。

時は文明六年三月、即ち前場より七年前。

山門焼け初め、夥しき僧兵の群、稚兒も打湿り山門裡より逃れ出で、慌しく下手へ去る。

雨時舞臺に人影無く、木材の焼け、瓦の碎くる音凄じ。煙と炎との裡より一人の僧山門よりあらはれ、文箱を手に捧ぐ。石段の上にて止る。

吉崎の僧了顯なり。

了顯 惡無く蓮如上人様には此劫火を免れて、落ち行かれ給ひしと見ゆる。さるにても佛敵四海に跳梁なし、富権介が如き輩、勿躰なくも此吉崎の道場に火を懸くるとは、ても五濁末世の時代ぢ

やなあ。

暫く思入れ。陣太鼓鳥の嘶きなど聞こゆ。

了 うむ。あの陣太鼓の音。築地の外には霞と紛る馬簾大旗吹流し。さても十重廿重に圍んだるは富権の軍勢。今と成つては蟻の匍ひ出る隙き間も無し。進めば敵退けば炎。うむ。我身は死すともさらさら怨みは無けれども、死ぬにも勝る此了顯が務重きを如何せん。はて良い思案は。

烈しく火燃ゆ。陣太鼓法螺の響烈し。烟塵の裡にて了顯坊忽ち割腹爲し、文箱より經文取り出し腹中に仕舞ふ。若き女被衣を被り、畑を分けて逃れ來り、門前に現れ、了顯の苦悶を見て驚き走り寄る。
蓮如上人の侍女深雪なり。

深雪 おゝ、もし兄上様ではござんせぬか。もし兄上様。こりや又どうしたわけで。

了 おゝ、深雪か。騒ぐまい。騒ぐまい。

深えゝ 騒がいで何させう。兄上様には何故の此御自害ぢや。

了 騒ぐまいぞ。深雪。よい處へ來て呉れたなあ。

深えゝツ。

了 所詮此命は助かる見込は無い。これ深雪。此世にたつた一人の此の兄が一期の願ひぢや。是非でも聞いて呉りやれ。

深 聽かいで置かれうかいな。そりや兄上様のお言葉ぢや程に、妾の力で協う事なら何なりと。

了 おゝ良う云うて呉れた。實はな。佛に育てられたそなたの日頃の御恩報じが今出来る時と成つたのぢや。

深

了 上人様には若狭へ御避難爲された筈なれど、困つた事には日頃此兄が守り居る寺の寶の正信念佛偈此兵燹の余りの不意に夫れを奉じて逃れ出でる暇が無く、さりとて佛敵富樺介におめく手渡すのも口惜しい。また此炎に焼盡すのも尙更ぢや。とつおいつ思案の末、瘠腹自らかつさばいて、勿躊無けれど此腹中に仕舞ひ込んだわ。

深 すりや兄上様には、あの御經文をな。

了 おゝ、假令此死屍は黒焦げになるとも、信の血と肉とに埋め置いたなれば、よもや焼失うる事とてはあるまい。

深

了 そこでぢや。此兄が願と云ふのは。これ深雪。

深 はい。

了 此經文の所在をば知つて居るのは。そなた一人。此兵燹の鎮つた後に、兄が身躰は此山門の邊

に焼死んでゐる程に。信徒の人々を語つて、何卒此死屍を掘り出して呉れ。

深 兄上様御安心なされて下さりませ。其務は女ながらも此妾がきつと果して御覽に入れます。了 おゝよう云つて呉れた。有難い。辱けない。これ深雪。此兄が末期の禮を云ふぞ。これで此兄も安心して成佛が出来るわ。南無阿彌陀佛。

了 顯次第に深雪の膝の上にて落に入る。

深 もし兄上様……もうし兄上様。兄上様へのう。早や御成佛と見ゆる。……南無阿彌陀
佛……おゝ妾もこりやかうしては。

深雪下手へ去る。

暫時無台沈默。

富樺 加賀介政親、數多の軍兵を從へ、下手より現れ、無台良き程に止る。

富樺 見ん事此吉崎の伽藍も、只一握の灰として見せたわ。まこと此富樺介が胸にある。天地を蓋ふ抱負から見れば、之も亦一縷の香煙ぢや。

近習 お見事にござりまする。之にて北陸一圓のさしもの本願寺派の勢が根だやしになつた事で、ござりませう。

富 さるにても彼の蓮如上人、行方不明なるこそ遺憾の至り。また寺寶の念佛偈、所在解らず、

或は此火にて焼失せしも覺ゆるは又殘念の至りぢや。さりながら此紅蓮白蓮の渦巻き咲く、伽藍炎上の光景こそ、げに一幅の壯麗なる繪卷物ぢや。

暫く富樫介椅に凭る、

家老山川參河守現る。

參河 さりながら殿には。

富 おゝ又しても參河が老の愚痴、乞う聞く耳持たぬわ。

參 まづく暫く。

富 乞うやかましい。やかましいわい。

近 いやなに、御家老様には殿へよい繪手本とな、申されます。

富樫介惟に振向く。

參 正信念佛偈にもゆめ劣るまじき品物。

富 何ぢやと。

參 彼の唐土のためし、褒姒の顰、妲己の笑、兼々殿が御求めの麗しき繪手本。

富 何ぢや、早う申せ。

參 御意をな得ましつれば、兼々申上げましたる通り、之にてきつと軍勢をな御返し下さりまする

か。

富 品物に依つてぢや。

參 之はしたり。勿躰なき蓮如上人様の御行方御尋ねの儀、ふつと御止め下さりまするか。

富 いかにも。

參 然らば早う之へ持て

近 畏つてござりまする

「數の鶯、氣儘に啼いて、羨しさの庭の梅。あれそよそよと春風が、浮名立たせに吹き送る。

若き深雪着飾りて現る。下手に畏る。

富樫介惟暫く恍惚として眺める。

富 参河。参河。よい繪手本とな。

參 いかにも。

富 う——む。…………こりや女。面を上げい。

深雪僅に面を上ぐる。

富 うむ。ても美しい繪手本ぢや。月に配すれば嫦娥。花に配すれば妲己。雪に配すれば……

おゝ名は何と申すな。

深 はい。深雪と申します。

富 野路行けば梅が枝にだにいと深く、誰が思ひかや、誰が思ひかや積る白雪。はて心地よの名前
ぢや、名前ぢやのう。

近習一 父は平家の落人とか。仔細ありて兄妹、孤兒となつて流浪いしを、蓮如上人行脚の折、拾
い救はれ、兄は當寺の若法師。

近二 まつた之なる妹は、かの提婆品に見えます。八歳の龍女が跡を學んで、躰ては男子に變成
なし。成佛致さんもの。幼少より上人に侍きをる女との事にござりまする。

富 いかさま。争はれぬは其品良き物腰。參河。良い繪手本。氣に入つたわ。

參 御氣に召しましてござりまするか。然らば。

富 そちが願を聞いて、蓮如上人が行方草を分けてもと思ひしが、只今ふツと思切り、上洛の望も
いま暫く時機を待とうぞ。

參 あつばれ、殿には御聰明なる御決断。

富 いやさ。これ女。加賀國の住人、北陸道の總追補使、富樺加賀介政親とは我事なるぞ。汝若し
いとしきそが顔容を草繁き俚の邊りに埋め、丈なすその黒髪を炷香の煙に燐し、蕃と紛ふそが唇

に、戀の言葉を花咲かせず、ひたすら念佛のみに朽ちさするを口惜しと思は。之より野々市が
館に連れ参る程に、どうぢや朝夕粉黛を粧ひ、綾羅を纏うて我側方に侍べる望は無いかのう。

深 :

富 いやなに。……われ軍旅の弄に繪筆に親しむ事此處に年あり。然るに兼てより綠酒を汲ん
で華に座す。豊頬玉顔の妖童をば畫がんものと望むや切。そなた我爲めに妖しき迄美しき童をば
畫かし呉るゝなら。

參 いやなになに。そなたの顔をその儘そつくり、落花の宴に酔ひ頽るゝ畫絹の美童へ書き移すの
ぢや。

近一 車とならば玉輦寶蓋。馬とならば金鞍白馬。

近二 嘘爽たる御公子。鬱金香の御公子。

富 脳ては夫れに緋を鎧はせ。朱の大太刀反打たすれば。

參 天晴加賀の名領主。

皆 ばかりと聞く參河守の扇に連れて、近習一同ばらり／＼扇を打開く

富 そなたの心一つぢや。

堤のすみれさいたづま、露の情けに濡れた同志、色と戀との實くらべ、實浮いた仲の町、よしやよし。

深雪半ば顔を上げ、富樺介の美貌を見て恥ひのこなし、富樺介軍扇さつき打開き、己も亦半ば顔を被ふ。

富 どうぢや。

深 はい。

富 嫌と申すか。

深雪思切つて答へる。

深 不束者ではござりますれど…………。

富 承知とな。はツはツはツはあ…………。

此時了顯憤怒の形相凄じく、石段の上に突立ち上り

了 やよ妹深雪。何たる惡魔に魅られしか。不倫墮落の其一言。

富 やゝなんぞ。

了 佛敵富樺介が地獄の責責は勿論なり。惡つくは妹深雪が心根、八裂きして慊らず。かゝる性根の朽果てし女とはつゆ知らで、大事を明せしは此了顯が一期の不覺。さりながら此場に於て速に改心爲せば、佛祖の御許しゆめ／＼疑無し。これそこな女め。きり／＼返答せい。

深 ……

了 さあ／＼／＼。返事は如何に。

深 はてどうやら、妾は榮耀榮華が爲て見とう。

了 ぶツ。

深 なりましたわいな。

了 さて／＼色欲外道の畜生めら。かくなる上は詮方無し。いで富樺一家の破滅に先立ち、まづ汝より呪ひ呉れんず。

富 はツはツはツはあ。ほざくな小坊主。未來に於てはいざ知らず、現在生くる我等が世界には、神も無し佛も無し。万法一如。只我にちからあるのみ。あらつち天地を縦に貫く大いなる力の前には過去も無い。未來も無い。只ひとすじの現在があるのみぢや。此吉崎が炎上こそ、先づ手近なるためし。死に損ねの小唄とやら、早う念佛稱えて、冥土へと急いだが良いぞ。

了 云ふな富樺介。よつくも佛祖を罵り居つたな。佛の御罰恐ろしや。その唇縫ひ閉し呉れん。

富 はツはツはあ。縫はド縫へ。はツはツはあ。呪はド呪へ。我に力あり。以て自ら涅槃の境に入る。かの秘法の源とやら聞き及ぶ、正信念佛偈、焼失ひしは惜しけれど、代りに此處な手弱女を得て満足の至り。ござやそろ／＼歸陣とな致さうず。

了 やよ待て富樺政親。

富 やゝ。

了 汝が尋ねる其經文こそ。

富 なんと。

了 此處にあり。

富 やゝやゝやゝあ。

了 顯腹中より臍脇の如くに經文を握み出し。

了 尊き經文。汝等が手に觸るゝだに勿躰無し。せめて吉崎が法火に心置きなく焼棄てん。

見よや富樺介。いで……七代迄祟り吳れんす。

了 驚血染の經文長く肩に打掛け、石段の上にて大見得。

富樺介始め皆々呆然。言葉なし。

炎。煙。了顯の全身を包み、忽ち山門微塵に崩れ懸る。

無臺煙にて暗黒。

(ダークチニング)

第三場 再鞍ヶ池々畔

月明。第一場と同舞臺面。其夜也。

折々狐火燃ゆ。稻荷社の階段に深雪の方絶命の儘倒れ居る。

大薩摩「去る程に、吾に聞こえし要害の、高尾の城もいつしかに、破邪の利劍の閃きに、早や落城となりぬれば。蜘蛛の子のごと散々なる、味方の兵をかき分けて、譜代の家の子數人を、併に引具し良き死場所を尋ねゆく、富樺介が最後こそ、弓矢取る身の習ひとて、慘しくも亦憐れなり。

富樺介政親僧形の者を踏んまへ、太刀を小脇に、軍扇握つて糾り上る
転て兩人上下に分れる。

富樺 呪文を稱えて我をば誘ふ怪しき僧形の者、名告りあらうぞ。

僧形 力山を抜き美月を曇らす、汝富樺介も法敵となれば無残なり。靈場を徒に干戈の巷に化し、

經卷を空しく馬蹄の塵に委する破戒無懾の者め。未來永劫奈落の底に沈んであれ。

富 云うな賣僧。圓頂白衣の身をあれば、此人の世を塵に例へ、泡沫に例へ、偏に大悲が願ひの船

に打乗り、光明の廣き海に泛んで、至徳の風靜かに、徐ろに彼岸へ赴く身なるに、あさましや。

僧 やゝなんと。

富 稲妻よりも短きとはつゆ知らで、太刀の光を全能と心得。

僧 如來大悲の恩徳は身を粉にしても報すべしとか、我等は刃に齧つて報じ得るのを幸と思ふ。

富 ひたすらに只虚榮の念に誇つて、一念菩提の何たるかに想及ばず。

僧 煩惱の林に遊んで神通を現し、生死の園に分入つて、應化を示すとは宗祖の言葉。

富 云うな。げに吉崎の法華喚さしきるを、三塔の衆徒等に罵られしも理なり。

僧 やゝ宗門を罵る惡魔。

富 無礙光の邪義。

僧 なんと。

富 なんとく、名告らずとあらば夫れにてよし。いで冥土への土産の片はし、惜しからぬ汝が生

命奪ひ呉れんす。さゝなんと。

僧形の者僧衣を引抜くと凜々しき鎧形と成る。

僧 事も愚かや我こそは、まこと能登國の住人水巻新介忠家也。數々なる味方軍功の隨一に、富樺
介を打取らんが爲め、墨染の衣に身を裹し、見ん事汝を欺き寄せたり。

富 飛んで火に入る夏の虫。水巻新介とやら、たかド田舎の坊主武士。

水巻 勇あつて智無き猪武士。

富 問答無益。

水 いで尋常に。

兩人 勝負。勝負。

烈じき立廻り、さゞ水巻新介切らる。

政親刀杖に一息。倒れたる深雪の方の屍を見て驚き寄る。

富 おゝ夫れなるは深雪にあらずや。おゝ 深雪。

抱き起せど又がつくりと落入る。

富 やゝ深雪には自害と覺ゆるぞ。

參河守現る。

富 おゝ參河か。

參 御前にござりまする

富 參河。花は散るべきであつた。これを見よ。

參 やゝ吉崎の女の童。

富 今は女では無い。佛ぢや。

参 ご尤にござりまする。

富 して合點の行かざる此最後……想起せば七年前吉崎が炎上の際、佛に裏切つて我に従ひし此女、干戈勿惶に紛れて、只春宵の仇契り、その後ふつと忘れ去りしが……その後一子をな設けしと……

参 風の便りが云ひまする。殿の面影現と慕いて、母子諸共何處へやら消え失せしとも、或は其子を匿いて、下間筑後が情に絆され、彼奴が愛妾に相成りましたとも。

富 うむ。何れにしても此憐れるなる最後。

参 不憫の者にてござりまする。

富 そちは佛道の爲め、とは云ひながら、又我は己が賤しき享樂の爲め、清かりし女心を欺き濁らせしよな。宥して呉れよ。深雪。

参 おゝ其御言葉こそ賤しき女の身に取つては、此上も無い御回向。

富 あゝ生は假りの宿り、死は故郷へ歸る事であつた。花顔を惜しんで落花の後に涕泣いた長安の女兒も、鶴髪を呪うて開花の前に歎歎いた洛陽の翁も、以前は我が心を解する嬉しき味方と思はれしのに、今顧れば、皆塵浮世の愚者であつたわい。

参 吉崎が炎上の煙を、一縷の線香が煙になづらへしも僥々夢、只春の朝の瞬眸が夢なりし事、偏に御心附き下さりましたか。

富 確と心に喰入つた。一朝病に臥せば相識無し。三春の行樂誰が邊りにかかる。我は只の惡魔であつた。

参 力許りが万事ではござりませぬ。人の力の後には尚大いなる慈悲の力のある事に思當つて……。

富 確と思當る。いで此上は（月愈々明也。）四智圓明の月牙ゆる夜なく、泪羅の鬼も立ちて舞へ。

三昧無碍の空廣く、優曇華の花雨と降れ。その大いなる力の前に、我こそ無我の境に入らん。

譜代の家の千數人現る。白崎民部、高尾若狭、同九郎左衛門、額八郎次郎、山川監物、同小次郎等。

白崎 殿には。

富 あいや。

高尾 此處に御居に。

皆々 ござりまするか。

富 皆々。

富 無念ぢや。

皆々 は——ツ。

白 せめて越中の勢、到着今一日早かりせば。

富 云うまい。兵は談じまい。

白 ご尤もにござりまする。

富 只々富樺介ともあらうものが、僧兵ばらに攻められて、此最後。
高 その御無念。我等共々、骨髓まで、

皆々 徹しまする。

富 ても憎きは……：

白 慈悲忍辱の衣を身に纏いながら。

高 物具取つて鬭争を事とし。

高、九 一切衆生の冥福を祈らずに。

額 呪文を稱えて、人に仇なす彼等佛徒等。

山川 かく此世に漫る上からは。

山、小 真實の人の世は、

参 謂で

皆々 ござりまする。

富 さりながらく。憎むべき人でもない。佛でも無い。

皆々 え——ツ。

富 五蘊もと空なりければ何ものか、借りて来るや、貸して歸らん。此富樺介ぢや。今初めて自ら
の力を知つたわ。

皆々暗黙。

富 馬曳け。

富樺介馬に乗る。

富 いで富樺介が最後。

皆々 は——ツ。

富 後の世までの語り草とせよ。

富樺介政親乗馬のまゝ、重扇打開き花道を下る。池中に赴く也。鼓の音（波の音に通ふ。）之を送る。
皆々ひれ伏す。

忽ち舞臺裏に聲あり。

聲 生きては佛敵と云はれても。死すれば即身成佛なり。富樺介が菩提を葬はんが爲め、富樺加賀
介政親が一子千代丸。夫れへ參つて、いざや念佛稱へん。

稻荷祠の屏風座に打開かれ、五光を四圍に漲しながら、金襴の袈裟を纏ひたる千代丸、悠々と現れ、渚に歩み寄つて、聲高らかに念佛を稱ふ。

千代丸 南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

皆々再度ひ伏す。

深雪の方現の如く走り寄り、勿躊躇の餘りに千代丸が衣の袖を押戴き、感涙に咽ぶ。

時、法華亂飛し、法香馥郁たり、紫雲靄靄たり。笙簧篥・法樂悠らかに起る。

いでや富樺介には盛者必滅の理を知り、輪廻の應報を悟つて、生きては虚榮に疑げられ、空しく朽みし蓋世の武勇を、再び冥土に呼び覺まし、死して護國の鬼たれよ。

慾らかに念佛起る。

深雪の方遙に沖の方を望み、驚き叫ぶ。

白 さても御家重大の鞍が、
白 波靜かなる沖に泛んで、

山 月の光の鮮けく、

皆々 見えます。

千代丸 方々偏に念佛申されよ。

皆々 は——ツ。

千代 南無阿彌陀佛

皆々 南無阿彌陀佛
皆々 合掌念佛

登場人物
富樺加賀介政親
家老 山川參河守
家臣 白崎民部 高尾若狭 高尾九郎左衛門
額八郎次郎 山川監物 同小次郎等
愛妾 深雪の方
其子 千代丸
水巻新介忠家
吉崎の僧 了顯
僧兵 近習 駿馬 稚兒 女 百姓の群れ。

幕

三つ葉

小山田滋

一すぢの煙はつはつ^{のぼ}上りゆく雨にけぶれ

る山下の村

つくしんばすいすい芝生にのびたれど心

伸びすに春となりけり

兵兒帶の腰にまかるる幾廻り病む父見れ

ば泪流るる

うす色に花咲きつゝ、豌豆の畠へ飛びし

赤蛙かも

家根の上の蒲團はらへばみぢんごみ逝く

春の陽にゆらら舞ふ見ゆ

話聲ふと近づきて吐息しの闇路いそげる

竹藪のかご

落したる金柑一つとたん屋根にかんと音

して太陽は高きかも

顔などをなでまはし見ぬものうかる朝寢あさい

の床ゆ出づるひととき

付添人の默想

山崎一雄

弟の邦夫が修學旅行から歸つて一日學校へ行つたきりで、曇空にうそ寒い風の吹く其日の夕方、
悪寒をこらへて醫專でテニスをして歸つて床に就て、それから發熱して暗い座敷の隅に衰へた青白
い顔をして二日許り寝てる間、貞吉は弟が修學旅行に行く前から風邪心地で藥を貰つてゐた岩田
といふ醫者の手腕を心許なく思つて、早く縣立病院で見て貰つたら好からうと何度も云つてゐたが
三日目の昨日長い便秘で腹がすこし張つて痛みを感じて來たので、下剤をかけたら夜中に二度も下
痢して非常に苦み、それに熱も高くて頭を痛がつたので今朝少し落付いてゐるのを幸ひ病院はすぐ
近所なのだから確かな診斷をして貰ふ爲、伴れて行かうと主張した。父も暫く考へた後、では岩田
さんに交渉して其紹介を得て便宜を計つて貰はうと云つて朝診察に來た時その話を持出したところ
が醫者もすこし變たとは思つてゐたらしく、では暫く入院して御覽になるのも好からうと云つたの

で、父も衰弱した病人を伴れて行つたり來たりするのを危ぶんでゐた處だから突磯にでは早速入院することにしてそれから落ちついて診察を受けようと言つて田村と云ふ内科の部長へ宛てた岩田醫師の添書を貰つてすぐ様、貞吉に邦夫の入院の手續をすませて來るように病院へ行つて來いと命じた。貞吉はどうせその日は邦夫を病院へつれて行く爲に學校を休むつもりで話のきまるのを待つて居たので早速支度をして出掛けた。まだ九時過ぎだつたが田村博士は學校で講義中で掛の看護婦や受付では診察がすまなくては入院は出來ぬから病人を先づ伴れて來いなどと云つて尋ね明かなかつた。とても邦夫は普通の外來患者の様に控室で長く待つてゐて診察して貰ひそれから病室の支度をして貰つて入院するような事に堪えられる容躰ではないので貞吉は三十分あまり田村博士の講義の終るのを待つて岩田醫師からの添書を渡して色々容体も述べ入院の指令を貰つて病室の都合をして置いて入院願の身元保證書も後で出す事にして、途中で役所へよつて保證書の判を父の同僚から貰ひ車を二臺備つて家へ歸つた。部長の診察は午前中なので早速弟丈を先づ用意させて病室へつれて行つてすぐ様丁寧な診察を受けて病室へ入つたのは十二時前であつた。博士は助手達に右のショーピング・カタールだのコップ何とかだの云つて居たが脳膜炎の疑を持つたらしく首筋や足を動かせたり眼を検査したり嘔氣のあるなしを聞いたりした。貞吉は一寸彼のすぐの妹で邦夫の姉のしげ子と云ふのが二年前に女學校を卒業して間もなくやはり風邪から始つて腹膜炎になり脳膜炎を起してどう

どう死んだ事を云つて置いた。

間もなく母が荷物を宰領してやつて來た。貞吉は田村博士に會つてゆつくり診察の結果が聞きたくと思つて一時前部長室を訪ねたが何處へ行つたか不在であつた。で大國と云ふ丁度診察に立合つてゐた醫員に會つていろいろ問ひ訊して見たところが、どうも脳膜炎の初期を見てゐるらしい、發熱が續くと憂慮すべきだと聞いて貞吉は驚いた。二年前しげ子を失つたのにもあれ程落膽したのにまた邦夫をも失はねばならぬのか。素直なしつかりした好い子だと思つてゐるのに、而も男の子で兄弟中でも一番よく出來てる子だのにむざく殺してしまふのはとても惜しくて堪らない。希望に満ちた前途も此儘葬つて若葉のまゝ朽ちてしまふとはとても信せられない程可哀想だ。どうかして生きかしてやりたいと思ふ。それにまだしげの時のように手遅れではないしほんの初期なのだ者、一番悪い結果は非常に渺くないポツシビリティー、しか持たないのだ。是非軽く回復させてやりたい、と貞吉は一瞬時に心の中でいろいろの考が群るように湧上るのを感じた。でよく大國氏に頼んで、看護婦にその世話を頼んで置いて部屋へ歸つた。母はまだ足りないものがあるし家中取亂してあるからと云つてすぐ歸つて行つた。間もなく届けてよこした辨當を食つて、邦夫の氷嚢や巻法などの世

話をしてゐると三時過に母はまた物を運んでやつて來た。貞吉はそこで昨夜遅く迄掛つて書いた中學時代の極の親友の森山の死を悼んでその家へ宛てた悔狀へ同封する香奠を爲替に組む爲にいそいで郵便局へ出かけた。

森山は六高の三部を去年卒業する筈であつたが、二月頃風邪を引いて演習を休んで家へ歸つてから發熱してバラチブスになり四月頃一旦よくなつたがまた助膜炎と腎臓炎を併發して非常に悪くなつた。小さい時肺病をやつた事があつたのだが、それが高等學校三年の生活の終りにとうと再發したのだ。しかし中學時代などは餘程注意して健康を養ひ、身体も大きく柔道も指折りの中に入りテニスも上手で快活に暮してゐた、それが一度病氣になつたらグンと駄目になつた到頭一年あまりやはり醫者のお父さんが極力手當したのに亡くなるようになつてしまつたのだ。去年の夏はるゝ病床を見舞に行つた時にはこの級友のYが寫眞を見て邊見十郎太と評した魁偉な容貌は頬がゲッソリ落ちて目玉ばかり相變らず大きく一層白眼が青くなつて髭も頬鬚も長く生えて一緒に行つた砂川は明治天皇のようだと後で評した程神々しい位に憔悴してゐた。廣い肩幅が骨立つて腰の方に急に細くなり、足は一層細く小さく、俺は觀音様を信心しないから癒らないんだそうだと云つて、病床の傍らの厨子をながめながらニヤリと淋しく笑つて、床の上の坐り椅子に倚つての面貌には驚いた。之で安心したと云つたらもういつ死んでも好いかと淋しい笑顔をして云つてそれから半

年も前の事を面白さうに話せて聞かせたが、去年の暮、珍らしく自筆のハガキをよこして君が會ひに來て呉れた時よりは餘程よくなつたと云つて來たので、或は二學期には學校へ出て首尾よく卒業することもがなとひそかに思つてゐたのに、それどころか學校をよして静かに數年を保養して暮すと云ふことさへなく、とうとこんな事になつてしまつた、貞吉は愈々折々見舞のハガキを出してゐたがいつも返事がなくて突然砂川から一昨日訃報を得たのだ。

其夜は砂川への返事を書いて潰してしまつた。砂川と森山と貞吉の三人は中學の寄宿舎で五年の時には同室にゐて殊に砂川と森山とは郷里も近く貞吉のように中途から寄宿舎へ入つたのでなく交際は非常に親密であつた。其砂川が去年高商卒業間際に散々に昂じて來た遊蕩生活の破綻を暴露して、故郷の町の由緒正しい大商人の後取として、老いた父母を其まゝにして置いて、都會で自由に活動する事は勿論許されないで、家へ引戻され、四月許り逼塞させられた結句、やつとの事で研究科へやつて貰ふ事にしてまた上京したが、遊びは一層輪をかけてだらしなくなり散々な有様で、同窓の者は引張風のよう景氣よく若い紳士や會社員として飛廻つてゐるのに、砂川は父のきびしい命令で故郷に近いある都會でそのいまはしい病に犯された身をいやすべく、親戚の監督の下に蟄伏してゐるのである。さうして度々迷惑もかけ、或点では彼が病氣の原因を作つたかもしけない覺がある、心から頼りにしてゐた親友の森山が死んでも、家の名譽がある爲に、故郷のあたりを立廻る

事が出来ないで、死顔を見る事はおろか悔状も書けないような破目になつたのだ。砂川のお父さんは森山家からの通知に接して、悴は合憎病臥中で御葬式にも参列出来ないから、療り次第罷出ると返事して、砂川に其つもりでゐるを命令して來た。砂川は自分の不甲斐なさと森山にすまなかつたと云ふ考から、折も折なる苦しい出來事が重なるのに涙を流して悶えた。さうしてその煩悶の苦しみを貞吉に訴へて來たのだ。貞吉も驚いた。

どうしたのか森山家から貞吉へは通知が來なかつた。後から聞けば友達や舊師のところへはどこへも通知はなく、たゞ往來の殊に親密だつた砂川の家へだけ知らせたらしいが、貞吉は遠く離れてゐる事ではあり、森山の親達には左程重要な印象も與へてゐず、むしろ二三悪い印象を與へてゐる方なので他の友達と引括めて何の音沙汰もなかつたのだらう。それに森山が一年あまり病床に淋しく起臥してゐるのを訪ねたのは、前後にたゞ一度貞吉が砂川を誘つて行つたばかりで、砂川も自分の事にかまけ、親達も之も大切な一人息子を危険な病床へ遣りたがらなかつたので、時々歸省しながらつい息つてゐた。誰も森山に急な事があらうとは思つてゐなかつたので、それも無理はない。他の友達にみんな他所で働いたり勉強してゐたりして見舞の手紙もあまり出さなかつたらしい。難波の親達が別に通知もしなかつたのは、手を盡した長い看病の後に、とうとつた一人の秘藏息子を亡くした悲嘆のあまり、疎遠にしてゐる友達などへ通知するには手が廻らない位、がつかりして、取込んでゐたのだらう。

正月以来便りのなかつた砂川の手紙を受取つたのは、學校で三時間目の休みの間だつたが、貞吉はそれをあはたゞしく繰返し繰返して読み乍ら風のうすら寒い曇空のグラウンドを二時間足らず一人で歩き廻つて、心に群り湧いて来るいろ／＼な感想にすつかり興奮して、嘆き悲しみ苦笑し泪ぐんでクローバの上に坐り込んだり、足下に咲き亂れてゐる黄色のキンポーベに視神經を刺されるように感じたり、又立つて濃くなつた櫻の若葉の下を歩き廻り、城跡の細かな石垣を眺めやつたり、曇空をわびしく吹き飛んでゐる煤煙を仰いだりして、森山と砂川の事を考へ時のたつのを知らなかつた。其日の夕方も、飯を食つてから月の明るい町はづれの丘の上の道を散歩し乍ら、貞吉はいろいろに考へて家へ歸つて、森山の寫眞や澤山の手紙を取出して、其太い眉と牛のように大きくてしかし今は思出の盡きぬ者となつた手紙を繰りひろげて読み返し、おめでたい自分を暖い諧謔で戯かつたり、皮肉を云つたり、正面から説教したりして氣をつけてくれた者や、軽い氣持のよいローマンスを、今見ればよく平氣で讀過した者と、自分に呆れるような暗示を含んだ筆付で書き流した者などに、覺えず數時間を費してしまつた。中にも貞吉が入學試験に失敗して悲憤し落膽してゐるのを、懲めはげまし叱り怒りして、とうとく貞吉の處へわざ／＼やつて來て、會つて見れば何も云ふ事は

ないと云つて歸つて行つた頃往復した數通の手紙には到々涙が流れた。もうこんな手紙も貰へぬのか、愚かな自分を暖く抱きかゝえて導いて行つて呉れる森山はもう居なくなつたのかと思ふとひしと淋しくなるような頼りなさを感じた。貞吉のおめでたい空想と輕はづみな考を打ち明けて皮肉つて貰ふ大切な試金石は、もう此世からなくなつてしまつたのだ。最もよく貞吉を理解し、まさかの時は一番頼りになる森山は、茫然がつかりして後に殘つた貞吉を措いて逝つてしまつたのだ。

十一時過になつて貞吉は先づ砂川への返事を書くつもりで筆を取つた。砂川は森山の第一の親友としていろいろ迷惑もかけ乍ら、此一年間は殆ど無沙汰で、其死去の知らせに驚いてすぐ葬式に馳せ付ける事も出来ない苦悶と、それに自分が之からどうしたら好いかと、破綻した之迄の生活の悔恨を併せて煩悶して、森山が亡くなつたからには頼りにするのは君一人だと云つていろいろ打明けて貞吉に助言を求めて來たのである、砂川もあまりに順潮に進んだのでついやりすごし、もう引返す事も出來ぬ位に破綻を進めて、趣味生活や情感生活はもう阿片中毒のように必須的になつた位身に泌みこんでゐるので、もとより非常に善良な心の持主ではあり乍ら、父母を安心させ周囲をすつかり平和にし自分自身もずっと幸福な本當の生活に入れるのだと思つても、どうしても耻を重ねた顔を臆面もなく擡げて家へ歸つて居る事は、父母ばかりではなく、此度の事にもいろいろ後始末の爲に働いて呉れた彼よりすこし年上の忠實な番頭に對しても、其他故舊の誰にも、窮屈な肩身の狹

い思をせねばならぬので苦しかつた。それにこう迄なつた自分を顧みて由緒ある砂川の家を繼いで妻を迎へ子を作つて行くのが空恐しかつた。自分一人ならこれからそんな素質は抑へつけて行く事が出來ようが責任ある砂川の何代かの後繼者を作る自信はない。なるべくならばすべての之程の生活を一切棄て、自分一人で小やかな悔恨と再造の生活をはじめたかつた。あらゆる記憶は砂川にとつて苦しい者であつた。女に対する幻影ももうこんな破綻に陥つてはすつかり破れてしまつた。其方に未練はちつともあるのではないとも書いてあつた。

貞吉の返事は自からまづ森山を悼む言葉で數枚を費してしまつた。さうして砂川の心持にも同情して、その目の覺め方の早かつたのを祝し、早く創痍を癒し前の生活をすつかり脱離して、その方はすべて此限りと見切つて、全く心を改めて苦しいだらうが頭が下げて兩親に詫を云ひ、大人しく塵にまみれて前垂掛で働くつもりで家へ歸るように、決して再びいくらかの資本を持て大都會へ出て事業を始め、捨はれない生活をしようなどと云ふ考は起さず、て名家の相續人としてはじめから高い位地のある生活に入つて、老いた兩親にも安心させる方が賢こからうなどと、さう／＼三時近くなる迄しみぐした心持で書き續けた。森山が死んだからには貞吉も砂川ももう馬鹿では居れない、お互にしつかりしていつも迄助け合ひ抱き合つて行つて森山の靈を安心させようとも、感激のあまりに書きしるした。人間はすべて同じで、みんな醜惡な素質を持つてることはどうすることも

出来ない運命だから、その故にすつかり悲觀して、善いところも非常に多い自分を諦めて葬つてしまふ必要もなく、それは却つて罪惡であらう、たゞ向上を一念とすればそれで好い、とも慰めた。

昨日は又弟の病氣で心配し乍ら、やはり夜遅く迄かゝつて森山の兩親へ宛てた長い悔狀くやみじょうを書き、秘藏子をなくした心に同情し、しかしあまり返らぬ嘆きに却つて健康を損つて森山の靈を苦しめぬ事を願ひ、いろ／＼森山に世話になつた事を述べて禮を云ひ、尙みんな友達甲斐がなくて誰も葬儀に列なれなかつた事を詫び、砂川の事もよしなに取做して、夏にはみんな揃つて追弔會を開くべく出向くつもりだからと遺物や日記類などの保存を乞ひ、尙くはしく死際の事を知らせて欲しいと、なれぬ毛筆で巻紙の半分足らずも使つて書いた手紙に、恰好な供物も見當らぬ儘、少しばかりの香花料を封入しようと思つて、今日弟の邦夫の入院騒ぎの相間にやつと時間を間に合せて爲替を組んだのである。

貞吉は早速引返しても一度病院に田村博士を訪ねて見た。丁度部長室の前の廊下で行き合つて、立話をしながら聞くと、脳膜炎の徵候ははつきりしないが、右の肺尖カタルに餘病を併發したのだから、當分絶対に安靜にして熱の下がるのを待たなくてはならぬと云ふのだ。勿論一二週間で全快することは覺束なく、うまく行つても此學期は學校を休んで轉地をする方がよからうとの事であつた。貞吉はやゝ安心して生命さへ助かれは好いのですからと吳々も配慮を頼んで置いて、それから

役所へ出かけてすべての経過と二人の醫者の話を父へ傳へた。父は煙草をふかしながらしかめつらをして聞いてゐたが、おしまひに困つたなと一言云つた。貞吉は兎に角出来る丈の事をして置けばどうなつても後悔することはありますまいと云つて置いて、家へ歸つて有り合せの冷飯で夕飯を早くすませて、それからまた病院へ行つて母を歸し、夜遅くいろ／＼の事をすませてまたやつて来る迄、一人で看護すべく漸く心を落着けて病床の傍らに坐つた。

看護婦がこしらへて持つて來て呉れた罨法の材料を湯を沸せて邦夫の腹へ當ててやつて、氷嚢の水と代り代りに時々取かへてやる外は、夕方薬と牛乳を少し飲ませそこらを取片付けた後數時間、ほんやりと薄暗い電燈に照されて苦しさうに息をついてゐる弟を見まもりながら、貞吉はいろ／＼の考が頭に群り湧いて來るのに委せて、繰れども繰れども盡きぬもつれ合つた感慨の糸を靜かにほごしては引出してゐた。昨夜は丁度森山の家の悔狀を書きかけて、又森山の手紙などを取さばいて見てゐる處へ、級友のYが珍らしくやつて來て、早速貞吉から森山の事をいろ／＼きかされて數枚の寫真や手紙を見せられた後、改つて其前日貞吉も聞き込んだ級の擔任のK先生が辭職するに就る事だから、此際至急取計つて、此月末に東京へ歸ると云ふのだから、それに間に合ふように贈りたいと云ふ事と、先生が別れにみんなと一度級會をやつて行きたいと云つてゐるから、貞吉に其奔

走をしてSやU達を説きつけてやつて欲しいと云つて歸つた。Yは丁度級の雑誌の編輯の番で、貞吉は約束して置いた原稿を催促にはるぐ來たのかと思つて、其言譯にかゝつたのだが、Yは其事は一言も云はないでまだ行かねばならぬところがあると云つて、一時間あまりゐて十時過に町はづれの貞吉の家を去つて行つた。Yはいろいろな事でK先生に感激し、又心から同情してゐるのである。K先生は去年の秋から夫人と赤坊とお母さんを續け様に三人亡くして、幾人かの子供を抱へてガツカリしてしまつて、もう學校へ出て講義をする元氣はなくなつたのだ。親鸞上人の崇拜者で、單純な頑固な人だが、暖い親切を其強情な一本調子の中に含んでゐて思切つた事も云ふが、いつもにこにこしてゐて決して短氣な怒つた顔を見せた事がない。酒が唯一の樂みであるが、夫人を亡くしてから益々酒杯に親んで、涙を流して酒をのんでゐたり、教壇へ立つて講義し乍ら思はず南無阿彌陀佛と小聲でつぶやくような有様であつた。克明に下調べをせねば教壇へ立てない方で晚酌を制する人がゐなくなつてからは學校も追々欠席勝になつた。小學校へ通つてゐる男の兒が母を慕つてしまく隣の部屋で泣いてゐるをもうそれをほつて置いて出勤する事は出來ないと、貞吉に語つた事もある。三年間異例にも級の擔任をやりつゝけて貞吉のよくな自由な拘束のない思想を要求するはねかへりの肌の者は、まるで了解せられない爲にさんざ苦められたが、しかし其爲好い氣になつて飛上つて大した過失をするような事はなく、抑えつけられた儘無事三年を過した。一般の者は其頑固だ

はあまりに幸福すぎると思つたK先生の生活が、こんなに迄みぢめなものになるものかと、弟の顔をみつめながら、世の中に幸福なものは無いものだとしみぐ思つた。

級の同人クラスがやつてゐる短歌會の記念出版の校正ももう出来るところである。それは他の人に委せてあるが、部數の割當や出金などで相談する事もいろ／＼あつた。Yのやる回覽雑誌の原稿も草稿文は苦心して書きためたが、整理して清書するには隨分ひまがかかるとても間に合ひさうもない。明日學校に行つたら断るより外はないと貞吉は考へた。不思議やその原稿は二年前に死んだ妹の最後一年間の生活を記念すべく前からの雑誌へ書きつけたものだが、最終篇として臨終迄の病中の事を書いた記憶がまさ／＼と生新しいにつけて、目の前にそれと似た病状で苦しんでゐる弟を見て貞吉の嘆きは一層高まつて來て咽喉がつまるように感せられ、熱い泪が目にじみ湧いた。妹はやはり二月の半ば頃に風邪を引いたのが基で腹膜炎おもづきになり、二月も絶食同様で苦しんだ揚句、病床で女學校の卒業證書を手にすると間もなく、とう／＼脳膜炎のうまくえんになつて、入院してぢき死んでしまつたのだ。妹の時は、最後迄貞吉は死ぬとは思はなかつた。さうしてさんざひごい事を云つたりいちめた。りして、暖い言葉こたはは一言も掛けてやらないではつて置いて、看護もめつたにせず自分の事ばかりにかまけてゐた。それで死んだ時には今更のように可哀想で、そして實母も十五の時亡くしたので、一番近い愛情の棲家であり理解し同情して呉れるものであつた事を痛感して愛惜に堪えなかつたの

で、今度はもう其悔を再びせまいと思つて、平生家の事は何一つ構はぬのに、邦夫が病氣になつてからは、進んで其手當を行届かせるように主張し、手遅れがないようにと云つて、こうしてまだそれが程でもないのに病院へ入はらせるようにしてついて來てゐるのだが、此弟もまたいけなくなるのではないかと思ふと、兄弟が自分一人を残して次々と死んで行つてしまふようで、云ひようもない淋しさを覺えるのであつた。次の弟も月足らずでとても育つまいと云はれた位で、頭ばかり大きく身體の發達は不完全でまだ／＼安心は出來ない、最後の妹も見掛けは好いが死んだしげも一時十五貫あまりの躰量があつたのにあんな風にして死んでしまつた。はては自分もあぶないのであるまいかと思つて貞吉は恐ろしくなつた。自分が死ぬのは構はぬ、しかし自分が死んだら如何に父は失望し落膽するだらう。悲みに變りはないかも知れぬが恐らく弟妹の比ではあるまい。とにかく死ないようになへしてゐればそれで孝行だとつまらぬ事をしみぐ思ひ知るのであつた。無理な勉強も止し、不節制は勿論謹んで、健康維持を第一にせねばならぬ、健康さへ完全に維持されば他の事は從つてよくなる。健康がいけなくなるようなら他の事もきつと駄目になるに違ひない。森山のような立派な躰格の持主であれ程注意して攝生し乍ら高等學校へ入つて少し油斷して酒を稍飲み過ぎたばかりにこう／＼三年の終りに仆れねばならなかつた。只でも學問すれば身体は非常に傷む、餘程注意しないと自身のような者は危い、健康の点だけから云つても自分は大に縛まらねばならぬ、

それにもう森山のよな便りにしてゐた友達は亡くなつた、高等學校では友達を作ることには全然失敗した、之から自分の生活が破綻すればもう助けて呉れる者はない、之に砂川は目の前にひどい破綻を暴露して貞吉に助けを求めて來てゐる、自分がしつかりしないでは人が助けられる道理はない、どう考へても好い加減に愚圖^{ぐづ}くしてゐたのでは駄目だ、つまらない一時の小さな享樂の爲に大きな未來を葬つてしまふような事があつてはならぬ、氣をつけようと貞吉は熱くなつて來た頭の中で夢みるよう考へ續けた。母もなく、妹も弟もなくしてゆく自分を考へれば流石にしかし淋しくなる、一人生きてゐて何をするのだとも思ふ。いろいろの追憶は波のように混亂した頭に湧いて來た。もうこんな事を考へるのはよさうとも思つたが、すぐその次にはこんな子供を抱へた父がしみぐ同情される。實母^かが亡くなつて以來心勞を重ねて大きくして來た子供が一人宛亡くなつてゆくのを見て、どんなに物狂ほしく感ずる事だらう。男だから自分が騒いでは家中治りがつかなくなるので、ちつとこらへて何も云はないでゐる者の、もう貞吉と邦夫との間には、しげとも一人生きてゐたら今時分中學を卒業してゐる弟の男の子が欠けた。小さい妹の下に二人赤坊をなくしてゐる吉ですら今彼女^{あいつ}等が生きて居たらと思つてゐるのに苦心して育てた自分の物が突然また掌から奪はれて行くのを見てどうすることも出來ぬ父の心は云ひ様もない程氣の毒である。自分と今の母との葛藤や、其間に立つて苦しんだしげや邦夫の神經の痛んでゆくのを目の前に見て感慨は尙湧く。ど

うかして邦夫は癒してやりたいと思つて、貞吉はやすみなく弟の額に手をやつて熱を見たり、脈をはかつたり、耳をすまして呼吸をきいたりするのであつた。今日は幸にして熱はあまりないようだ。マラリアかバラチズスを伴つてゐて間歇的に熱があるのかとも思ふ。しかし腹や頭が痛くて何も食へぬのはどうしたのだ。しげの初期によく似てゐるではないか。脳膜炎なら体質上もうどうする事も出來ないので云ふ。早くから体質を換へて置く以上手の盡しようがないと書も大國醫員が云つた。さうなれば絶望である。どうかそんな事にならないようと貞吉は素人考へ乍ら無暗に心配されるのである。こうして弟妹の事、友の事、先生の事などを次々とごつたに心に浮ぶまゝに考へて貞吉は四五時間のたつのをほんと氣がつかなかつた。^{かき}重なればいろいろの事が重るものである。それがすべて悲劇であるとは何たる事であらう。貞吉は自分の頭もすこし痛むように感じはじめた。

卒業間際で貞吉には生じいいろんな仕事があるので、一層忙しい。そんな事はむしろ面倒な位だかやつてゐぬ邦夫の爲に出来るだけの事はしてやらう、校友會の事なんか他の人に委せれば好い、會誌に何か原稿を書こうと思つてゐたが、それもよさう、これ迄家の者はまるで離れて暮してゐたが、之を機會に一生懸命働いて、之迄とは打つて變つて父母や弟妹と打融けるようにもなりたい、などと果てしなく考へてゐるところへ、やつと母が泊る仕度でやつて來た。父は病院へ來て見るの

も厭でうちで蒲團を引かぶつて寝てゐるさうである。貞吉は爽かな初夏の夜更に水のような月光にぬれてゐる病院の建物を出て、こんな好い晩には當前ならきつとK達と犀川べりでも散歩してゐるだがと、一層悲しい思に捕へられながら家へ歸つて、まだ目を覺ましてゐた父の枕下でしばらく坐り込んで話した後、静かに一日のめまぐろしかつた行動を思浮べながら寝床に身を横へた。

一九一八六五夜十二時

各部々報

—短艇—柔道—劍道—
—弓術—野球—音樂—
—庭球—講演—遠足—

第二十回 春季端艇競漕會
(四月十四日舉行)

9 白	8 青	7 青	6 白	5 赤	4 赤
淺川田合原木木澤本7秒	妹尾合口本城章義郎次文藤伊賢秀雄	和爾義惟純郎男義惟克平六	松舟伊藤施中	治吉門源田祝	繁青房重利賀江源
田勝荒中池	河關山本得木澤口	祐四龍國振	勝元衛雄	正中古浪崎谷	石松金新山河三
木澤本7秒	妹尾合口本城章義郎次文藤伊賢秀雄	妹木澤山	勝元衛雄	古中古浪崎谷	村代本谷口野井
7分38秒	4分25秒	3分51秒	4分7秒	4分41秒	3分38秒

縣立中學校選手決勝競漕	11 青	11 白
藤井田藤盛川谷	伊荒羽齋林吉古	伊荒羽齋林吉古
治清吉兒郎三郎太健	伊荒羽齋林吉古	伊荒羽齋林吉古
横勝伊荒高中近	伊荒羽齋林吉古	伊荒羽齋林吉古
山木藤木波村	伊荒羽齋林吉古	伊荒羽齋林吉古
俊直長作恒信璋	伊荒羽齋林吉古	伊荒羽齋林吉古
雄次二二雄郎郎太	伊荒羽齋林吉古	伊荒羽齋林吉古
4分43秒	4分20秒	4分20秒

第三部各年級選手競漕

柔道部

青 藤 石 三 家 塚 小 森

(年一) 藤井 井坂 野林 田

(年準) 太欣 正 榮俊

(年治) 郡藏 清 豊次 一

送別試合

白

紅

黒

第一部各年級選手競漕

赤 (年三) 後田 滉江 正大

(年勝) 一恒 新村 井橋

(年廣) 郎門 雄廣 次

來賓及職員競漕

赤 (賓來)

4分2秒

3分31秒

4分21秒

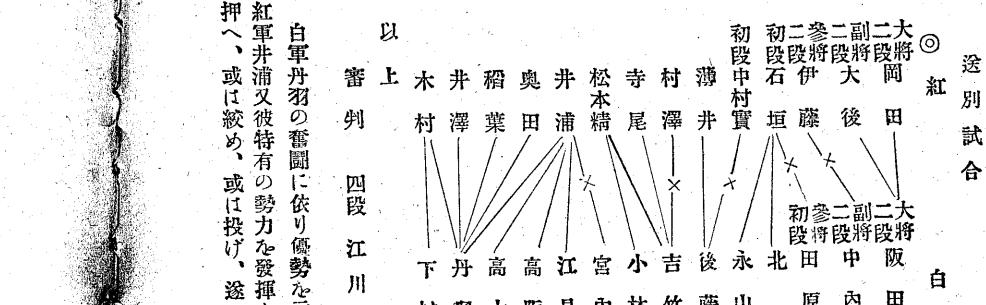
3分54秒

を熟知し其の戦振りたる實に充實したるものにて見る者をして手に汗せしむ互ひによく攻めよく防ぎ遂に引分く。

紅軍三將伊藤二段白軍副將中内二段は現はれたり伊藤猛然として中内を屠らんとし中内を逆に或は凹投げに或は押へに手を盡して攻む其の機にして敏なる事神業の感ありさが四高南下軍の大將をつゝめる程あると云ふ聲何處よりか涌出せり然れども中内二段よくこれを防ぎ防禦して攻勢をこり機を見て内股に入り業をとり互ひに持して放たず遂に引分けを

さり紅軍副將大後二段現はる白軍大將坂田二段現はる坂田一舉にして大後を屠らんとして進む大後聊か憂色あり然れども大後も名ある將軍奮然として跳巻きに入りしに坂田の巨軀よく其の功を奏せず互ひに憂業に移る坂田敵の腕を折らんと努め大後さばさせじと防ぎ秘術を盡して戰ふ其の様恰も猛獸の亂れ狂ふの感あり然れども遂に大後力盡きて坂田巧みに大後の腕を奪ふ

紅軍の大將岡田名老將は現はれたり岡田自重して坂田氣をいらち大外刈に入る



於て新進の士官内をよく防ぎ引分けをこり次に紅軍松本、白軍小林に涙を呑ませ
紅軍益々意氣を揚ぐ此の時白軍の怪児吉竹現はれ一舉松本寺尾を斬し老將村澤と引分く。
此に於て紅白勢伯仲し紅軍に寢業の大
家薄井現はれ白軍にシツヘルの稱ある後藤名將現はれ必死と戰ふ薄井衰へたるか
後藤上達せるか幾度か後藤押へられたるもよく此れを返し遂に薄井上四方に斬る
彼の心中察すべし後藤猛然として老將中村初段を屠らんとせしも中村老猶にして
遂に引分く。

初段石垣將軍撫然として鬚を撫で巨軀を現はし白軍の中堅永山を屠らんとす然れども永山又守固も然れども遂に石垣の飛行はよく其の功を奏し永山斬る白軍四將北同じく鬚を撫して現はる此れ又巨軀共に堂々として戰ひしも如何にしけん北の蹠きたるに乘じ石垣よく此れを押へ立たしめず石垣揚々たり。

初段石垣將軍撫然として鬚を撫で巨軀を現はし白軍の中堅永山を屠らんとす然れども永山又守固も然れども遂に石垣の飛行はよく其の功を奏し永山斬る白軍四將北同じく鬚を撫して現はる此れ又巨軀共に堂々として戰ひしも如何にしけん北の蹠きたるに乘じ石垣よく此れを押へ立たしめず石垣揚々たり。

白軍丹羽の奮闘に依り優勢を示せるも紅軍井浦又彼特有の勢力を發揮して或は押へ、或は絞め、或は投げ、遂に寢業に

岡田此の時なりと小軀よく飛び込み返しをとりて氣合の聲道場に響く江川師範業を宣言したるも坂田氣抜けの様あり岡田敏活にも飛馬の如く腕の逆に入り坂田遂に斬れ紅軍の勝となる。

白軍丹羽の奮闘に依り優勢を示せるも紅軍井浦又彼特有の勢力を發揮して或は押へ、或は絞め、或は投げ、遂に寢業に

當日壇師範の審判の勞を謝し、上原部長、岸、山本兩教授の御臨席を謝す。

石橋雅義君の爲めに

吾等は近き将来に涙を以つて君を送らねばならぬ。君は眉目秀麗文武両道を以つて、校内に聞えた。彼の南下の際常に先鋒として洛陽の天地を震駭させた、来る南下には必ずや笑顔を以つて君に見えらるだらう。君よ！ さらば(平田圭介)

春季大會記
青葉に薰る風心地好い五月十二日午前八時から、美しく設けられた道場で、春の大会が開かれた。「日本一の道場で殊にあの背影は何んとも云へぬ」と校長先生御自慢の道場で晴の技を競ふのは眞實に愉快なものだった。

校内の分は豫定通りの時刻に初める事が出来て嬉しかった。毎時も此通りであつほしいと思つた。左に優秀なる成績を得られた方の芳名を記す。

弓術部

春季大會記

青葉に薰る風心地好い五月十二日午前八時から、美しく設けられた道場で、春の大会が開かれた。「日本一の道場で殊にあの背影は何んとも云へぬ」と校長先生御自慢の道場で晴の技を競ふのは眞實に愉快なものだった。

校内の分は豫定通りの時刻に初める事が出来て嬉しかった。毎時も此通りであつほしいと思つた。左に優秀なる成績を得られた方の芳名を記す。

剣道部

五月二十五日送別試合を行ふ

游 田 井 澤

大 橋 佐 々 木

川 田 坪 井

利 根 川 土 手

森 田 新 谷

野 村 庄 司

義 和 田 佐 治

井 尾 小 倉

富 森 山 口

大 将 石 橋 中 川

大 将 黒 田 (○)

十射七(尺二的) 吉江君 高波君

同六中 同 鴻巣先生 高多君

同五中 同 村田君 坂本君

同四中 同 布施君 藤井君 舟山君

金的 村田君

對部試合を行つたが生憎庭球部の大會

や何かで差支へて柔道部と剣道部との試合しか行はれなかつたのは甚だ残念であつた

(鉄) 久田君 (柔) 後藤君

出席して日頃の腕を示された方は總て

五十三名、年々盛大になつて行くのはまことに喜ばしい。益々今後とも我部の爲に盛大なる御盡力を願つて置く。

午後一時から對外試合及來賓試合を行つた。

招待した各學校は、金澤醫學專門學校、縣立第一第二中學校及師範學校の四校で來賓としては、河合、橋元、村尾、吉江、柴山、初鳥の諸氏及本校の相良先生が見られた。

其内で優秀な成績を示された方の芳名を掲げやう。

尺的十射三中以上。各校選手の分。

(師) 大家君 (一中) 廣瀬君

(一中) 大河君 (一中) 吉澤君

(師) 山口君 (本校) 上野君

(本校) 蓮見君 (本校) 坂本君

(本校) 村田君 (本校) 吉江君

(醫) 石川君 (醫) 小栗君

第二中學校の選手が不參だつたのは遺憾であつたと共に、醫專の選手諸君が運動會でお忙しい中を來ていたいたのはまことに感謝いたへぬ。

來賓の分。尺的三中以上

河合氏、橋元氏 柴山氏 鴻巣先生

白紙君 高波君

金的。上野君 橋元氏 楠先生

上野君先づ見事に金的を射中して、名譽を博す。

かくて茶菓を供し、賞品を授與し、盛會裡に會を閉じたのは午後五時頃。柔

い初夏の夕日が尾山城の城壁にあたつて木々の若葉が青く光つて居た。

私達は此夏休を終るまた南下の爲に必死の練習を積まねばならぬ。それを思ふと身内の内が思はず引締る心地がする

かくて茶菓を供し、賞品を授與し、盛會裡に會を閉じたのは午後五時頃。柔

い初夏の夕日が尾山城の城壁にあたつて木々の若葉が青く光つて居た。

私達は此夏休を終るまた南下の爲に必死の練習を積まねばならぬ。それを思ふと身内の内が思はず引締る心地がする

かくて茶菓を供し、賞品を授與し、盛會裡に會を閉じたのは午後五時頃。柔

い初夏の夕日が尾山城の城壁にあたつて木々の若葉が青く光つて居た。

私達は此夏休を終るまた南下の爲に必死の練習を積まねばならぬ。それを思ふと身内の内が思はず引締る心地がする

かくて茶菓を供し、賞品を授與し、盛會裡に會を閉じたのは午後五時頃。柔

い初夏の夕日が尾山城の城壁にあたつて木々の若葉が青く光つて居た。

私達は此夏休を終るまた南下の爲に必死の練習を積まねばならぬ。それを思ふと身内の内が思はず引締る心地がする

野 球 部

寂靜と偉大とに飾られし冬の、あはれ、草なく、縁なく、人目も枯れし冬の大運繩の姿は、いつしか夢の如く、水泡の如く、消えて、光と、歡喜の春は來る。

草は崩え、花は滴れて、泉囁き、流れは奔りて、森に、雲井に、懷しき鳥の歌の、響くを聞けば、何處も、色々、樂と、美と、

力ならざるはなし。白雪燈々たる吾仙石ヶ原にも、何時しか春は來りて、光と、

雲と、競い奔る春の潮の響を、此のも、彼のも、聞く。若人の蘇み返るべき時、吾部の春季大會は開かれたり。

四月十七日午後三時より次の如く試合は舉行せられたり

各チームの勝敗(上が勝 下が敗)

英法三年 對 二部二年乙

文科三年 對 庭球部

英法一年 對 劍道部

弓、漕、雜、混合 對 柔道部

まづ英一軍の先攻にて初まる田中のSSへ打ちしも一壘にて倒る竹村F.に打ちしも又死し小林ヒットありしも。磯谷の四球。山本のPゴロにて終る。英三軍交るB.佐竹のミスを利し宮島S.にフライを打ちて死し大橋フライを打ち同じく死し中山安全球にて佐竹生還中山生還有安の三振にて終る。

英法二年甲 對 文科三年

文三の先攻にて二点を得しに反し英軍第一回は甚しき勢を示したれども十二對十一にて文科の勝。

二部一年甲乙合併對獨一年

(二部を都合により不戰勝者とせり)

二部の先攻。鈴木Pゴロにて死し瀧澤

フライに凡死死村山四球加藤S.のミスに

B.によりしも新田の凡死に終る。獨軍

交る。白川死球尾崎3.のミスにB.を取

る加藤飛球をR.に打つ白川生還一点を

得。野次連大いに喜ぶ山本フライに死

し於勢三ストライキに一壘に死し真保

三振す一回終る。獨法野次軍を煽動し

て盛に野次りしも勢揚らず四回まで無

爲。二部軍同様。七回まで同点。八回

獨法二年 對 二部二年甲
文科二年 對 三部二年
英法三年乙 對 二部一年丙
獨法一年 對 英法三年甲
英法二年甲 對 英法二年乙
獨法三年 對 二部三年甲
以 上

獨軍先攻松村四球。清水フライアウト。
藤川ヒット。青山の二ベースヒットに
松村藤川生還。横地四球。眞弓S.のミ
スに二壘を得。青山の生還。中内四球。
瀧脇凡死終る。水口四球。松本ヒット。
川本の犠牲球に松本生還。伊藤三振高
島ヒットを出せしも荒川の三振にて終
る。十四對八にて獨法の勝利。

(紙面のみにて止む) (七回勝負)

(四月二十五日より) (七回勝負)

弓、漕北辰會各部混合對庭球部

庭球部先攻。上田C.のミスにて一擧三

壘を占む。眞保三振。山川S.にラン

ダーを送る。上田生還。於勢のファル

フライを取られ。竹村一壘にコロを打

ちて終る。混合軍加藤の一壘へのゴロ

で死。横山デットボール得意。塗鹽し

て三壘に進む。南三振。尾崎四球。バ

スボールにて横山生還。村田凡死。一

回終り。五對一十Aの得点にて庭球部

破る。

獨法二年 對 三部二年

(三部二是抽籤にて參加)

英法三年乙 對 英法一年

七對二十A (ブラス) にて英三の勝利。當大會の模範試合と自稱せるだけにて仲々の美

事なる勝負なりき。

（中村）
も出で、居るのは、一寸困る、之も何にかの、具合であらう。兎に角、新選手の如く揃つて居らねから、一寸當りがつかぬかも知れぬ。然し、死球が、三個ある日の、歓びを、必ず、味ふじやないか。學校の名譽にかけて。最後に今や母校を去る。中山、宮島、横山、藤井、諸兄の前途を、健康を祝し。併せて、今後も益々吾野球部の爲めに、充分盡力せられん事を、希望、切願す。

音楽部々報

今年の私達は、かなりの努力を續けて來た、かなりの成功を奏して來た、多からぬ力量と僅かの豫算とに限られてゐる私達としては、かほどの努力、成功こそ私達をして自惚れさせぬまでも満足させられるには充分なるものなるを斷言する。然し私達は進歩する、發達する、現在の達成

10. Bass Solo: Mr. Nagata.
Lorelei. Sibeler.
11. Violin Solo: Mr. Kato.
Ercense Op.20. No. 2
12. Vocal Quartet: Members.
Over the Waves. . . . Rossas.
The Blue Bells of Scotland
. Ballad.
13. Piano Solo: Mr. Tominaga.
La Priere d'une Vierge
(A Maiden's Prayer)
. Badarzewskia.
14. String Quartet: Members.
Traviata. Verdi.

Piano Accompaniment:
Mr. Tominaga.

音樂部人報

今學生の和達はかなりの努力を怠らぬで來た、かなりの成功を奏して來た、多
からぬ力量と僅かの豫算に限られてゐる私達としては、かほどの努力、成功こそ、
私達をして自惚れさせぬまでも満足させることは充分なるものなるを断言する。然
し私達は進歩する、發達する、現在の満

習の開始が遅れたのである。二月になつても雪がなかなか減らない。工夫に一中のコートの雪を除かせたのが二月の終で三月の一日にやつと静勝館から外の練習にうつった。

毎日の猛烈な練習から歸る時分には町には灯がさぼつてゐた。幸に三月は天氣も可成良かつたので練習が大分出来た。さやかくする中に三月も終りになり三十日には學期試験が済んだ。その夕方時習寮では盛大なる宴を張り南下の行を盛にせられた。熱盛なる歓呼の中に金澤を出發した。明ければ三十一日朝早くし大津についた。部の先輩長谷君がわざり出迎に来て下さつた。京都驛には多くの先輩來て居られた。朝早くしかも寒いのに、誠に感謝した。

吾々は遂に戰場に來た。この静かな、活動そのものが既に夢の中に動いてゐるようなこの洛陽の地に特に血醒い戦が開かれんとしてゐるのである。選手の意氣は彌が上にも擧つた。この度の南下軍の一行は次の通り

足に躊躇して未定の誠意ではない。かほさ
の事に安んじてゐる今の私達を、なつかしく
も恥かしくも感する時の、やがて來らん
事を期待する、そして其の來る事の早き
を切望する。

音楽部の搖籃時代より、色々と盡力し
下さつた大西先生は、先生自身の御都合
の爲めに、辭される事となつた、それで
今度女子師範學校の飯塚先生に御願ひし
て、漸く來て貰ふ事にした、御忙しい中
を特に盡されんとする先生の御好意を深
く謝する、總して金澤の音樂家は——飯
塚先生は勿論大西先生にしろ、加藤先生
にしろ——皆私達に同情して下さるのが
嬉しい。

- | | | |
|-----------------------------|----------------|---|
| 4. | Violin Duet: | Mazurka Members. |
| 5. | Baritone Solo: | Massa's in the cold, cold
Ground Foster. |
| 6. | Violin Solo: | Dixie Land . . . arr. by Rossey. |
| 7. | Vocal Quart: | Angel's Serenade. . . . Brage.
Comitat. . . . Mendelssohn. |
| <hr/> INTERVAL <hr/> | | |
| 8. | Piano Trio: | Members.
Freischütz. Weber. |
| 9. | Mandolin Solo: | Barcarolle. . . . Offenbach. |

森本英吉	（上）真保敬四郎	（上）山川鹿三郎	（上）井上田重一好
記 錄	於 勢	（竹村）都三 莞爾	（林）一五 康
若林虎之助	佐 竹 次 郎		

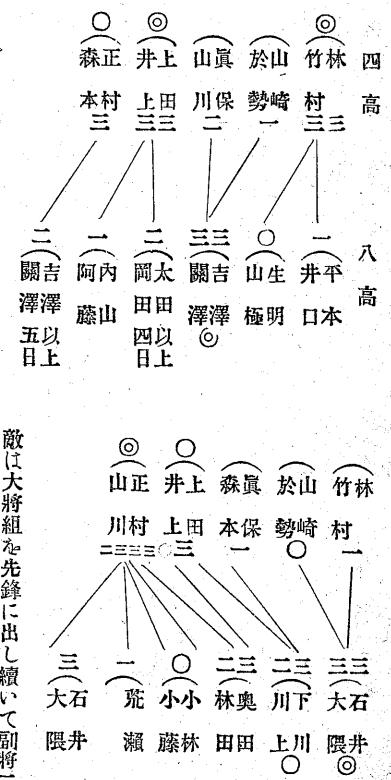
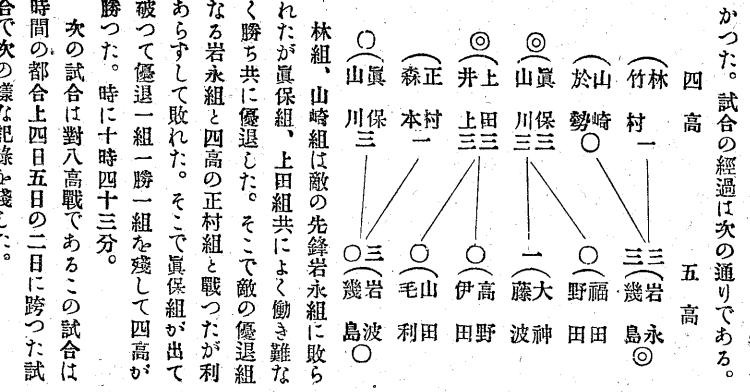
庭
球
部

Piano Accompaniment:
Mr. Tominaga

暖い無い寒い詰腹餌で南下の練習を始めたのが一月の中旬であつた。大雪の爲

時半一同元氣よく宿を出た。試合は八時半から始つた。此朝はよく晴れて曇がなかつた。試合の経過は次の通りである。

四 高 五 高



敵は大將組を先鋒に出し續いて副將三

將の順で陣を布いた四高は林組・山崎組、真保組は續いて敗れたが上田組奮闘して川組を破り氣勢大いに擧つたが遂に奥田組に破られた。四高ではいよいよ大將組が出た。先づ奥田組を破り續く小林組、荒瀬組を難なく屠り遂に敵の優退組にして大將なる石井組と戦つた。二對二の大接戦を行ひ見物人をして幾度か手に汗を握らしめた。吾々は應援しきりにつとめたが遂に敗れた。實に惜しい處で敗れた。今年は吾人は敗れた。然り敗れた。然明年は必ず優勝する覺悟である。

最終に湯の川、長谷兩先輩には特に御

世話をなつた事を記し感謝の意を現す。
南下から歸つて後金澤庭球園で戦ひ、五月に入つてから當部春季大會を舉行した。

次の試合は對八高戦であるこの試合は時間の都合上四日五日の二日に跨つた試合で次の様な記録を残した。

試合時間四日は午後四時半より六時十分まで五日は午前八時三十分より九時十分までとあつた。

四月五日午前に八高と戦つた、四高は同日午後長崎醫專と戦つた。試合は次の如く進行した。

四 高 長 医

説き起して微に入り細を極めた反対演説は本職が検事正だけに甚た妻いもの、反対黨少からずアーテランてゐたのは是非もない、これも委員附託は残念だつた、採決の聲は可成り大きかつたが議長の苦笑に空しく躊躇されて丁つた。

電氣事業國有法案(政府提出)山崎遞信大臣が説明する、民權壓迫の叫びが興り

さうになると、直ぐ委員附託の動議が出たのは如何にも飽氣ない、議案の内容が

決への聲は可成り大きかつたが議長の苦笑に空しく躊躇されて丁つた。

電氣事業國有法案(政府提出)山崎遞信

大臣が説明する、民權壓迫の叫びが興り

さうになると、直ぐ委員附託の動議が出たのは如何にも飽氣ない、議案の内容が

決への聲は可成り大きかつたが議長の苦笑に空しく躊躇されて丁つた。

電氣事業國有法案(政府提出)山崎遞信

六月一日、我部の主催にて市内中等學校聯合演説會を開く、出演者左の如し。

青年の意氣と發揚

繪畫の近代思潮

本校 古坂 明詮

工業 永井 準一

先づ己れをよりよくせよ

吾が宗教

二中 内藤 正雄

衰頹文明と自殺時代

師範 三井 豊次

活動と哲學的生活

一中 小林 由雄

創めゆく心

本校 上田 誠一

諸君の最後の熱辯を聽けり。

六月八日、送別演説會を開き、卒業生

古坂明詮、藤野 靖、土手守吉

加藤一郎、尾崎忠常、上田誠一

次年度委員左の如し。

古坂明詮、藤野 靖、土手守吉

加藤一郎、尾崎忠常、上田誠一

アルプスは大略南北中央の三部に分かれ

信州の松本町を中心とした半径二十里足らずのコンパスを回轉させれば大抵皆其圓内に這入つてゐる。鎗ヶ岳は松本町のほゝ西、直經凡そ十里の處に位し海拔一万五百尺、其雲際に屹然として聳えておる様は觀る者をして直ぐ透徹無比の感じを起さしめるのである。

同じく、去年の春であつた。飛驥横斷の際に自分が高山城趾の頂からこの鎗ヶ岳を見見た時自分の心は異様に動かされた。今から思へば此時が此山に対する自分のラブの萌芽であつたのだ。自分は登山旅行に旅立ちしてからも、たえず一種の不安に襲はれ勝であつた。然し一高一低道中幾多の困難の中には又別種の慰安と歡喜がありて自分達を待設けてゐて呉れた。アルプス行一篇は自分の此の山に對する戀物語とも見られない事はあるまい。ではこれが例の古い覺束無い殆んど夢の様に淡くなつて了つた一年前の記憶を辿つて其山に對する自分の戀物語をほつと始める事としよう。

遠足部

アルプス行

小さな人間共が何の彼のと云つてゐる間にも月日の運行には暫したりとも答赦する所がない、とうとまた長い樂しい詩に充ちた夏休のページが如何にも自然に又パンクチユアリティに吾等の眼前に押し開かれて了つた。さて此の夏休などを押して暮そう。多分數多い諸君の中には夢見る様に諸所方々を彷徨ふて見たいたと思はれる方があるに違ない、そして避暑にしろ何にしろこの旅に出たいと思はれる方の中には恐らく又數人のアルプス

へ登つて見たいと渴望する、方もあるに違いない。自分は單にアルプスの一部分には過ぎないが、小さな手帳と膝馳けなる記憶を辿つて去年の夏登つて來た鎗ヶ岳登山の模様を少々述べて之等アルプス登山希望者の爲めに下手な案内者たるの役目を取らして頂かう。

先づ登山者は岩波書店發行の日本アルプス登山案内を一瞥しておく必要があると思ふ。此書に依つて諸君は日本アルプス

スに就いて的一般的知識を得る外に、旅して、殊に登山の際に何よりも豊富であつて欲しい植物の豫備知識を少々なりと得る事が出来るであらう。實際旅して自分のいつも殘念に思ふのはこの博物學の知識の淺い事である。路傍に黙々と咲いて居る色々の草花を見ても何等温い同情を呼び起せなくてはその旅は誠に淋しい旅であるだらう。それ位ならいつそ繁華な都會に身を投じて自分の前を通り過ぎる幾多の美人に横眼を呉れてやる方がすつさゝ意義ある事ではなからうか。たゞ冷たい自然の懷を慕ふて行く旅人の心中にも一時として忘れられないのはこうした美はしい味よき人間味である。バイロンは云つてゐる「人情を去つて何が正義だ!」と、眞に燃ゆる様な人の情の焰を其胸中に秘めてゐるのは實に彼等旅人である。旅は彼等に云つては此の情熱の中和作用たるに過ぎないのだ。だから一度び彼等に戀をさして見る、彼等は屹度燃えてく燃え盡して灰になつて了はなければ承知しない様な戀をするだらう。

七月二十七日と云へば丁度夏休の半ば頃でそろく蝉も鳴き出し愈々暑さに入る時である。一度歸國した者にはその懷しい樂しい故郷を見捨て、暑苦しい旅に出るのは可成厄介な仕事ではあるが、お山開きが此頃でなければ始らぬからどうも致し方がない。始め此旅行の應募者が十五名許りあつたのが色々の故障のため實際參加出來たのは左の十名であった。

高畠 先生

岡本金澤專賣支局長

森田良雄君(帝大)

森田外茂吉氏

一、三、甲 生 子 芳 郎君

二、三、甲 山 川 鹿 三 郎君

二、三、甲 山 口 六 平君

三、二、 田 中 國 男君

二 中 生 中 村 常 雄君

此度の旅行は我部としては始めての試みであるから旅程など查べる上に隨分骨が折れた。それらの面倒を悉く見て下さつたのが、高畠先生で一行はま

さて一行は二十七日の朝六時に旅装輕

前の飯田旅館を出發した。夏の朝は實によい。殊に高原の夏の朝は空氣が澄み切

づて其氣持の爽かな事は格別である。馬車は松本町を離れるご直ぐ廣々とした信濃高原に出た。窮屈な箱の中で右に搖られ左に搖られ時としてはコツシと柱に頭を打つなごも反つて旅の愛嬌であった。日除けに垂れてある幕を引き上げて小さな窓から外を覗くと、アルプスの山は遙か彼方に豪然と聳え立つてゐる。

路傍はと見ればそこには白赤のクローバー

一が今を盛りと一面に咲き乱れて居る。

馬車は白い田舎道を砂煙を立て乍ら轟地に駆る。實に田舎の馬車旅行は面白いものだ。

一里餘り駆つた後馬子はとある鍛冶屋で馬に蹄鐵を打ち代へてやつた。波多村と云ふ所では餘り駆つたので車の心棒を冷す爲めに暫く休む事とした。しんぶん橋を渡つて大野田村に入ると丁度僕等よ

りも一日先に立つた松本聯隊の兵士を歓迎するため民家の軒毎に日の丸の旗が掲げられてあつた。もう島々迄五里的道も大方來たやうである。馬は餘程疲れたと見えて瀧の様な汗を流して居る。けれども振り上ぐる馬子の鞭に促されて十時少し前にやうやく島々村の清水屋の前にあえぎ着く事が出来た。

島々村はアルプスの登山口として又上高地及び白骨温泉への關門として登山熱の盛になつて來た近頃にやつて一般に知られる様になつたのである。一寸した和製の登山旅裝位は大抵ここで整へる事が出来るであらうがそれでも矢張松本で充分身支度をしておく方がよさそうであ

の「オーライ」と呼ぶ聲が木靈に響いて聞えて來た。自分等は其聲に勵まされて四時頃にやつて峠を登り切る事が出來た。

七千尺のこの峠の頂では夏ながら春の時候である。自分は峠の頂で鶯の鳴くのを聞いて大變嬉しく感じた。溪の下の方からは確かにコマ鳥の轉る音も聞えてゐたと思ふ。昨日通つた軍隊が頂の木の枝に紙片で下の様な樂書をとてあつた。「孝行したい時に親はなし、今少し登りたくとも坂はなし」と。茶目連これを見てほっこ息をついて只苦笑するばかりであった。一足、峠の頂を下ると真正面にあの温雅な蘿高の雄姿がぬつと手にさる様に一行の眼前に現はれた。

は、「ん——之がアルプススタイルと云ふもんだな……」

うーん——實にい——

久しく憧れておつたあのアルプスに始めてこんなに近に接する事の出來た僕は思はず知らず胸の中に右の様な獨り言を繰り返さずにはおれなかつたのである。

上りにも増して急な下り坂を下つて梓

る。大事な食糧品は勿論の事些細なエハガキ類に至る迄山中では眼の飛び出る程高いから出来る事なら前以てそれ等を松本で整へておく方がいいと思ふ。清水屋は豫め強力や案内者の事を依頼してあつたから直ぐ用意が出来て重そな荷物は一切強力に荷負はし身軽な登山客にて十時半頃一行は元氣よくこの島々村を出立した。

正午近くに松本、小林區安曇官行研代事務所と云ふのに着いた。登山者はこゝで署名する事になつて居るのだが、試みに六月以降の通過人數を調べて見た處凡そ今日迄に二百三十人ばかりの數に達して居つた。短剣を佩びた應揚な山林區署の役人が、訓戒とも注意ともつかぬ態度で一行に次の様な事を云つて聞かせて呉れた。それは登山者の中で無斷で高山植物を採取しようとする者は相當の處罰を受ける事にならぬと云ふ事であつた。夫故今度の様な團体登山の場合には前以て學校から其筋に許可願を出しておく必要があると思ふ。

一時半頃に岩焦留のむさくろしい小舍

川の岸邊に達するごとく處には多くの兵士共が天幕の用意、最中であつた。桝川に架つておる吊橋の中頃にどつかと腰を打おろして今來た峠の方を眺めやる。それはもうまるで繪に見る山水圖そつくりである。毎年夏になると多くの畫家が筆硯を携へて懶しこんな不便な山地へ寫生に來る云ふが、之れではそれも全く無理からぬ事であると思はれた。

上高地の温泉に着いた頃はまだ日も充分明るい頃であつた。宿と云つても極粗末なものでたゞ雨露を凌ぐに足る丈さ思つておれば間違がない。本年から先刻述べた吊橋の袂に養老館と云ふのが新築されておるが此の方は温泉の無いのが缺點である。そして此の谷で家と云へばたゞ此の二軒があるばかりであつた。宿にはもう先着の登山客が大分見えておつて其中には外國人の夫婦連れ拵も混つておつた。何はさもあれ草鞋を脱ぐと直ぐ湯湯へ行つて早速一浴した。湯は澄み切つた單純泉で暑くもなく寒くなく丁度、ろあひの加減であつた。

夕食は勿論粗末なものであつたが大變に着いて辨當を使つた。此の邊りは海拔四千尺の高所で樹木が深々と生ひ茂つておるから山氣が霧が上にも身に迫るのを覺えた。例のヘルメット先生はお口の達者な様に足も大變達者そうであつた。いつも若い吾々をしてぐんぐん先へ行くのには吾々茶目共は大いに閉口せざるを得なかつた。處が茲に一つ痛快な事が天降つて來たのである。それは吾々茶目共が合力と一緒に、最も後れて、此の小舍を出る。間もなく一天忽ち搔き臺に置然たる音響と共に板の様な雨粒が沛然となり注いで來た事である。茶目共は強力の直ぐ近くに居たから早速雨具を着ける事が出来たがあのヘルメット帽は今頃どうなつておるだらうと其時こう想像する丈でさへもたまらなく痛快であつた。

雨は間も無く止んで太陽が木の間からニコ／＼と笑ふ。徳永峰は實に骨の折れ坂だ。吾々茶目共は今は先刻の痛快さをも打忘れ無言のまゝで杖に獅噭み付き十歩一息の有様で只管頂上を急いでおつた。其時上方から高いヘルメット先生

うまかつた。食後は暫く川邊に散歩に出た。桝川の水は明礬を放り込んだ様に飽くまでも澄み透つておつた。出来る事なら此の流の中に自分の身も心も融け込んで一緒にではなく流れで見たい、又出来る事ならあの向ふに、見る影もなくなつて、呪の様な煙を吐いておる、硫黄ヶ岳の火の中に此の生微温い現實を悉く擲げ入れて一切のものを灰にして了ひた。自分はいつかこんな考に捕はれておつた。其時はるか雲の中から「オイ、お前は生意氣な事を思つておるな、お前は少づほけな人間ぢやないか、お前なんかにまだ此大きな自然の仲間入りが出来たまる者か、——馬鹿らしい。草や木の生長を見るがい、おとなしく人間としての生長をするのが尤も賢いやり方なんだ。なんだ、お前はまだ、弱々しい何も知らない少づほけな人間ぢやないか」自分は不意にこう言ひ罵られたと思つた。其夜は、大きな火爐の側で新しく買つた金剛杖に鎗ヶ岳其他二三の山への登山紀念の焼印を押して貰つたりしながらお山に關するローマンスの幾つかを聞いたが

それは今茲で話さずに置かう。この山峠、上高地の夜が明けて邊りの景色は昨夜にも勞らず美しい。天氣は上日和である。

赤澤岩窟まで四里

ともに一同は温泉には入つて冷々する身をじつくり温める事が出来た。

一浴の後直ちに用意して出立する事さし

た。丁度六時頃であつた。今日は野宿をせなければならぬから米、味噌、醤油、罐詰其他必要品の多くを仕込んで強力に眷負はした。昨夜野營をしておつた松本聯隊の登山隊は今朝の二時にこゝを立つたそうである。道は梓川に沿ふて登るのだが軍隊がたつた今先登つたばかりだから前以て聞いておつた程困難でなかつた。と云つて險しい絶壁の山路を攀ぢ登つたり或は細い危い丸木橋の上を這ひ渡つたりする所も少くはなかつた。途中大きな針葉樹が晝尚暗く生ひ茂つて其下を歩くのだから涼しい事は涼しい。十時前に鎗ヶ岳の峰先が見える熊倉と云ふ河原で一同は辨當を開いた。

山へ登つて第一に欲くなるのは甘い砂糖類である。肉の罐詰杯も自分は確か下で食つた時より二倍うまかつたと記憶して居る。上等のビスクード杯を用意すれば尚よからう。又砂糖を混せたばつたいは輕便で目前の時大變役に立つ様である。荷にならぬ範囲で食糧品は成丈充分に用意しておくべきだと自分は今度の旅行でつくづく感じだ。

十一時半に早や今夜泊らうと思つて居た赤澤岩窟へ着いたが岩窟は既に軍隊の爲めに紙面封鎖をされてあつた。此の際難當は空つぽなるし假にも此の上坊主小屋登らう杯と云ひ出すものは一人もなかつた。皆んな岩の影で疲れた足をだらし金迄二里、炎天に當てられ乍ら峻坂を攀ぢ登らう杯と云ひ出すものは一人もなかつた。皆んな岩の影で疲れた足をだらしなく差し延ばし巻餅なんかを出して頬張り始めたからさう、誰がきめたともなしにこゝで暫く休む事となつた。ヘルメット先生は今はヘルメット帽を脱いで何とか紙片に鉛筆を走らせておつた、と暫くして「おい茶目共之でどうぢや」と渡されたのを見るとこんないたづら書がしてあつた。

今夜此小屋に宿らむと來て見れば

變便利だが坊主小屋の様に餘り頂上近くへ行けば薪木を探すのにも困難だし水を使ふにしても先づ雪を解かなければならぬ等色々の事に仲々骨が折れるだらう。一行は明朝二時にこゝを立つのだから差當り必要なのが提燈である。それで未だ明るい中から二部の連中に頼んで早々之を造つて貰ふ事にした。出來上つたのはピラミット形のもので仲々よく出來ておつたが之は翌朝持つて歸る途中さうかした拍子で壊れて了つた。惜いことをした。

明日の朝が早いので一同は今日ば夕方の六時に早例の牛小屋の草の上に雨裏座を敷いて寝る用意をした。小舎の入口では寒さ防ぎの焚火がごんごんと燃え頻つておつた。實に思出深い夕である。

鎗ヶ岳に登つて上高地に歸る、八里、

二時前に呼び起されて眼を開いた。強力は昨夕から殆んど一睡もせない様子、

機等の起きた頃には既に朝食の用意をもして呉れてあつた。入口の焚火は相變ら

砂糖類である。肉の罐詰杯も自分は確かにしな嘆きて、

武士は物のあはれを知るとかや、などと尙よからう。又砂糖を混せたばつたいは輕便で目前の時大變役に立つ様である。荷にならぬ範囲で食糧品は成丈充分に用意しておくべきだと自分は今度の旅

行でつくづく感じだ。

蓋しヘルメット先生も餘程弱つてゐたことを内者を連れて登つて行つた。

案内者を連れて登つて行つた。

談の上もう一寸上の馬場と云ふ所で風下に當る岩影で野宿の用意をすることとした。僕は此時、出來上つたあの珍妙な牛小屋とも山賊小屋ともつかぬ住居をどん

に諸君にお見せしたいかしれないの男はそれでも坊主小屋まで行くと云つて

話の上もう一寸上の馬場と云ふ所で風下に當る岩影で野宿の用意をすることとした。僕は此時、出來上つたあの珍妙な牛小屋とも山賊小屋ともつかぬ住居をどん

に諸君にお見せしたいかしれないの男はそれでも坊主小屋まで行くと云つて

47

歸り着き其の處で十二時過まで晝寝をした。四時過ぎ穂高の麓で氷りつく様に冷い梓川の流を徒渡りして上高地の名物男アルプスの主と云はれて居る嘉門治翁を訪ね其近くの明神池をも見て來た。宿へ着いたのは六時少し前であつた。

昨夕ヘルメット先生が切角こゝまで來たのだからついでに乗鞍へも登つて見やうと云ひ出したのだが他の者は暑さは暑、長安へ登つても人質で霧に用殺しちる

様な事があつては何にもならぬ扱と妙な處に類推を使つて結局ヘルメット先生として宿を立つて了つたのである。

残りの七人が宿を立つたのは八時半頃で途中大正湖に舟を浮べ湖上から美しいアルプスの山々をふり返つて望むことが出来た。此の湖水は大正四年の初夏硫黃岳、焼岳の大噴出の時にその噴出物が梓川の一方を塞いだために出来たもので湖中諸所に生木が其の頂を水面に現はし水

舎があつた。路はたえず梓川の右岸に沿ふて下りもう時々人家が見える様になつ

して居つた。稻核へ着いたのは正十二時で一同は川本屋と云ふ小綺麗な田舎宿で、辨當を認めた。村端れの白ベンキで塗られた稻核橋はその下を流れる青い水や邊りの緑の木の葉と相反映して非常に美しかつた。

の遺物たる漂石の好標本としてヘットナ
から程遠からぬ明ヶ平の路傍で氷河時代
に見いたのに一時半廻り途中に

ハテヘルベルヒの地理學正教授ヘントナー
氏が發見した者だそうで表面に搔痕のあ
る可成大きな兩雲母の花崗岩であつた。

島々では兼て云つてあつた通り、例のカタ馬車か、一臺一同を待つてゐて呉れ

ト先生の一行は何處でどうして居るであらうか。——一同は其夜互に別れを惜みながら又會ふ日を約してそれ／袂を分

は瑠璃の様に澄み輝いておつた。湖畔にはサイプレスの木が亭々と立ち並んで實に美しい眺めであつた。

木は殆んど枯死して渴を醫する岩清水など、どこを探しても見當らなかつた。路遙が梓川の溪底で所々藻々と湯氣の立ち昇る所があつた。恐らく自然のまゝ温泉が惜氣もなく川中にたぎり落ちて居るのである。

十二時半頃やつゞ水の出る木の下陸に着いたので、一同はそこで適當を開く事

こした。今頃はヘルメット先生の一行も、どこか涼しい木の蔭に休み饅等の事なんかを話しながら辨當を開いて居るであろう。白骨迄はもう間もなくからそう急ぐにも及ばない。途中自樺の林を通る時などアルプス土産として澤山その皮を剥ぎ取つてやつた。温泉に間近い邊りには牧畜に持つて來いの草原があつたが、一匹の牛も見當らなかつた。日本人はなぜこう土地の利用が下手なんだろう。

卷之三

つて了つたのである。

一九一八、五、二八、YS 生記

第三回 飛驒縦走紀行

ごんよりした空の下で驟雨が柳の糸と一緒に搖れてゐた。光明の中にも暗黒の中に、不斷に美を探求して止まない若い心を乗せて、鐵車ばひた走る。笠津から七人の脚は四十五里の道を一步二歩刻んで、六日目に夕陽に映える櫻花のトンネルをくぐつた。これは噪音の町を離れて再び噪音の都に至る間に、左の漂泊の群の味ひ得た閑寂の記錄である。

丁藤井

局 櫻 田 常 久
二・二・乙 増 田 新

三二 小山 良修

同上

一・一・乙 福 富 六 郎

午後零時四十八分金澤驛發。玻璃窓に連る南京玉の様な雨滴を見て、はい。

で、導かれたのは見晴のよい廣い清瀬な二階の一室であつた。この湯は硫黄泉でやはり入り心地のよい湯であつた。僕等の隣に諏訪邊の中學生が兩三名避暑に來ておつたが直ぐ一行を知り合になり夕方には僕等を連れて近邊を案内してくれた。夕食後暫くして名産のソバを味けつた。人里離れた山中温泉では眼に見えるもの口には入るもの、凡てのものは何處かしら懐かしい詩的な趣を持つものである。僕はそのソバにもそうした趣のわかつた事を今尚覚えて居る。

二時少し前に鹿間の鑛山事務所に着いた。亞鉛と鉛との産額は日本一である。鉛は此處で精煉してゐるが、亞鉛は燃料運

搬の都合で酸化亞錫のまゝ九州に送るさうだ。其外少量の銀と金とを産出する。年若い技師の案内で選鐵所、精煉所を精しく見学した。GORKYは其作物の中で、波止場で、荷足人足が大鐵船の胴か

ら一つ／＼荷物を運び出す場面を描いてゐる。そして彼は「人間自身の製作物は却つて彼等を屈服し卑下し使役してゐるのだ」と云つてゐた。自分には忘れ難い此の言葉、又は頗麁険的な坑夫の生活に對する幻を作り乍ら來たのに、全く裏切られて失つた。山頂の坑口から索道で下つて来る鑛石を、二十二三の男が立川文庫とかの講談本を読み乍ら待つてゐる。凡ては穏かな氣分である。が精煉の方に廻つた時、衰弱しきった骨ばかりの顔から凄い瞳を輝かして、首に刀痕のある男が、悪蛇の臍腹の様な熔鑛窯を、重い鐵の棒でかきまはしてゐた。金を精煉する所は柵を以て界を作り、年若い技師はその中

福な自分達に對して、柵の外から、二つの眼が羨ましそうに眺めてゐる。かくして三井や三菱は益々肥えて行く。暮れ早い山間の夕陽は代赭色の禿山に更に赤い光を投じ、其頂の大煙突からは、亞硫酸瓦斯の臭が鼻を襲ふて來る。船津柿下屋着四時四十五分。その晩、坑夫達の歌小原節が夜の空氣を通して震へ漂つた。今日は坑夫の勘定日である。長い間の暗黒と、ショベルと汗との生活の報酬も、無意に反射爐や、熔鑄爐をかきまししてゐたその報酬、それらが一杯の濁酒にて化する日である。彼等の争鬭も賭博も、淫蕪も、何等の不合理があらう。慈善者は先づ彼等を教ふ前に裸にならなければならぬ。申譯の徒弟學校、外面だけの病院、説教所がどれだけの價値があるか。小原節は悲しく消えて行つた。

新舊の文明が醜く入り亂れてゐて、折角
積み上げた、幻想がかう／＼と搖れ倒れ
た。神原峠の雪も去年年程ではなかつた。
古川着十一時、晝食を喫して廣瀬町に向
ふ。こゝの小學校の庭に古墳がある。今
は全体の六分の一許残つてゐる。來年迄
にはすつかりなくなるさうである。無邪
氣なタンチの群は、何も知らないで、此
上で遊び戯れるだらう。然しお前達の先
祖はこの塚に畏敬の眼をみはつてゐたの
だ。このあたりの口碑ではお椀塚だと云
ふ。この塚の入口で必要なだけの膳椀を
祈れば、翌朝、願ひ通りに置いてあつ
たと云ふ。櫻野の古墳などと共に思ひあ
はせば、この邊には有力な一部民が住んで
ゐた事は明だ。眞面の中から、優しい
山羊の様な瞳をかがやかしてゐる先生
が、この塚から出た土だらけの管玉、曲
玉を見せてくれた。桑畑の中に立つ櫻野
の古墳も見た。中は驚く可き廣い石室で
ある。先生の指顧に従へば、高堂、田中
の兩城趾がある。礎も残らない三百餘年
前の城、こゝでも矢張り征服と被征服の
争が行はれたのである。今までそのあたり

から焼けた米が発見された。どうで

其日高山公園の雪のむら消えた所で當念の寫眞を撮り、老杉古松の間からアルプ

朝日はまだ昇る前の夕陽を正面に浴びて、淡いアニリンバイオレットに輝き、

してゐた。平野屋で手足を延ばす。

去り難い高山の町を見捨てる。まだこの町に對する殘りの執着心を一位細工店

加茂川に似た宮川の流れ、せんざぎに突
き出た高瀬に京の様な香り、主二、可一

林に漂うてゐた。遊子の袖を吹く朝風が
人々と身に沁んで、旅愁が心の大洞から

水無神社では、白砂の庭を、眉雪の老神主が逍遙してゐた。

「組方は何と申しますか」生來始めて敬愛な感になつて聞く。

知りませんの」。尾の劍に似たのや、其他いろ／＼の刀類が、この拜殿に額にしてかけてあつ

福な自分達に對して、柵の外から、二つの眼が羨ましそうに眺めてゐる。かくして三井や三菱は益々肥えて行く。暮れ早い山間の夕陽は代赭色の禿山に更に赤い光を投じ、其頂の大煙突からは、亞硫酸五斯の臭が鼻を襲ふて来る。船津柿下屋着四時四十五分。その晩、坑夫達の歌ふ小原節が夜の空氣を通して震へ漂うてゐた。今日は坑夫の勘定日である。長い間の暗黒と、ショベルと汗との生活の報酬、無意義に反射爐や、熔鑄爐をかきまほしてゐたその報酬、それらが一杯の濁酒に化する日である。彼等の争鬭も賭博も、淫蕩も、何等の不合理があらう。慈善者は先づ彼等を救ふ前に裸にならなければならぬ。申譯の徒弟學校、外面だけの病院、説教所がどれだけの價値があるか。小原節は悲しく消えて行つた。

〔四月一日 船津町——高山町(九里)〕

船津はベンキの香の新しい家などの立並ぶ町である。昨夜は弦月を浴びて夕闇に立つ賣笑婦の様な凄い美をも、認めたが、今見る町は、その色の爛れ、肉の廢滅が、ひがらびた日光に暴露してゐる。

「このお社は刀剣と何か傳説の關係でもござりますか」

「さあ一向に知りませんの」

實は自分は答を求めたのではなかつた。この神主さんと一言でも口がきいたかつただけである。年さつた其身を神に捧げて静かに世をおくる彼が慕はしい。

社の左側の路を通れば宮崎への近道である。此處からいよいよ太平洋斜面である。久々野以後清冽な益田川に沿ふ。箱橋に乗つて、向岸から山刀を腰にした木樵が快くすべつて来る。四面は芽生え時の林である。脚下には益田川が泡立ち踊つて居る。人間の生命が細い一條の針金にひきかゝつてゐるのである。自分等は温い四月の陽を背に浴びて川岸の芝生に倒れた。秋原の粥川屋に入ったのが正に六時。

この夜はコンバを開いた。去年同クラスの真弓君が紋付羽織、袴、書生下駄、握太のステッキといふ異様ないでたちで、

來たので、隨分名高い様子だ。宿の十四五の女が「紋付さんは?」などつかさうに聞いてゐた。(奥田洞、橋場間の道路は大修繕の最中であつた。この間の距離は少し近くなるでせう。)

〔四月三日 萩原町——金山町(九里)〕

今日は丁度雑祭である。緋の毛氈の上におひな様が、立派な然しあまり甘さうにも見えぬ御馳走を前にして、並んでいらつしやる。自分はその前で、たゞでさへ行儀の悪い足を投げ出して、一面に亞鉛華軟膏をぬりつけた。七時十五分出發。禪昌寺をすぎて、中呂に入る。路傍の左手の小徑を二十程登れば、千羽の瀧がある。落下四十尺といふさうだが、水が少くなくて今はよくない。帶雲橋を渡つてから中山七里に入るるのである。龜岩破劍岩箱岩が碧潭の中に佇み、屏風岩、羅漢岩が松の間に隠現する。前岸には、強い風力に延び難い、古木が蒼苔をおびて樹幹を打てば憂となる趣がある。枯れたるは樹皮剥れ去りて、宛然白骨の立てるが如く云ふべからざる雅致がある。孝子左近が美らしい傳説と結びつけられてゐる。

のは一群の松の間にある孝池水である。

蕨峰の楓は、京の高雄山から持つて來た
さうだ。濃飛境橋を渡つて金山に着いた
のが六時十分。夜は別れのコンバを催し
た。隣家では絶歌の音が喧しい。疲勞は

直ぐ快い眠を伴ふた。

四月四日 金山町 大山町 (徒歩六

里舟路六里)

都へ都へーと心の中で或者が叫ぶ。

人いきりの香もあの都の塵も懷かしい。

嫌いな人間の顔ももう一度しげくと眺

めたい。こんな衝動の爲にか朝は割合に効

早く起きた。昨夜の肉刺療治は立派に効

があつた。淨蓮寺塔を越える筈だったの

がつい行き過ぎて長洞峠を経て、室洞

に達した。水昌山の木の間からは時々山

男が首を出す。彼等の哀傷的な歌聲が耳

の底にへりつく。下麻生着午前十一時

四十分。此行は最初から最終まで水に附

纏ひ、今日は其中でも最も痛快な木曾川

下りである。一日には日本アルプスの姿

を飽かず眺めた。今は所謂日本ラインを

下るのた、櫛の一突で舟は危い岩をよけ

て矢の様に下る。左岸は新緑の中に躊躇

が點綴する。笠岩、岩など誠に奇岩怪石亂

立懐臥の間に水は激して瀧津瀧となり滝

つて碧潭をなしてゐる。少し下れば河床

皆石で繋々の流音を耳にし、静かな所は、

自分の舟の進む音すら聞えない。前には、

廣い尾張の野と午後四時の太陽をバッハ

クにして綠島が見える。太田以後は河幅

廣くなり流れゆるくなつた。廣い川の

彼方には夕日を背にして天主閣がキツキ

立つて居る。到底自分等では此繪卷物を

寫すことは出来ない。誰に對しても、行

つて見てきてごらんなさい云ふより仕

方がない。大山に上陸してから、櫻花の

トンネルをくぐつた。それから後は、汽

車と電車である。最早徒步者は黙すべき

時である。(七・五・二三・櫻田常久)

尚この行は高畠先生の作つて下さつた

旅程によつて行つたのである。自分の様

な怠情な、且つ責任觀念の殆ど缺如した

廢人があつた。これだけの事をなし得たのは、

今から見れば奇績の様だ。周到な豫定表

をお作り下さつた高畠先生及び私をして

今、この心もそゝり立つ様な追憶に導き

	金澤笛津間汽車賃	九〇錢	同
第一日 長井屋	四五錢	五五錢	
第二日 柿下屋	六〇錢	七〇錢	
第三日 平野屋	五五錢	七〇錢	
第四日 蜂屋	五〇錢	七〇錢	
第五日 早川屋	六〇錢	七〇錢	
第六日 下麻生大山間一行	同	同	
全部の舟賃	同	同	
大山名古屋間	同	同	
電車賃	三九錢	同	
名古屋金澤間	同	同	
汽車賃	二圓十七錢	同	
大山名古屋間	同	同	
電車賃	同	同	
全般の舟賃	同	同	

第二回 (六年) 第三回 (七年)

下さつた他の六の方々に深い御禮を申上ます。本誌の第八十號には著者哲人生子君の記録があるから細しくは、そちらの方をごらん下さい。

御参考の爲に前年と經費を比較して置

きます。

六號雜感

フランシスコ・ゴヤニ就て

曝露の快感

根本

三枚の挿繪のうちマンチラを被れるアルバ夫人、一枚のセビア畫は Goya y Lucientes によつてなる。巻頭のゴヤの首は Mariano Benlliure y Gil によつて作られた。

ゴヤの作は實に高きを行つてゐる。彼の作のあるものには

刺すやうな皮肉があつた。深き寓意があつた。彼は天才であつた。彼の個性は光つてゐた。いちどるしく革命的であつた。

一七四六年ファエンティデスに生れ一八二八年ボルドーで死んだ。一七九〇年頃に描いた「チャーチス四世」一七八七年につくつた「ザ・スワイング」一七九三年の「ゴヤとアルバ公夫人」一七九九年の年代を持つ「裸体のマーハ」着物を着たマーカーその他「ユダの反逆」「闘牛」等は一般に彼の傑作であると云はれる。然し更によきものはまだある。

彼には數多きエッチングがあつた。又銳きデッサンもあつた。今度の挿繪には一枚のセビア畫を使つた。愛きものである。(イサク)

或る法律家の言である。我々は、飽くまで秘密を掩はんとする。

て、絶えずそれを曝露しようとする衝動に馳られる。何人もその犯した罪悪に就て、下等動物の前に於て羞恥を感するといふことはあるまい。然し白癡の前へ出るさきには多少それを感する。そして自己を理解する人であればある程、その前へ出ればその感を深くする。偶然に、或は單なる好奇心から、異常な快感の餌食となつて思はず戦慄する。

○ルツォナはその懺悔録その他の告白書を、何人も嘗て試み

なかつた露骨な赤裸々な態度で書いた。彼は voluntary humanization の好例として考へられる。私は彼がその際に本能的満足を飽食したであらうことと羨む。

○クラフト・エビング氏の挙げた多くの變態性欲の實例の中で、一番同情を持ち得るのは Exhibitionismus 患者の心理である。曝露に伴ふ快感が遺憾なく誇張擴大されてゐる。それを讀んだ時私は、自分も亦同じ系統の精神病者が知らとさへ考へた。

水田の蛙をさゝながら

山崎

今度はいろいろ差支があつて私はちつとも編輯には携はら

る自己の手腕に疑問を持つ必要もなく、本當の好い作品が書ける事と想ふので、私は一般の學友諸君に遲疑せず筆を取つていろいろな作品を發表する事をおすゝめしたい。

□

三年の高等學校生活は非常に文科的である。殊に一部はさ

うだ。何も格別學力と云ふ程のものは蓄へた氣はせぬが、しかしほんやりしてゐる間に、理想の世界と實際の社會の狀態を比較して眺めてゐて、味得したところは尠くなかつたように思ふ。理想を追求する力も現實を把握する力もまだ一覺束ないものではあるが、之を綜合して漠然としてはゐるがある大づかみな見識のよう者が出來てゐて、これからの生活に正しい進路を示すようと思はれる。何一つ學力と云ふうな者がつかなかつたのを遺憾とすると同時に、安全な自由な生活を保證して、三年間勝手な事を考へさせて呉れた學校に感謝する。

□

金澤の穏やかな風景にももうお別れだ。今夜は五日ばかりの月が宵の空にかゝつて郊外の耕地は清涼な初夏の夜の香ばしい影氣に浸されてゐる。書齋の窓から薄明るい崖下の田園になく蛙の聲をきゝながら筆を擱く。六、一四、

なかつた。作も生新しい材料を唐突に書き下ろして見たので、生硬な藝術品とは云はれない者になつてしまつた。それにまた特殊性をも充分現はす能力のないことを證據だてて恥かしく思つてゐる。ほかには發表を躊躇する理由もあつたが、折角書きかけたものを葬るのも惜しくて、とうと出すことになった。直したいところもあつたが、ひまがなくて間に合はなかつた。

日本の文壇も追々自由になつて来て、いろいろ型を離れた作品が見られるようになつた。藝術と型の問題はむつかしい問題だが、しかし藝術としては未完成でも、特殊性を持つた眞實を把握した作品は、どんなに低く見積つても存在の價値はあると思ふ。私達の生活はほとんど小説になるような材料は持つてゐないのを普通とする、しかしどんな生活でも、深い觀照の眼を以て見つめれば、盡きぬ味はひを示して来るだらう。メロドrama 的なものでなければ作にならないと云ふような考はもう捨てゝも好いと思ふ。さうしていろんな人が纏はれない態度で、眞實な生活のドキュメントを發表するつもりになつたら、此雑誌にも面白い者が多く見られるようになるだらうと思ふ。勿論幼稚なものは御免だ。濃艶を通り越した平淡さ、初步の無反省な作品を、こつちやにしてはならぬ事は云ふ迄もない。たゞどんな人でも優れた靜觀の態度を取ることの出来る頭脳を持つ人は、別に藝術的効果を擧げ

□

□

○時は止まらぬ。人間の力も止まらぬ。

私は静かであつた。しかし私の力はとゞまらなかつた。私は絶えず、何かをこゝろがけてゐた。私はそしてよろこんでこを去ることが出来る。

○私はリカードの地代説をおもしろく考へつゝ讀んでゐる。いろんなことを考へて来る。そして無車さんの新らしき村のことを考へてゐる。それから自分達が生活してゐる村とか町とか都とかのはじまりに達して行く。そして私は深き深きところに達してゐる。喜んでゐる。すべての立派な仕事はきつと完全にゆく。

○私は經費が許るしたらゴヤの「それはもつと悪い」を入れりはもつと入れたい氣がした。私はこれからも挿繪のあることを希望する。特にそのことを青山君にお願ひして置く。

(イサク)

編輯室にて

156 1552

役割をキメてやらねば大變困ることがある。なにしろ君達の時代を私はうれしく待つ。

○その次の仕事をする人達へ。その次の時代の人はこの次の時代の人より更によきことを心懸げよ。キエンをはくな。くだらないところでイベルな。(十八日)

○各務君の原稿はおあづかり。

○遠足部の若狭丹波の記事はおあづかり。

○小山田君の歌から八首戴く。

○安島君の手紙と詩から詩の方を戴く。

○青山君のミケル・アンデエロかホイットマンを待つたが、ダメになつた。

○今度は根本君と石川君とのお世話になつた。キリモリの責任は私にある。(イサク)

○おあづかりの原稿はすべてひとまごめに青山君に渡してをります

○次に仕事をする委員達へ。今度の仕事は私には、始めての自由であった。編輯は一人でいい。ニアキラカにおもつた。澤山ぬでケズケズ相談しなければならぬのは隨分窮屈だ。

仕事の上から云つても、佳きものは出来ぬことをアキラカにした。私はどこにゐても、いゝ雑誌をみたい。ミンナ仲よく胸をうちひろげ力めて戴きたい。私の一存ではあつたが今後の美術紹介と仕事のことは青山君にお頼みした。ミンナして青山君を扶けてよくして呉れることを希望する。

編輯は一人でいい。他の仕事——原稿をあつめるこそ、掲示をすること、よき作品をこころがけること、——は夫々が今後も美術紹介と仕事のことは青山君にお頼みした。ミンナして青山君を扶けてよくして呉れることを希望する。編輯は一人でいい。他の仕事——原稿をあつめるこそ、掲示をすること、よき作品をこころがけること、——は夫々

○イマに私は印刷機を一臺買ふ。そして自分のものを自分が刷り(大部のものは困るが)ナカマのものと働く覺悟である。今のところナカマは一人もない。然しキットある氣がする。

○あゝ。この道にあつて私は私を指導して下さる師を欲してゐる。(十九日。伊作)

○私は淋しいかもしだ。しかし私は心のどこかで確にニギヤカだ。雨が降つても太陽は照した。雲がかゝつてもその雲の奥で太陽は照つた。太陽はめぐみつゞける。太陽は反対的でない。アリのまゝにある。ちつともイバラないで仕事もつゞけてゐる。

○私は印刷機を一臺買ふ。そして自分のものを自分が刷り(大部のものは困るが)ナカマのものと働く覺悟である。今のところナカマは一人もない。然しキットある氣がする。

○あゝ。この道にあつて私は私を指導して下さる師を欲してゐる。(十九日。伊作)

注意

- 原稿は本會所定の用紙に認むべし
- 作品の種類は作者の自由たるべし
- 締切期日は厳守すべし

大正七年六月二十日 印刷納本 第八拾貳號

石川縣金澤市早道町五十六番地

編輯兼發行者

吉

村

政

行

【すら賣に市】

印 刷 者

生

沼

倍

男

印 刷 所

明治印刷株式會社

發行所

第四高等學校北辰會

北辰會雜誌 大正七年六月日 二十印行 第八十二號